吉竹遺跡

1987

石川県立埋蔵文化財センター

吉　竹　遺　跡

１９８７

石川県立埋蔵文化財センター

序　　文

小松市域を貫流する最大の河川である梯川の上流には、かつて尾小屋鉱山の繁栄があった。戦後の特需景気の際に最後の好況を呈したものの、今は廃坑となり、近世・近代の産業遺跡としてその姿をとどめている。鉱石の採掘は断ったが、梯川の流域一帯にカドミウムなどによる水田汚染という大きな後遺症を残している。梯川の流域は、市域の中でも、各時代の遺跡が集在する地域でもある。汚染田の改良工事にあたっては、幾多の遺跡の破壊を招くこととなり、当センターが中心となり、工事に先立って発掘調査を続けてきた。吉竹遺跡の発掘もその一つである。

調査範囲すなはち工事で破壊される面積は、関係機関との調整の結果、最小の範囲でとどめられた。だから検出した遺構も一条の溝状の遺構に過ぎなかったが、これに伴う弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器を中心とした好資料多数を得ている。

考古学研究で最も関心の高かまりをみせるのは、時代の転換期に関する諸問題についてであろう。弥生時代から古墳時代への移行は、社会的な大きな変革を一つの基準としている。変革は地域によって現れ方にかなりの差があり、社会の変化を考古学的に見極めることは、たやすく為し得ることではない。土器に現れる変化は、社会の動静をある程度反映するものであり、これへの観察によって、他地域間との関係を推測し、社会の動向を追跡することも可能だと考えられる。

弥生時代の後期から終末のころにかけて現れるスタンプ文土器は、中国地方東部・近畿地方から北陸にかけて顕著にみられる極めて特徴的な土器装飾手法である。スタンプ文は、単なる飾りではなく、それぞれが、特定の意味をもつ祭祀的な文様と考えられ、この文様を施す土器自体も祭事に当たって用いられたものとみられる。本報告書では、スタンプ文の分類と分布の状況を検討し、北陸地方におけるスタンプ文土器のもつ歴史的な意義を追求しようと試みている。

前述のように、土器には社会の動きを示す情報も秘められている。土器をいろいろの角度から詳しく観察し、さらに分布的考察を加えることにより、内在する情報を最大限に引き出し、語らせるのが発掘に携わる者の一つの使命だともいえよう。

吉竹遺跡の発掘は、比較的小規模なものであり、とくにマスコミに取り上げられ話題となったものではない。しかし、ここで出土した一点のスタンプ文が注目され、弥生時代後葉の土器群への一つの視点を示す成果を挙げている。考古学上の成果とは、このような地道な資料観察の累積から構成されるものなのである。

当遺跡の調査や出土品整理には、多くの方々の献身的なご協力を戴いている。上記の成果もこの協同作業に支えられてのことである。心からお礼を申し上げたい。

石川県立埋蔵文化財センター
所長 橋　本　澄　夫

例　　言

1　本書は、石川県小松市吉竹(よしたけ)町所在の吉竹遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、県営公害防除特別土地改良事業に係るもので、石川県農林水産部耕地整備課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが、昭和58年度(第1次調査)と昭和59年度(第2次調査)に実施した。調査および報告書刊行に係る費用は、第1次調査について文化庁の補助を受けたほかは、すべて県耕地整備課が負担した。

3　調査期間および調査担当者は下記のとおりである。

第1次調査　期間　昭和58年9月7日～9月26日

調査担当者

浜野伸雄(当時埋蔵文化財センター主事、現在県立町野高等学校教諭)

田中孝典(当時埋蔵文化財センター調査員)

第2次調査　期間　昭和59年7月31日～8月11日

調査担当者

湯尻修平(埋蔵文化財センター主査)

栃木英道(当時埋蔵文化財センター調査員、現在埋蔵文化財センター主事)

4　遺物整理は、社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会(担当――村沢仁雄、小野澄江、前田すみ子、小屋玲子、小谷紀美子、小林直子、馬場正子、山岸康子、勝島栄蔵)に委託した。

5　本書の編集は、下記執筆者各員との協議のもと、田畑　弘(埋蔵文化財センター調査員)の協力を得て栃木がおこなった。

6　本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章、第4章第1節・第2節・第3節1、第5章……栃木英道

第2章、第3章第2節、第4章第3節2……湯尻修平

第3章第1節……浜野伸雄

第1次調査出土土器観察表、第2次調査出土土器観察表……田畑　弘

7　本書における挿図等の扱いは下記のとおりである。

(1)　挿図中の方位は原則として磁北である。方位を付していないものは、天地の軸を南北(上が北)にとっているが、第42図についてはその限りではない。

(2)　挿図中の水平基準の数値は海抜高(単位m)である。

(3)　挿図中の縮尺については、原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。

(4)　本文中の註はすべて章末に掲げた。

8　本調査の遺構・遺物の実測図・写真、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目　　次

頁

例　言……iii

第1章　位置と環境 ……(栃木英道)… 1

第1節　地理的環境……1

第2節　歴史的環境……1

第2章　調査の経緯と経過……(湯尻修平)… 5

第1節　調査に至る経緯……5

第2節　第1次調査の経過……7

第3節　第2次調査の経過……7

第4節　第3次調査の経過……8

第3章　第1次発掘調査 ……9

第1節　発掘調査区と基本層序……(浜野伸雄)… 9

第2節　出土土器……(湯尻修平)…12

第4章　第2次発掘調査 ……15

第1節　発掘調査区と基本層序……(栃木英道)…15

第2節　遺　構……(栃木英道)…15

第3節　遺　物……19

1　弥生土器・土師器……(栃木英道)…19

2　縄文土器・須恵器ほか……(湯尻修平)…28

第1次調査出土土器観察表……(田畑　弘)…56

第2次調査出土土器観察表……(田畑　弘)…57

第5章　考　察 ……(栃木英道)…65

第1節　はじめに……65

第2節　「月影式」土器をめぐる編年的な問題について……65

第3節　スタンプ文について……72

第4節　おわりに……85

挿 図 目 次

頁

第１図　吉竹遺跡の位置（Ｓ＝1/2,000,000）…… 1
第２図　吉竹遺跡および周辺の遺跡
（Ｓ＝1/25,000）…… 2
第３図　発掘調査区位置図（Ｓ＝1/5,000）…… 6
第４図　第１次調査区模式図（Ｓ＝1/1,000）…… 9
第５図　第１次調査区土層断面図（Ｓ＝1/60）…10
第６図　第１次調査トレンチ調査区土層断面図
（Ｓ＝1/60）……11
第７図　第１次調査出土土器（Ｓ＝1/３）……13
第８図　第１次調査出土土器（Ｓ＝1/３）……14
第９図　第２次調査区模式図（Ｓ＝1/1,000）……15
第10図　第２次調査区土層断面図（Ｓ＝1/60）…16
第11図　第２次調査区平面図（Ｓ＝1/200）…17・18
第12図　第２次調査出土弥生土器・土師器
形式一覧図１（Ｓ＝1/6）……21
第13図　第２次調査出土弥生土器・土師器
形式一覧図２（Ｓ＝1/6）……25
第14図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……30
第15図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……31
第16図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……32
第17図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……33
第18図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……34
第19図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……35
第20図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……36
第21図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……37
第22図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……38

頁

第23図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……39
第24図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……40
第25図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……41
第26図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……42
第27図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……43
第28図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……44
第29図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……45
第30図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……46
第31図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……47
第32図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……48
第33図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……49
第34図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……50
第35図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……51
第36図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……52
第37図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……53
第38図　第２次調査出土土器（Ｓ＝1/3）……54
第39図　第２次調査出土縄文土器・須恵器ほか
（Ｓ＝1/3）……55
第40図　北加賀の第Ｖ様式期の
中型・大型器台……70
第41図　スタンプ文諸形式模式図 ……73
第42図　スタンプ文施文土器の分布 ……76
第43図　Ｄ類スタンプ文形式分類図 ……79
第44図　石川県のスタンプ文等
施文土器の分布……81
第45図　石川県出土スタンプ文等施文土器……84

表 目 次

頁

第1表 周辺遺跡一覧表……3

第2表 県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査一覧……5

第3表 第1次調査出土土器観察表……56

第4表 第2次調査出土土器観察表(1～8)……57～64

第5表 弥生土器・土師器編年案比較対照表……66

第6表 スタンプ文施文土器出土地名一覧表……75・76

第7表 石川県出土D類スタンプ文施文土器一覧表……82

図 版 目 次

本文対照頁

図版第1 遺跡とその周辺(1947年撮影)……1

図版第2 第1次調査 上 清掃作業状況(東より) 中 実測作業状況 下 土器出土状況……9

図版第3 第1次調査 上 発掘作業状況
下左 完掘状況(西より) 下右 トレンチ調査(南より)……7・9

図版第4 第2次調査 上 溝状遺構土器出土状況(南より) 下 発掘作業状況……7・15

図版第5 第2次調査 上 8区たちわり調査状況 下 調査区平面図作成作業状況……7・15

図版第6 第2次調査 上 土器出土状況(2区土器群6、東より)……15
中 土器出土状況(4区土器群8、東より)
下 土器出土状況(6区土器群13、西より)

図版第7 第2次調査 上 土器出土状況(6区土器群14、西より)……15
下 土器出土状況(7区土器群18、西より)

図版第8 第2次調査 上 土器出土状況(9区土器群23、西より)……15
下 土器出土状況(10区土器群25、西より)

図版第9 第2次調査 上 土器(35-268、38-325他)出土状況(7区土器群16、西より)……15
下 土器出土状況

図版第10 出土土器 第2次調査出土弥生土器・土師器……19

図版第11 出土土器 第2次調査出土弥生土器・土師器……19

図版第12 出土土器 第2次調査出土弥生土器・土師器……19

図版第13 出土土器 第2次調査出土弥生土器・土師器……19

図版第14 出土土器(第1次弥生土器・土師器、第2次縄文土器・弥生土器)……12・28

図版第15 出土土器(須恵器)……12・28

図版第16 出土土器(須恵器)・古銭……12・28

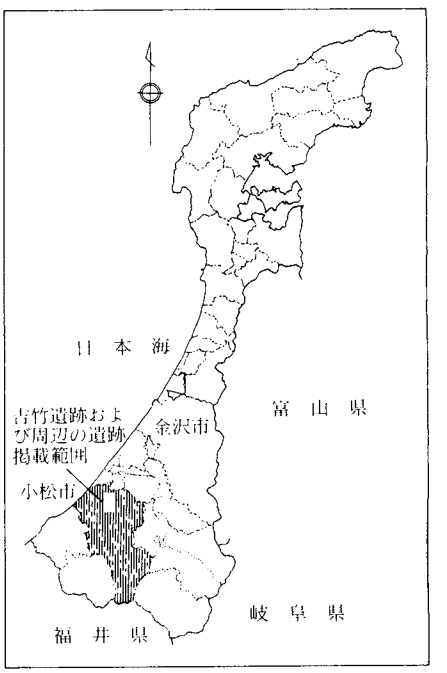
第1章　位置と環境

第1節　地理的環境(第1・2図)

吉竹遺跡は、石川県の西南部に位置し、県内第2の人口(10万余人)を擁する小松市に所在する。小松市は面積約375㎢を測り、南は福井県、西は山中町・加賀市、東は白峰・尾口・鳥越の三村、北は辰口・寺井・根上の三町に接し、西北は日本海に面している。

市内は、地形的には東南部の丘陵・山岳地帯と西北部の沖積平野部に二分される。前者は能美江沼丘陵の一部をなす小松東部丘陵、能美山地・大日火山地などよりなり、後者は加賀平野の一部をなす小松江沼平野よりなる。平野部はさらに梯川流域、加賀三湖と称される柴山潟・木場潟・今江潟周辺の低湿地に概ね二分でき、日本海に面して小松砂丘が発達している。

このうち加賀三湖は、海水準の低下と土砂の埋積によって現在の平野部が陸化した際、かつての入江が海跡湖となりさらに海と隔絶されたもので、柴山潟・木場潟はそれぞれ今江潟へ連なり、今江潟は梯川を経て日本海と結ばれている。昭和27年(1952年)以降の干拓事業によって、今江潟は全面(238ha)、柴山潟は約6割(343.2ha)が干拓されたが、木場潟は規模を若干縮小した(現在114ha)ものの、比較的往時の姿をとどめている。

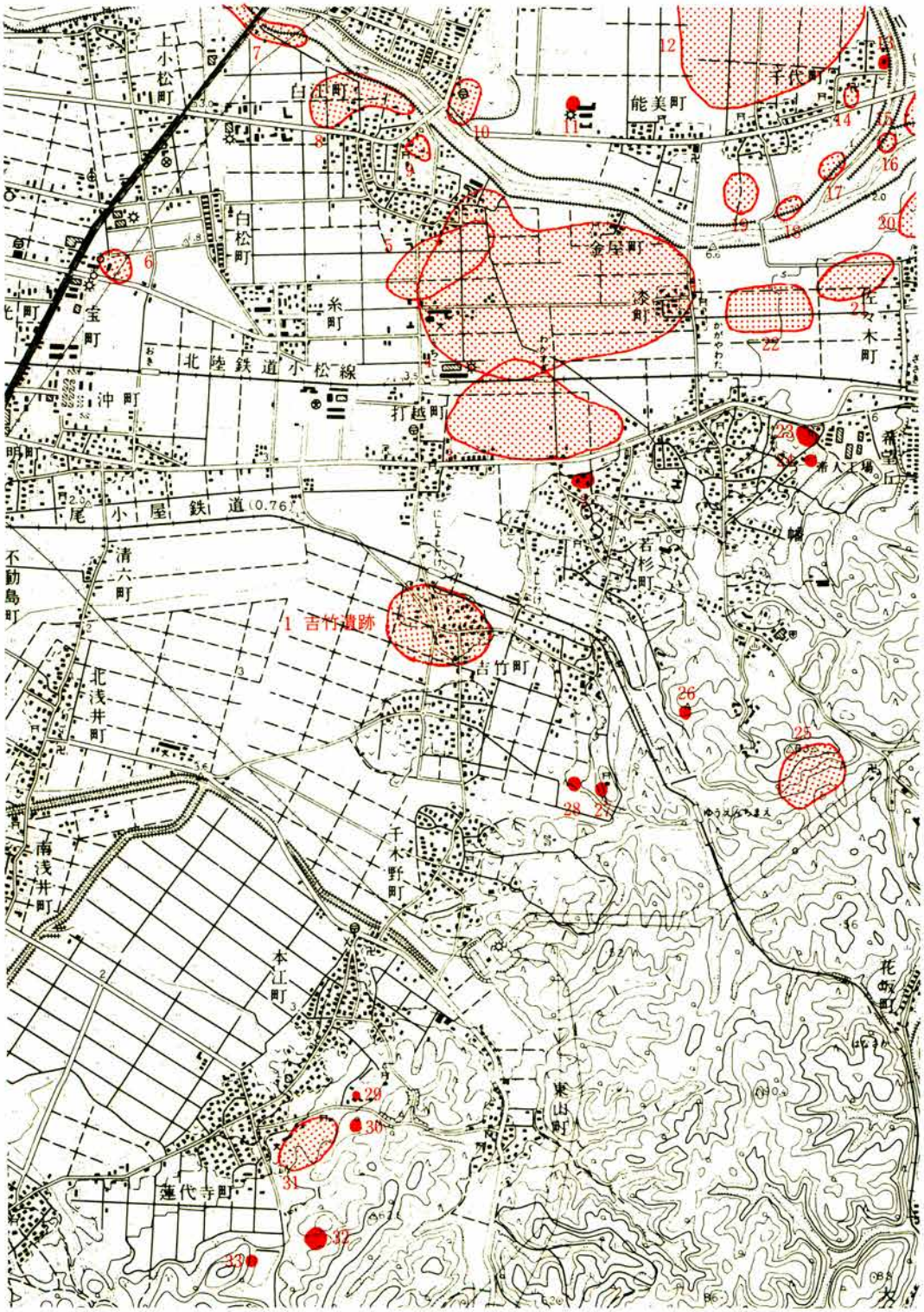


第1図　吉竹遺跡の位置(S＝1/2,000,000)

一方、吉竹遺跡が所在する小松市吉竹町は、明治5年(1872年)に吉竹村として石川県に所属、浅井村(明治22年・1889年～)、苗代村(明治40年・1907年～)を経て、昭和15年(1940年)小松市に編入されたもので、小松市内を地形的に二分する丘陵地帯と沖積平野との境界部分に位置している。遺跡の中心部は、現在の集落と重複する標高3～7mを測る微高地上にあり、背後(東南方向)に連なる小松東部丘陵の最前縁部にあたる。北方には梯川周辺の沖積平野、西南方向には木場潟周辺の低平地が広がっている。

第2節　歴史的環境(第2図・第1表)

第1次および第2次発掘調査の結果、吉竹遺跡は、縄文時代・弥生時代後期～古墳時代・平安時代～中世の各時期にわたって、断続的に営まれた複合集落跡と考えられる。このうち、遺物の



第2図　吉竹遺跡および周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第1表　周辺遺跡一覧表

（番号は第2図と符合する）

番号	遺跡名	種別／時代	番号	遺跡名	種別／時代
1	**吉竹遺跡**	**包含地／縄文～古墳・平安・中世**	17	横地遺跡	包含地／縄文
2	若杉古窯跡	窯跡／江戸	18	本村遺跡	〃／古墳
3	打越遺跡	包含地／弥生～中世	19	千代マエダ遺跡	〃／古墳～平安
4	漆町遺跡	〃／〃	20	佐々木アサバタケ遺跡	〃／弥生～中世
5	念仏寺塔遺跡	〃／〃	21	佐々木ノテウラ遺跡	〃／〃
6	上小松遺跡	〃／平安	22	佐々木遺跡	集落跡／平安
7	平面梯川遺路	〃／弥生	23	八幡大塚古墳	古墳／古墳
8	白江梯川遺跡	〃／弥生～中世	24	八幡行者塚古墳	〃／〃
9	白江堡跡	館跡／室町	25	浄水寺跡	寺跡／平安・中世
10	一針遺跡	包含地／縄文	26	若杉オソボ山1号窯跡	窯跡／古墳後期
11	定地坊跡	寺院跡／室町	27	釜谷古墳	古墳／古墳
12	千代オオキダ遺跡	包含地／奈良～中世	28	幡生1号古墳	〃／〃
13	小野町遺跡	〃／古墳	29	本江窯跡	窯跡／江戸末期
14	千代城跡	城跡／室町	30	蓮代寺A遺跡	製鉄跡／不詳
15	古府遺跡	包含地／平安中期	31	蓮代寺跡	寺院跡／中世
16	フドンド遺跡	集落跡・経塚／平安	32	蓮代寺製鉄跡	製鉄跡／不詳
			33	蓮代寺ムコンヤマ1号窯跡	窯跡／〃

（第2図赤塗表現の遺跡は古墳・窯・製鉄跡であるが、№11・13はその限りではない。）

量としては、弥生時代後期～古墳時代前期に属するものが圧倒的に多く、次いで古墳時代後期、平安時代～中世の順となる。縄文時代に関しては、土器が1点（第39図1）出土しているだけで遺跡の性格は不明である。以下、縄文時代から順に周辺の遺跡を概観する。

吉竹遺跡周辺の遺跡で、縄文時代に属するものとしては、一針遺跡（第2図・第1表10、以下同様）、横地遺跡（17）があげられる。前者からは磨製石斧、後者からは後期に比定される土器片が出土しているが、詳細は不明である。また、距離はやや遠くなるが、本遺跡の南西約2.5kmのところに三谷遺跡が所在する。同遺跡は木場潟に面し、本遺跡に類似する立地状況にある。このほか、縄文時代の代表的な遺跡として、大谷山貝塚（南西約6 km、前期）、軽海西芳寺遺跡（東北東約3 km、中期）、中海遺跡（東約4 km、中期）があげられる。

弥生時代に入ると、主として梯川周辺で遺跡数が激増する。打越遺跡（3）、漆町遺跡（4）、念仏寺塔遺跡（5）、平面梯川遺跡（7）、白江梯川遺跡（8）、佐々木アサバタケ遺跡（20）、佐々木ノテウラ遺跡（21）などがそれである。時期的には後期に属する遺構・遺物が多く、前期～中期のものは少ない。これらの遺跡のほとんどは、弥生時代～中世（・近世）に至る複合集落跡である。このほか、弥生時代の代表的な遺跡に八日市地方遺跡（西北西約2 km、中期～後期）がある。同遺跡は、「小松式」土器（中期）の標式遺跡である。

古墳時代になると、上述の複合集落跡のほかに、小野町遺跡（13）、本村遺跡（18）、千代マエダ遺跡（19）が存在するようになる。梯川周辺では、古墳時代前期の遺跡の密度がとりわけ高く、古墳時

代後期から奈良時代にかけての遺跡の希薄化とは対照的である。この時期、丘陵部に八幡大塚古墳(23)、八幡行者塚古墳(24)、釜谷古墳(27)、幡生1号古墳(28)などが出現する。このうち、八幡大塚古墳は前方後方墳の可能性があり特筆される。なお、古墳時代後期に属する窯跡として若杉オソボ山1号窯跡(26)が丘陵部に立地するが、土取りのために消滅している。

奈良時代には、千代オオキダ遺跡(12)が新たに出現するようであるが、全体的には古墳時代後期からひき続いて、遺跡の数や規模は減少・縮小したままであり、周辺が再び活況をとりもどすのは、平安時代も中頃になってからである。平安時代には、上小松遺跡(6)、古府遺跡(15)、フドンド遺跡(16)、佐々木遺跡(22)、浄水寺跡(25)の各遺跡が確認でき、先述の複合集落跡においても、遺構・遺物は増加に転ずる。なかでも浄水寺跡は、平安時代後期から寺院としての造成が始まり、室町時代後期にいたるまでの約500年の間営まれ続けたもので、そうした寺院が文献にも登場せず、地元に残された伝承をもとに発見されたことで、当時各方面に大きな衝撃を与えた。

中世においては、前述の複合集落跡のほかに、白江堡跡(9、館跡)、定地坊跡(11、寺院跡)、千代城跡(14、城跡、東西36m・南北54m)、蓮代寺跡(31、寺院跡)の城館跡・寺院跡が知られているが、詳細不明のものが少なくない。

近世については、遺跡(集落跡)の実態把握が不十分でその動向はよくわからない。わずかに若杉古窯跡(2)、本江窯跡(29)が周知されているのみである。このほか、時期不詳の遺跡として、連代寺A遺跡(30)、蓮代寺製鉄跡(31、ともに製鉄跡)、連代寺ムコンヤマ1号窯跡(33、かんがい用ため池によって一部破壊)がある。

以上、吉竹遺跡周辺では、縄文時代から近世にいたる各時代の遺跡が存在するが、その分布は一様なものではなく、地理的にも時期的にも偏りや変化を示しながら推移する。遺跡の出現や廃絶、停滞や隆盛の要因等については、個別遺跡や個々の時代の検討だけでなく、遺跡間相互の関連性を重視しながら、全期間を通じて進められるべきものであろう。木場潟周辺に位置する数少ない遺跡のひとつである吉竹遺跡も、今後そうした観点からその性格を掘り下げていく必要があると考える。

参考文献

浅香年木・田川捷一・他　『角川日本地名大辞典』　17　石川県　角川書店　1981年　東京。
垣内光次郎　「小松市浄水寺遺跡発掘調査の概要」『拓影』　第17号　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。
『石川県能美郡誌』　石川県能美郡役所　1923年　石川県小松町(現小松市)。
『石川県遺跡地図』　石川県教育委員会　1980年(1986年一部改訂)　金沢。

第2章　調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯(第2表)

石川県農林水産部は、昭和52年度から公害防除特別土地改良事業を実施している。県耕地整備課と県小松土地改良事務所が主管となって、梯川流域地区の鉱業汚染土を除去するのが目的である。事業概要によれば、「鉱山活動の排水に含有された特定有害物質(カドミウム、銅)により、農用地土壌が汚染され、人の健康をそこなう恐れがある農作物が生産され、又はそれらの恐れが著るしいと認められる農用地及び農作物の生育阻害の恐れが著しいと認められる農用地に対し、客土を行い、カドミウム汚染米の生産を阻止し、銅地域については減産防止を図り、農家の生産に対する不安解消及び農業生産性の維持を図る。」とある。梯川流域地区の459.7ha対象として、汚染土の除去と客土工事及び水田の区画整理が事業の主な工事内容となっている。

埋蔵文化財センターでは、当該事業にかかる埋蔵文化財の発掘調査を継続して実施してきている。昭和53年度以降、小松市教育委員会の協力も得て、9遺跡の調査を実施した。発掘調査は那

第2表　県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査一覧

調査年次	遺跡名及び調査区	所在地	調査面積	調査主体	文献
昭和53年度	桃の木山1号窯跡	小松市那谷町	500㎡	小松市教育委員会 石川県教育委員会	1
昭和54年度	漆町遺跡白江ネンブツドウ東地区	小松市白江町	700	埋蔵文化財センター	2
	漆町遺跡白江チョウジャワリ地区	小松市漆町・白江町	300	〃	2
	西芳寺遺跡	小松市軽海町	500	〃	⑦
昭和55年度	漆町遺跡金屋ヤシキダ地区	小松市金屋町	2,900	〃	2
	漆町遺跡漆ゴタンダ・ドブ地区	小松市漆町	700	〃	2
	漆町遺跡漆フルミヤ地区	〃	6,000	〃	2、⑧
	漆町遺跡漆ヘゴジマ地区	〃	3,300	〃	2、⑧
	その他の漆町地内調査区	〃	1,000	〃	2
	漆町遺跡白江チョウジャワリ地区	小松市白江町	7,300	小松市教育委員会	2
	桃の木山2号窯跡	小松市那谷町	500	〃	
昭和56年度	漆町遺跡白江ネンブツドウ南地区	小松市白江町	2,200	〃	2
	漆町遺跡漆C地区	小松市漆町・若杉町	3,000	〃	2、⑧
	漆町遺跡漆チュウデン地区	小松市漆町	1,000	埋蔵文化財センター	2
	漆町遺跡金屋サンバンワリ地区	小松市金屋町	9,000	〃	2
昭和57年度	白江梯川遺跡	小松市白江町	160	〃	3
	那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	2,500	〃	5
昭和58年度	白江梯川遺跡	小松市白江町	3,400	〃	5
	那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	2,000	〃	3、5
	吉竹遺跡	小松市吉竹町	100	〃	本書
昭和59年度	漆町遺跡若杉ヤシキワリ地区	小松市若杉町	600	〃	5
	那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	4,500	〃	4、5
	白江梯川遺跡	小松市白江町	2,900	〃	5
	佐々木A（アサバタケ）遺跡	小松市佐々木町	3,000	〃	5
	佐々木B（ノテウラ）遺跡	〃	3,100	〃	⑥
	吉竹遺跡	小松市吉竹町	100	〃	5、本書
昭和60年度	軽海遺跡	小松市軽海町	1,500	〃	⑦
	佐々木A（アサバタケ）遺跡	小松市佐々木町	4,200	〃	
	漆町遺跡白江ヤシキワリ地区	小松市白江町	100	〃	
昭和61年度	漆町遺跡白江ヤシキワリ地区	〃	7,200	〃	

文献の数字のうち○印で囲んだものは、調査報告書の既刊行を示す。

谷桃の木山窯跡群、白江念仏堂遺跡、漆町遺跡群、白江梯川遺跡、那谷金比羅山窯跡群、吉竹遺跡、佐々木A(アサバタケ)遺跡、佐々木B(ノテウラ)遺跡、軽海遺跡の合計約77,000m²について昭和61年度までに完了している。特別土地改良事業は、昭和63年度まで実施の予定であるから、あと最低2カ年はそれに伴う発掘調査の実施と、遺物整理、調査報告書の刊行作業が継続される見込みである。

文 献 一 覧

(1) 宮下幸夫 『小松市那谷町桃の木山一号窯』 石川県教育委員会 1979年 金沢。

(2) 田嶋明人・越坂一也・小村 茂・他 『漆町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1982年 金沢。

(3) 浜野伸雄 「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『拓影』 第13号 石川県立埋蔵文化財センター 1983年 金沢。

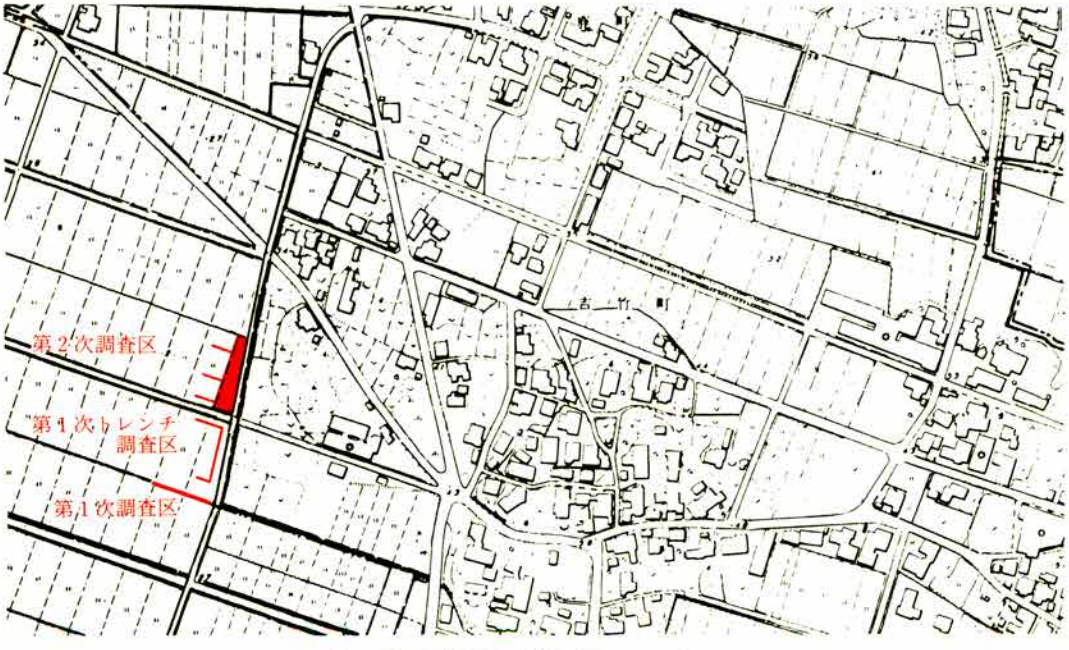
(4) 福島正実 「那谷金比羅山窯跡群第3次調査と銘文須恵器」『拓影』 第16号 石川県立埋蔵文化財センター 1984年 金沢。

(5) 米沢義光・福島正実・北野博司・山本直人・中島俊一・谷内尾晋司・湯尻修平 『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター 1984年 金沢。

(6) 新城えり子・北野博司・本田秀生 『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 金沢。

(7) 藤田邦雄・戸澗幹夫・横山貴広 『軽海遺跡 県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 金沢。

(8) 田嶋明人・越坂一也・山本直人・新城えり子・田中孝典・横山そのみ 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 金沢。



第3図 発掘調査区位置図 (S=1/5,000)

第2節　第1次調査の経過

県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区吉竹工区の施工計画について、協議が行われたのは、昭和57年度であった。事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である、吉竹遺跡が所在したため、教育委員会文化課と埋蔵文化財センターは、遺跡の分布とその状態を把握する分布調査の実施について協議した。吉竹遺跡が知られるようになったのは、比較的古く県教育委員会が昭和37年度に刊行した『石川県遺跡地名表』にすでに登載されている。水田から土師器が出土し、小松市立博物館に出土品が保管されていると説明がある。以降、昭和43年刊文化財保護委員会(現文化庁)刊の『全国遺跡地図(石川県)』や昭和49年石川県教育委員会刊『石川県遺跡地図・同地名表』に登載されている。

耕地整備課では、昭和58年度に吉竹地内の5.6haについて客土工事を計画し、57年9月30日付で吉竹遺跡の分布調査の依頼を行った。これを受けて埋蔵文化財センターは、同年12月8・9日に分布調査を実施し、施工区の東北端部で古墳時代の良好な遺物包含層を確認した。包含層の分布範囲を示すとともに、遺跡の存在する箇所では埋蔵文化財の保存に影響を及ぼさないような工法をとるよう回答した。昭和58年3月の協議会において、現況排水路の底面に存在する遺物包含層が新設排水溝の設置により影響を受けるため、事前の発掘調査を58年の9月以降に実施することで合意した。遺跡の中心は吉竹集落の所在する微高地上にあり、当該地はその縁辺部にあたる。

耕地整備課から4月21日付で調査の依頼と文化財保護法に基づく通知が提出された。これを受けた埋蔵文化財センターは、9月上旬から調査に着手することになった。調査の対象は、幅約3m×長さ約40mの排水路部分と、周辺部の補足調査である。(第3・4図参照) 調査は浜野が担当した。以下に調査経過の概要を記しておく。

昭和58年9月7日　小松土地改良事務所の担当者と現場で打合わせ。

9月8～10日　現地の草刈り作業と現地小屋の設置。機材搬入作業等調査の準備。

9月13日　調査区設定後、発掘作業着手。現況排水路の底面が、遺物包含層の上面となる。

9月14～19日　発掘作業を継続。包含層からは多くの土器が出土するが、遺構は確認できない。

9月21日　調査区の南壁断面図作成。

9月22日　田面工事に係る要注意箇所にトレンチを設定して遺跡の確認調査。調査の結果をもとに、土地改良事務所と現地で協議。工法の変更(田面削平高のかさ上げ)により、遺跡を現状で保存できるよう要請する。

9月26日　確認調査区の記録作成。埋め戻し作業を実施して調査完了。現場撤収。

調査参加者　浜野伸雄(当時埋蔵文化財センター主事、現県立町野高校教諭)、田中孝典(当時埋蔵文化財センター調査員)、高野久一、長戸満富、高野豊一、松本喜美子、長戸太一、森　やす、高田千代、岡本ナツ

第3節　第2次調査の経過

昭和59年度は隣接地3.7haを対象に客土工事の計画が予定されたが、小松土地改良事務所と協議を行ない、昭和59年4月に現地踏査を実施した。地表面からの観察でも遺跡が更に北側へ拡大することが明らかとなり、昨年度調査の結果からみて耕作土直下の浅い箇所に遺跡が存在すること

が確実視されたため、耕作土のみを除去する工法とし、包含層を現状で保存できるよう設計を進めることで協議した。また、工事実施にあたっては、埋蔵文化財センター職員の立ち合いについても合意した。工事は59年6月上旬から着手され、木場潟へ続く平地部から、遺跡の存在する吉竹集落方向へ進行したが、この間、土地改良事務所からは何ら連絡がなされなかった。7月9日に至り、当時、公害防除特別土地改良事業に係る小松市白江梯川遺跡を担当していた湯尻が、たまたま通りかかったところ、工事のための排水処置工事が進み、排土中に多量の遺物が包含されているのを発見した。土地改良事務所へ連絡のあと現地での確認と対応策について協議を行ない、2筆の水田については、バックホー使用による耕土すき取り工事も実施して、これ以上遺跡を破壊することなく保存することで決着した。文化財保護法に基づく所定の手続きを行なうとともに、工事中の立ち合いを行なった(7月26日)。耕土すき取り作業の終了した後、7月30日に現地を最確認したところ、驚いたことにすき取り面を更にブルドーザで整地したため、大量の土器が散乱する状態であった。この事態の発生について土地改良事務所に対して現地で説明を求めたところ、現場監督が遺跡の保存法について十分理解していなかったことと、施工業者が整地作業前に土地改良事務所の担当者に了解を得ようと連絡したが、あいにく出張中であったため独断で作業を進めたと釈明があった。湯尻はセンターおよび耕地整備課へ事態を報告するとともに、7月31日から約2週間の予定で緊急調査を実施する必要があると回答した。土地改良事務所の担当者は、調査区域の工事を一時中断して調査を実施することを了解し、工事の現場監督にも指示を行ない、調査終了後は立ち合いのもと埋戻し整地作業を実施することになった。調査は湯尻と栃木(当時埋文センター調査員、現在センター主事)が担当し、遺物の採集を主作業とした調査を8月10日まで実施した。(第3・9図参照) 以下に調査経過の概要を記しておく。

昭和59年7月31日　白江梯川遺跡発掘調査現場作業員の一部の人々に吉竹遺跡の調査にまわってもらい、栃木調査員を中心に調査開始。5m単位の区画とし、散乱する遺物を順次採集する。

8月1日～3日　遺物の採集作業を継続。大量の土器群は、吉竹微高地の西側縁辺部の溝状遺構に投棄されたような状態で出土。5区と8区でたちわり。遺物は覆土の上面に集中して分布。

8月4日　土器群の検出と写真撮影と記録作成。

8月6日～9日　土器群の検出と取り上げ作業。平面図、断面図等記録作成。採集遺物は38ケースもの多きにのぼる。土地改良事務所担当者と調査後の工事について打合わせ。

8月10日　遺構面を人力により埋戻し。

8月11日　重機を使用して埋戻しを実施。作業終了。

調査参加者　湯尻修平(埋蔵文化財センター主査)、栃木英道(当時埋蔵文化財センター調査員、現在埋蔵文化財センター主事)、浜崎悟司、米津博文、串　彰文、戸田　樹、礒野外志行、坂下義雄、村田喜作、山崎一雄、加藤久太郎、前田勝治、森内一雄、田中清次郎、高橋貞吉、重田栄一、浅井正二、山田　茂、中田正二

第4節　第3次調査の経過

昭和60年度は59年度の東側4.9haを対象に客土工事が予定され、59年11月26日に分布調査を実施した。遺物包含層は確認されたが、耕作土から30～40cmの深さに位置し、計画によっては現状で保存することも可能であった。このため、設計では包含層に影響を及ぼすことがないように配慮がなされ、工事中での立ち合い調査を行うこととした。土地改良事務所と連絡をとり、6月下旬から7月下旬にかけて随時現地の確認を行いながら工事を進めた。工区にかかる遺跡の範囲は、約1,000m²であったが、遺跡を完全に現状で保存することができた。

第3章　第1次発掘調査

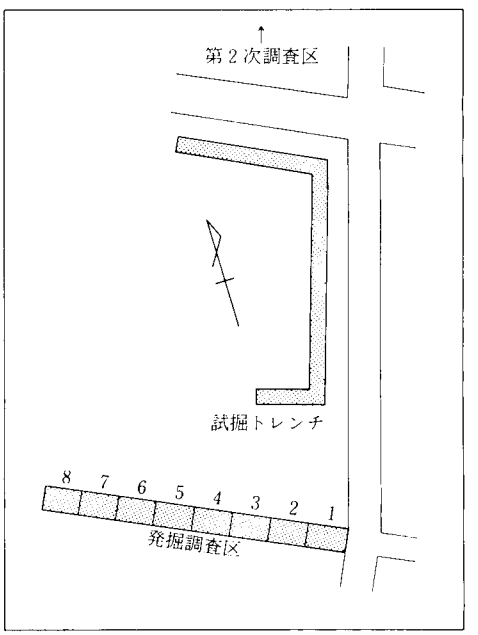
第1節　発掘調査区と基本層序

発掘調査区(第4図)

調査対象区域は、事業施工区東端に計画された新設排水溝設置予定地であった。計画は現況排水路の拡張・整備に重点を置いたものであったが、周知の遺跡範囲内での施工という実際と、事前調査の結果を踏まえ、調査区を設定した。

調査区は、現況排水路部分(幅3m、延長40m)に設定した。調査に際し、調査区の東端から5m毎にグリッドを組み、それぞれ1区～8区に細分割して調査を実施することにした。

また、隣接する田面施工区域に関しても、遺構面および遺物包含層の深度を確認するためのトレンチ調査(幅2m、延長55m)を実施した。



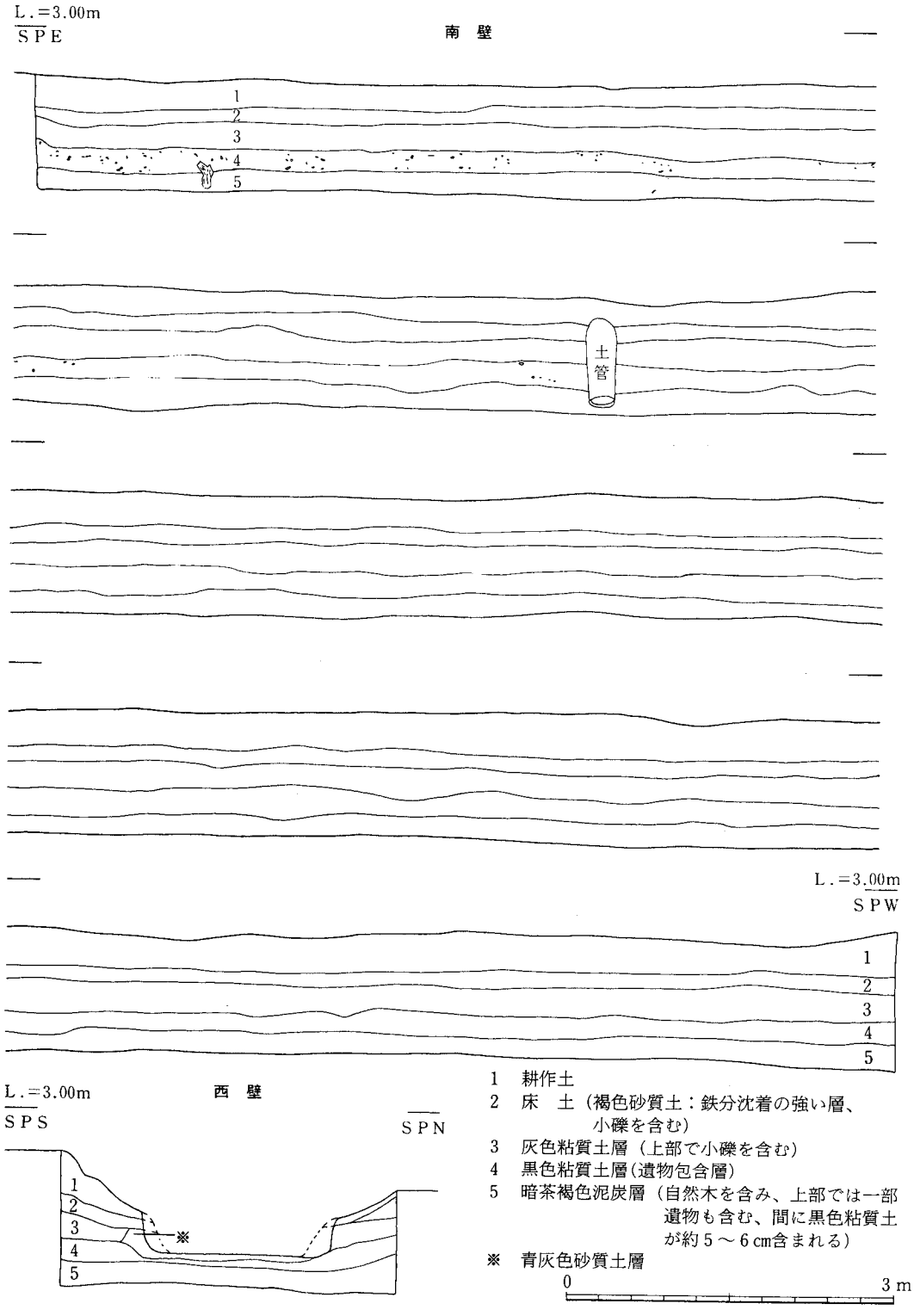
第4図　第1次調査区模式図（S＝1/1,000）

基本層序(第5・6図)

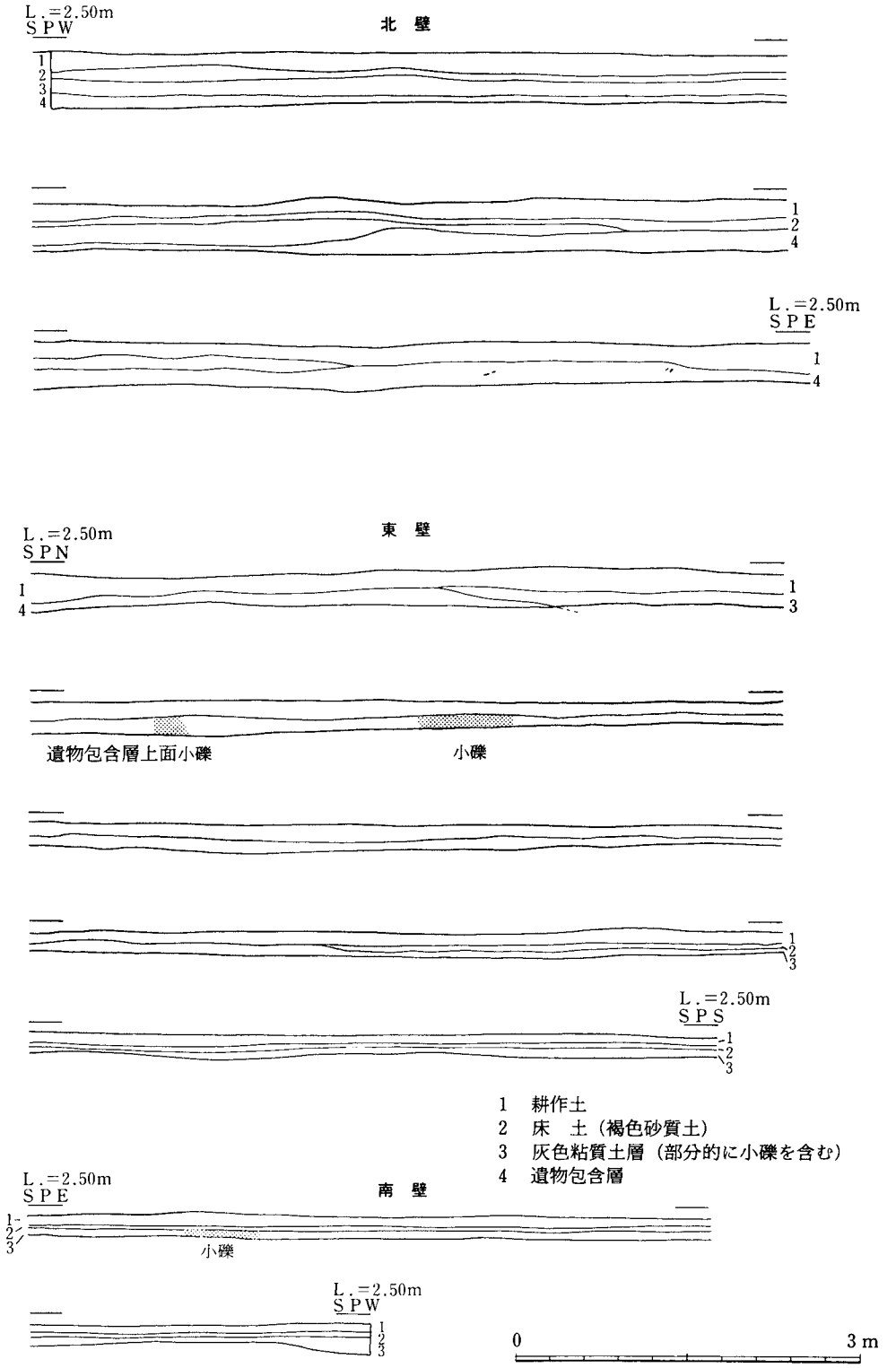
調査区の壁面で確認された堆積土の基本的層序は、耕作土(第1層)、褐色砂質土層(第2層、鉄分沈着の強い床土)、灰色粘質土層(第3層)、黒色粘質土層(第4層、遺物包含層)、暗茶褐色泥炭層(第5層)の5層である。ただ、現況排水路の底面に認められる青灰色砂質土層(流水下第1堆積土層)は、第4層の上面を薄く覆うものであり、基本層序と言うよりは、流水路特有の堆積現象と考えられよう。当砂質土には摩滅した土器片が多少含まれており、至る所で露呈している。

以上、調査区における堆積土の基本的層序を記したが、遺物包含層(第4層)が柔弱な泥炭層上に堆積していることから、当該区が生活面であったとは考え難い。ただ、遺物の出土が調査区の東側に偏っていることや、事前調査で確認された調査区周辺の旧地形の傾斜等から、当該地が木場潟周辺の低湿地の東端にあたり、出土遺物についても生活区域(東側微高地)からの流れ込みと推察できよう。

調査区の北(隣接する田面部分)に設定したトレンチは、遺物包含層の遺存状況や広がり・深度を確認するうえにおいて、貴重な資料を提供する結果となった。当該地の基本層序は排水路調査区で確認した順序とほぼ同一であったが、基盤面は緩く傾斜する地山である。ただ、部分的に耕作による削平が認められた。



第5図　第1次調査区土層断面図（S＝1/60）



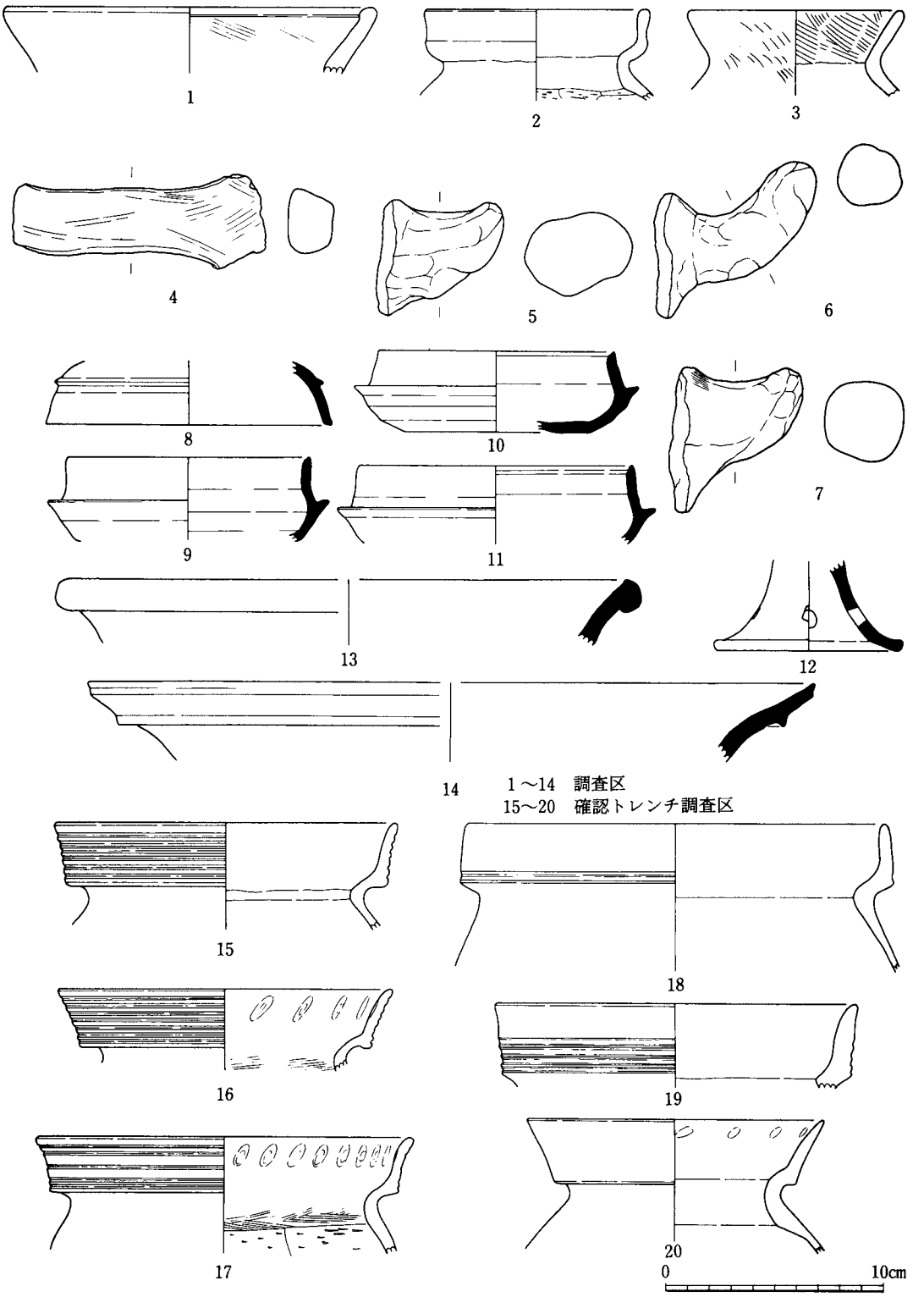
第６図　第１次調査トレンチ調査区土層断面図（S＝1/60）

第2節　出土土器(第7・8図1～32)

第1次調査で得られた遺物は、総数で5ケースであった。しかし、発掘調査を実施した箇所が現況の排水路であったためか、包含層から出土した土器も少片となった資料が圧倒的である。また、田面部に設定した確認トレンチ調査区(北トレンチ)からの出土土器も耕作時の影響を受けて小片となったものが多い。弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代および中世の遺物が混在している。(個々の土器の観察表は、第4章末に収めたので、参照されたい。)

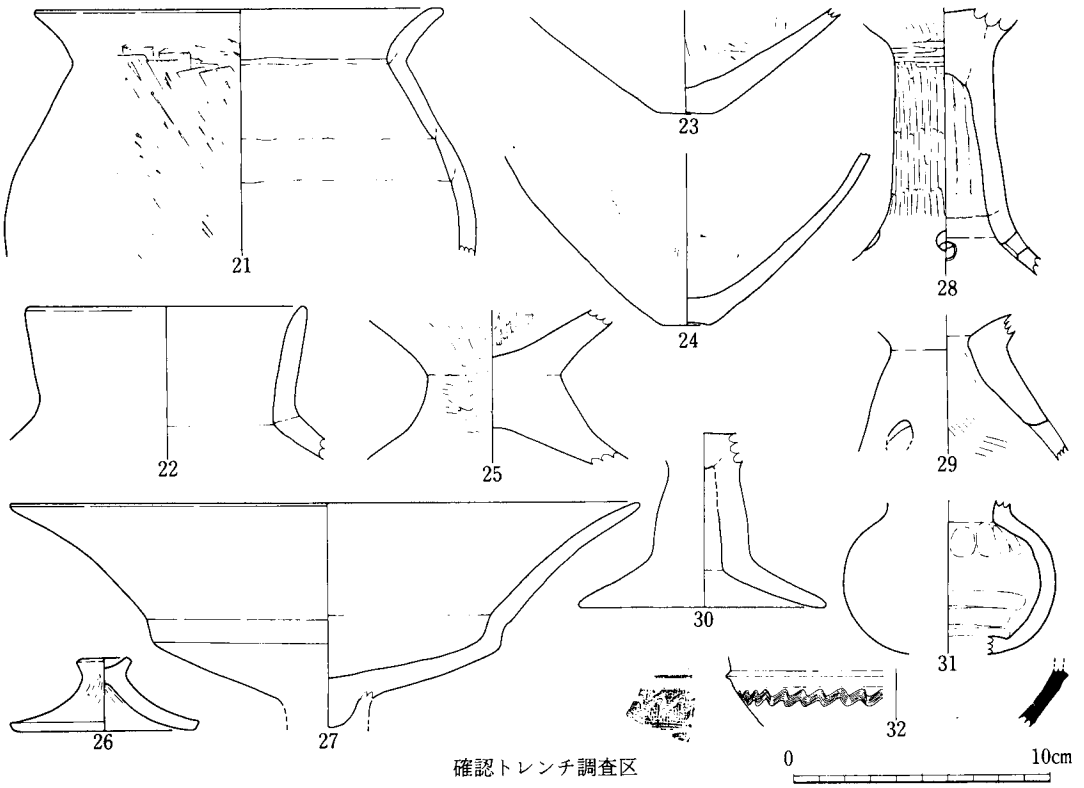
第7図1～14は、排水路調査区出土土器のうち、図示し得たものである。1は口縁端部内面が肥厚するくの字口縁の甕。口縁部は丸味をもつ。本遺跡の甕の分類ではG類に含まれる。2は有段口縁の甕。口縁部をヨコナデし、頭部以下の内面は強くヘラ削りする。3はくの字口縁の小形甕。口縁部の内外面と体部外面を粗くハケ調整する。4は大形の鉢に付く把手の一部とみられ、ゆるく湾曲する。ヘラで切って断面方形に整える。胎土中に多くの砂粒を含む。5～7は甕・堝もしくは甑の把手とみられ、体部に突出する把手を付着する。5・7は三角形の突起とするが、6は長さ約6cmの棒状突起を曲げる。いずれも接着時の指頭押圧をとどめる。8は須恵器杯蓋の小片、口径の割に器高が低く3.5cm前後と推定される。口縁部に内傾する弱い段があり、稜は短い。全体に鋭さを欠く。9～11は須恵器の杯身。9の立ち上がりは比較的高く、わずかに内傾する。受部は上外方にのびる。胎土、調整ともに良好で、断面は赤灰色を呈する。10の立ち上がりは低く、内傾する口縁部に段をもつ。受部に蓋の断片が融着しており、有蓋の状態で焼成されたことがわかる。体部外面は時計廻り方向の強いヘラ削りがみられる。11は器厚が薄く、口縁部に内傾する段をもつ。12の高杯脚部は、0.8と0.4cmの小さな長方形の透しが4孔ある。13・14は須恵器の壺または甕の口縁部断片。13は断面半円形の隆帯をもつ。14は口縁端部を面取りし、外面に断面三角形の隆帯をめぐらす。8～14の須恵器は14の様に古相を示すものもあるが、古墳時代後期前半(田辺編年TK47型式からMT15型式、中村編年のI型式5段階からII型式1段階併行)の所産とみられる。

第7図15～20と第8図21～32は、確認トレンチ調査区(北トレンチ)の出土土器である。15～17と19は有段口縁の甕で口縁部に擬凹線をもつ。本遺跡の甕の分類ではA類に含まれる。弥生時代後期後半の月影式土器に含まれ、16・17は有段部内面に特徴的な指頭押圧がある。18は磨耗が著しいため明瞭ではないが、やや内傾する有段口縁に擬凹線が存在した可能性が高い。20は有段口縁の壺。壺E類に分類した。外反する有段口縁内面には弱い指頭圧痕がみられる。21はくの字口縁の甕。甕D類に含まれる。口縁部内外面を粗くヨコナデした結果、端部に粘土が溜って弱い面をなすように見える。外面をヘラで削って掻きあげるが、内面は粘土紐巻き上げ痕をとどめ、ナデによる調整をするだけである。22は短頸の直口壺で、口縁部をヨコナデする。23は壺の底部。外面を研磨し、内面を丁寧に削っている。24は甕の底部。胎土と色調から16と同一個体と思われる。外面はハケ調整を行い、内面はヘラ削りの後ナデて丁寧な調整をする。25は台付壺の底部と考え



1～14　調査区
15～20　確認トレンチ調査区

第７図　第１次調査出土土器（S＝1/3）



第8図　第1次調査出土土器（S＝1/3）

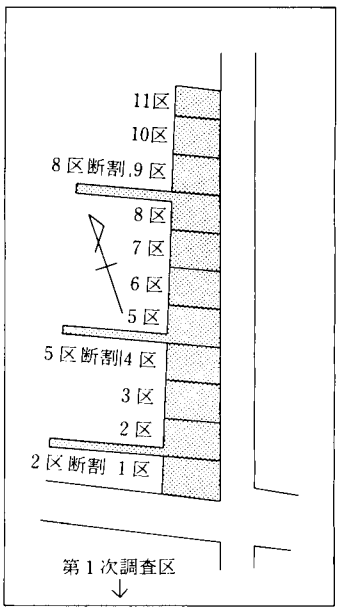
られる。底部の内外面を軽く磨いている。台部は肉厚である。26は小形壺の蓋。胎土は良好で内外面を丁寧に研磨する。27は杯部が広く外反する高杯。脚部以下を欠失する。杯部に段をもつ。28の高杯の脚部は、径0.8cmの円形透しを4孔等間隔にあける。脚筒部外面は良く磨かれており、焼成も良い。29は器受部から脚が大きく開いた器台。径 1.5cmの大きな円形透しが3個ある。30の高杯脚部は、ややふくらみのある筒部から、開脚する。31は小形の壺で、口縁部と底を欠失する。以上の土器は21・29や22など若干新しい様相や古そうな様相をもつ土器を含むが、甕や高杯などは月影式の様相をもった土器といえる。32の須恵器小片は高杯々部の断片として扱ったが、器形を特定することは難しい。細い稜の下に6条の櫛描き波状文がある。

第４章　第２次発掘調査

第１節　発掘調査区と基本層序

発掘調査区(第９図)

発掘調査区は略長方形を呈し、東西６～７ｍ、南北53～54ｍを測る。南端から５ｍごとにグリットを組み、１区から11区まで調査区を分割した。２区・５区・８区では、西側へ幅１ｍ、長さ12～15mのトレンチを設定し、一部をたちわりし層序を確認した。調査面積は約400m²を測る。



第９図　第２次調査区模式図
(Ｓ＝1/1,000)

基本層序(第10図)

調査区の現表面の海抜高度は、遺物包含層上面まで削平されていたために、正確にはわからないが、２区を中心に残存していた耕土をもとに推定すれば、2.3m前後であろう。

以下、調査区の(北)西側には茶灰色土(１層)および暗茶灰色粘質土(２層)、中央には遺構覆土(２・５区３・４層、８区５～７層、後述)、(南)東側には基盤となる暗灰色土(２・５区６層、８区９層)、黒褐色土(５区７層)、礫(２区７層)がそれぞれ堆積する。

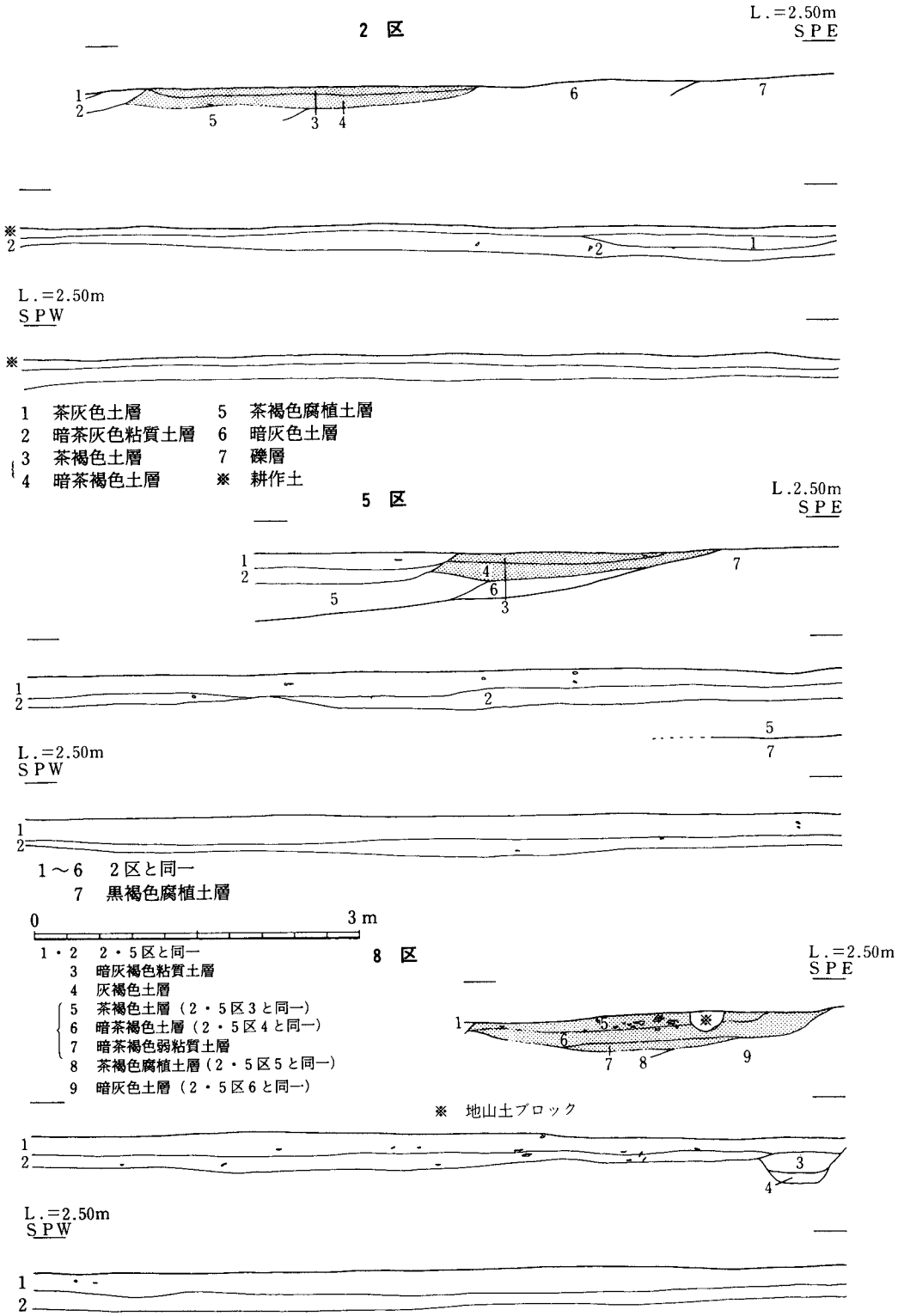
１・２層は、遺物を少量含むが水田の床土およびそれに類するものと考える。１・２層下には茶褐色腐植土(２・５区５層、８区８層)が堆積し、上述の基盤層を覆っている。５区では５層最下部から縄文土器(第39図１)が出土しており、同層の堆積時期の上限を示すものといえる。なお、基盤となる層の上面は、東から西へ約20度の傾斜をみせており、発掘調査区付近が、集落跡の存在が推定される東側微高地から木場潟周辺の低湿地へ向かう地形変換地点にあたることをうかがわせている。

第２節　遺　　構

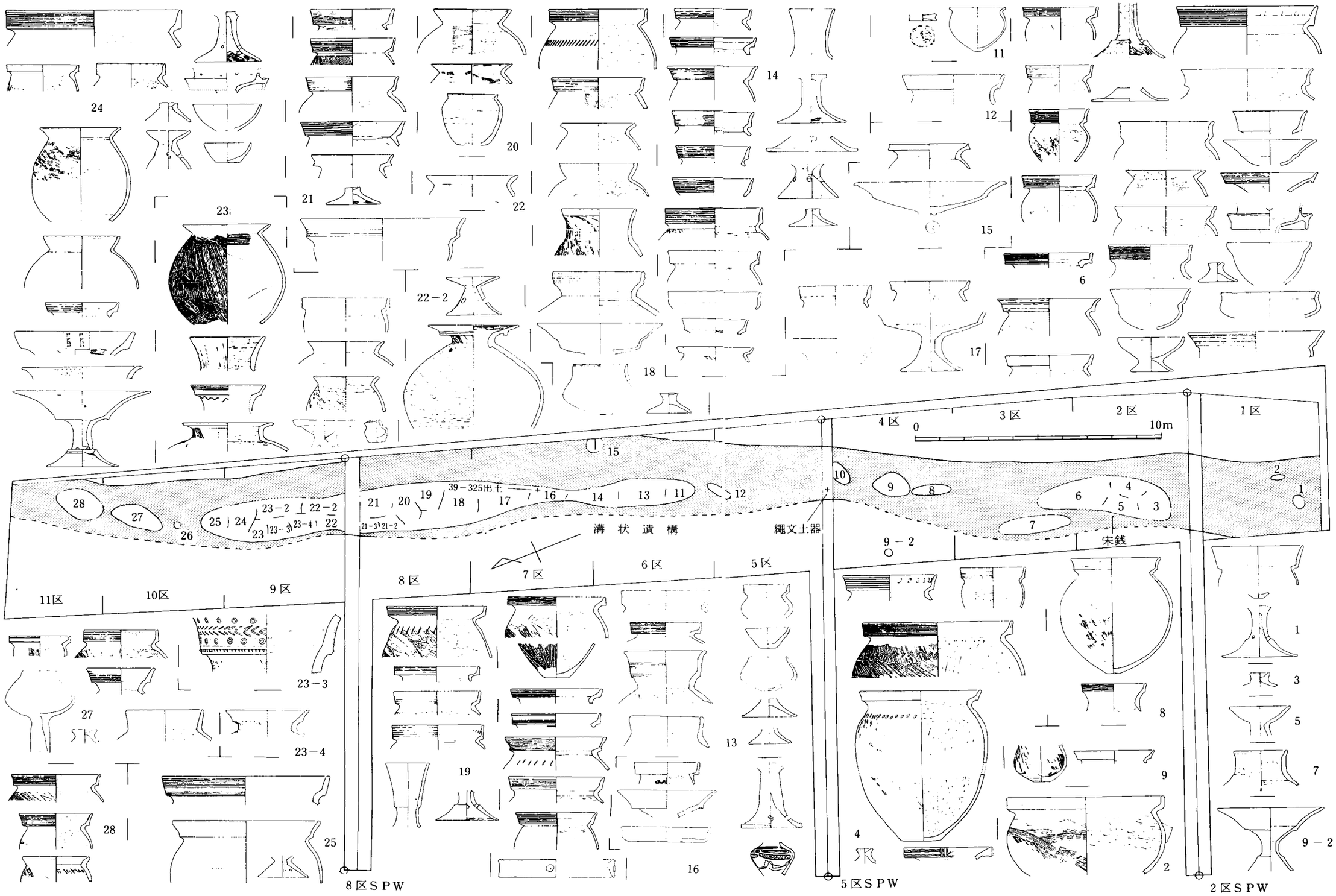
溝状遺構(第10・11図)

法量と形状等　調査区南西隅から北東隅にかけてほぼ直線的にのびる。長さ54m以上、上幅2.5～４ｍ、深さ約35cm を測る。断面形は浅い皿形、溝底面のレベルは1.9m前後を測る。

覆土と遺物出土状況　覆土は基本的には上層(茶褐色土、２・５区３層、８区５層)と下層(暗茶褐色土、２・５区４層、８区６層)の２層よりなり、８区(付近)では、最下層(暗茶褐色弱粘質土、８区７層)を判別し得た。



第10図 第2次調査区土層断面図（S＝1/60）



第11図　第２次調査区平面図（Ｓ＝1/200）　（土器番号は平面図土器群番号に一致する。土器縮尺 Ｓ＝1/10）

遺物の出土状況は、遺構上面が削平され、遺構自体も完掘していない(その間の事情については第2章参照)ため確実とはいえないが、大半は上層より出土している。

遺構の性格　溝底面のレベル差はほとんどなく、砂質土系の覆土の堆積も認められないことから、恒常的に水が流れるあるいは水をたたえるものとは考えられない。また、集落を外郭する(人為的な掘削による)溝にしては、たちあがりはゆるやかである。したがってここでは、集落の外縁に帯状に連なる地形変換線上の鞍部に、遺物(土器等)の継起的な投(廃)棄など人々の働きかけ(部分的な掘りかえし、改修の可能性を含めて)が加わったものと考え、当該遺構を溝状遺構と称しておきたい。

第3節　遺　　物

1　弥生土器・土師器(第11～13図、第14～38図 1～338)

第2次調査で出土した土器(等)は、整理箱(LII型コンテナバット)にして38箱にのぼる。出土状況から、表採(出土区画不明なものを含む)、各区出土(出土地点不明なものを含む)、溝状遺構出土(遺構上面、上層、出土地点の明確なものがある)、トレンチ・たちわり調査区出土にわけられる。(個々の土器の出土状況については、土器観察表に明示した。)

溝状遺構出土のうち、出土地点の明確なもの(第11図。複数の土器群から出土しているもの、底部片・小片等は割愛した。)に限ってみても、弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅をもち、いわゆる一括資料としての性格は弱い。本節では、弥生土器・土師器と縄文土器・須恵器・平安時代以降の遺物に大きく二つにわけ、前者を本項で後者を次項で扱うこととする。

弥生土器・土師器については、甕形土器・壺形土器・蓋形土器・高杯形土器・器台形土器・結合器台・鉢形土器・小型土器の各器種(形式)を認め、以下器種ごとに報告する。個々の土器の法量・胎土・色調等は土器観察表を参照されたい。

甕形土器(第14～23図 1～113)

甕は、口縁部の形態差等によって7形式を認める。

甕A　口縁部外面に擬凹線文を施すもの。

甕B　有段口縁の内外面をヨコナデ調整によってしあげるもの。

甕C　くの字口縁をもつもの。

甕D　くの字口縁系のうち、北陸東部(能登、越中、越後)に多く分布するもの。

甕E　受口状口縁系のもの。

甕F　山陰系のもの。

甕G　布留系のもの。

甕A(第14～19図 1～74、第18図59を除く)

口縁部外面に擬凹線文(3～17条)を施すもの。口縁部の形態差によって4形式に細分する。器面は、口縁部内面と頸部内外面をヨコナデ、胴部外面をハケ、同内面をヘラ削りによってしあげる

ものが通有である。口縁部内面に連続する指頭圧痕をもつもの、頸部内面にハケ調整痕を残すもの、肩部外面に文様を施したものも少なくない。

甕A 1(第14図1～8)　くの字状(1～3)あるいは短い有段状(4～8)の口縁をもつ。後者はさらに口縁部内面がくの字状のもの(4～6)とやや屈曲するもの(7・8)に細分できる。擬凹線3～9条。口径16～19.2cm(中形、II、甕A 2参照)を測る。

甕A 2(第14図9～18、第15図20・23・26～28、第18図60・61、第19図71)　短い有段口縁をもつもの。口縁部内面に指頭圧痕をもたないもの(2a、9～18・20・23・26・60・61・71)ともつもの(2b、27・28)に細分できる。また、法量によって小形(I、口径14～15cm、9・10・15・16・28)、中形(II、口径16.3～19.9cm、11～14・17・18・20・23・27)、大形(III、口径23.4cm、60・61)、特大形(IV、口径30.4cm、71)にわけられる。(以下、甕の法量による分類は原則としてローマ数字のみを記す。)擬凹線4～17条、IIについては4～14条。

甕A 3(第15図19・21・22・24・25・29～31、第18図63～66、第19図70)　長い有段口縁をもつもの。口縁部はさほど外反せず、端部は肉厚のまま丸くしあげる。口縁部内面の指頭圧痕の有無によって、3a(19・21・22・24・25・63・64・66・70)と3b(29～31・65)に細分できる。I(口径約13cm、65・66)、II(口径14.8～20cm、19・21・22・24・25・29～31)、III(口径22～23cm、63・64)、IV(口径34cm、70)が認められる。擬凹線5～16条、IIについては5～14条。なお、63・64、21・第30図189はそれぞれ同一個体の可能性が高い。

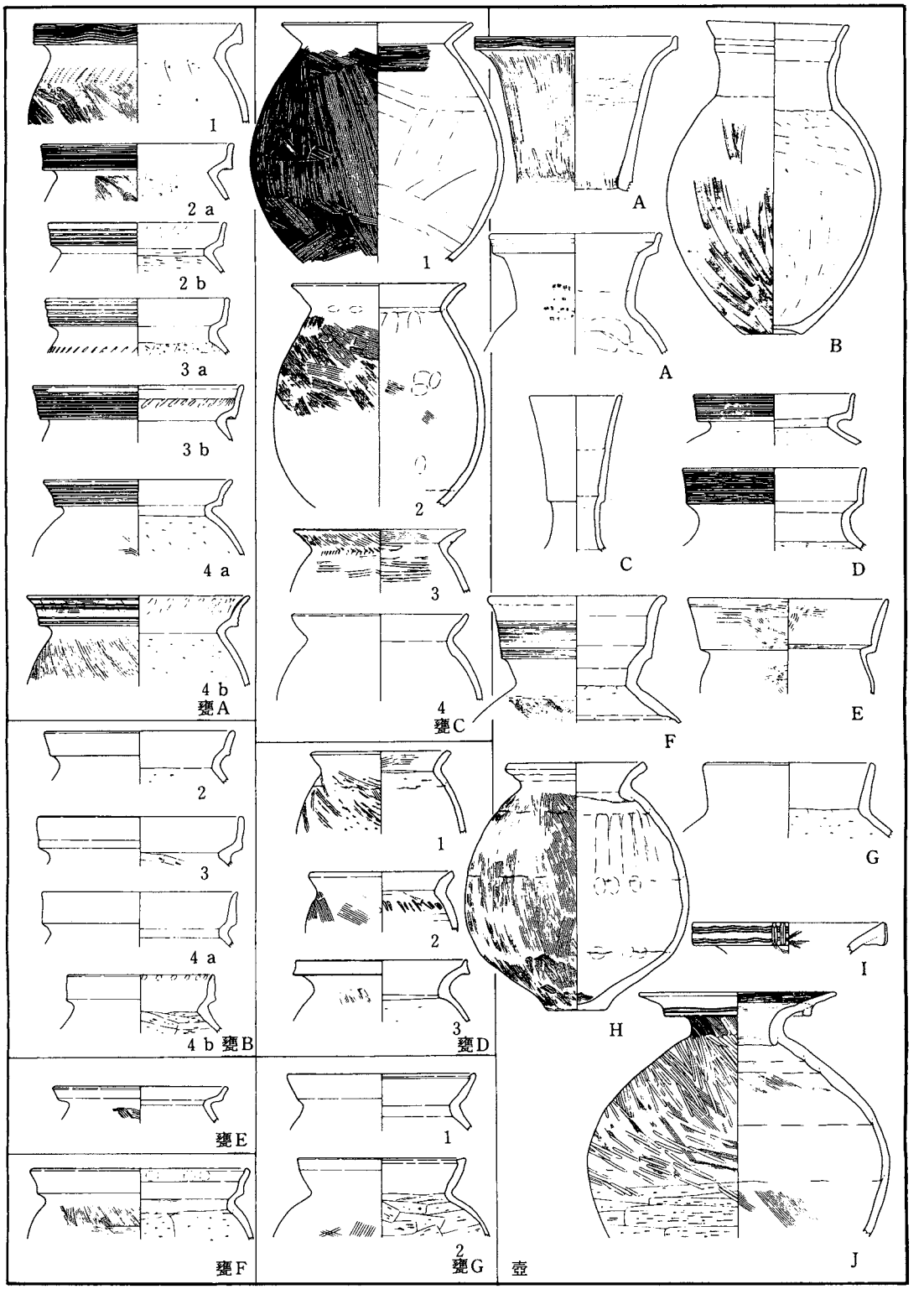
甕A 4(第15図32、第16図33～43、第17図44～58、第18図62・67～69、第19図72～74)　長い有段口縁をもつもの。口縁部は外傾・外反し、端部は反転し先細りの丸縁をもつ。口縁部内面の指頭圧痕の有無によって、4a(42～58・62・67～69・72)と4b(32～41・73・74)に細分できる。I(口径12～14.8cm、33・38・67～69)、II(口径15.4～20.8cm、32・34～37・39～46・48～58)、III(口径20.5～23.8cm、47・62)、IV(口径28.4～34.8cm、72・73)が認められる。擬凹線4～10条、IIについては5～10条を数える。

甕B(第18図59、第20図75～82、第21図83～90)

有段口縁の内外面をヨコナデ調整によってしあげるもの。頸部以下の調整は甕Aとかわらない。細別形式においても、甕Aの2・3・4に相当するものがある。すなわち、甕B 2(59・75～77・79・80・82)、甕B 3(78・83)、甕B 4(81・84～88・90)が認められ、甕B 4は口縁部内面の指頭圧痕の有無によって、甕B 4a(81・84・85・87・88)と甕B 4b(86・90)に細分できる。法量的には、I(口径13.2～14.8cm、83～86)、II(口径16～19.5cm、75～81・87・88)、III(口径24.4cm、82)、IV(口径26.6cm、59・90)がある。なお、59は口縁部外面にハケ調整痕を残している。また、89は甕Bとしたがその適否も含め、類例の増加を待って再検討したい。

甕C(第21図91～94、第22図95・97～100)

くの字口縁を持つ甕のうち、後述の北陸東部(能登、越中、越後)に多く分布するもの(甕D)以外のもの。甕Dとの区別は必ずしも明瞭ではない。口縁部の形態差によって4形式に細分できる。器面は、内外面をハケ・ナデによってしあげるものが多い。98を除きすべて中形(II)である。



第12図　第２次調査出土弥生土器・土師器形式一覧図１（S＝1/6）

甕C 1（第21図91）　頸部は鋭く屈曲し、口縁部は直線的にのび、端部は幅の狭い面をもつ。胴部は肩が張らない長胴形、最大径を中位にもつ。口径17.7cmを測る。

甕C 2（第22図95・97）　頸部の屈曲は弱く、口縁部は外反する。端部はやや厚みのある丸縁。胴部は長胴で、最大径を下位にもつ。口径16.2～17cmを測る。

甕C 3（第21図92～94）　頸部の屈曲部は比較的明瞭で、口縁部は強く外反する。端部は先細りの丸縁。肩部は張るようである。口径15.2～16.2cmを測る。

甕C 4（第22図98～100）　口縁部は外傾するが、内湾ぎみにたちあがる。端部は厚みのある丸縁。98・99は肩が張るが、100は欠損のため不明。口径11.5～18cmを測る。98は小形（Ⅰ）品。

甕D（第22図96・101～103）

くの字口縁をもつ甕のうち、北陸東部（能登、越中、越後）に多く分布するもの。上述の甕Cとの区別は必ずしも明瞭ではない。口縁部の形態差によって3形式に細分できる。器面はハケ、ナデ、ヘラ削りによってしあげるものが多い。法量的にはⅠ（口径12.6～14.7cm、96・101・102）とⅡ（口径15.8cm、103）がある。

甕D 1（第22図96）　口縁端部は平縁で、外下方へつまみ出すような稜をもつ。

甕D 2（第22図101・102）　口頸部が2段に屈曲し、端部は平縁。上方へはねあげ状の稜をもつ。

甕D 3（第22図103）　口縁部が強く外反し、端部は幅広の面をもち上方へつまみ出すもの。

甕E（第23図104）

受口状口縁をもつもの。器面はハケ・ナデによって調整される。口径15.7cmを測る。

甕F（第23図105・106）

山陰系甕。口縁端部は内上方へやや肥厚する。器面はハケ・ナデ・ヘラ削りによってしあげられる。105は口径19.9cm（Ⅱ）、106は口径29cm（Ⅲ）を測る。

甕G（第23図107～113）

布留系甕。直線的あるいは内湾ぎみのくの字口縁をもち、端部内面は肥厚する。肥厚度の小さいもの（G 1、108・112・113）と大きいもの（G 2、107・109・110・111）がある。器面は外面をハケ・ナデ、内面をヘラ削り・ナデによってしあげる。法量的にはⅠ（口径13.8cm、110）とⅡ（口径14.6～17.4cm、107～109、111～113）がある。

壺形土器（第24～29図114～166）

壺は大きく10形式に分類したが、形式設定の基準が曖昧で、大系的な分類とはいえない。以下、壺Aから順に報告する。

壺A（第25・26図125・127・128・130～132）

短い有段口縁をもつ長頸壺。125・127を一般的とする。128・130～132は、口頸部が短く短頸壺としたほうが適切かと思うが、口縁部片が多く、127との形態的な区別は難しい。ただし器面は125・127がヘラ研磨・ナデ・ヘラ削り（内面）、128・130～132がハケ・ナデ・ヘラ削り（内面）によってしあげられ、差異が認められる。前者は口径18.1～18.6cm、後者は12.9～15.8cmを測る。

なお、第26図129は125・127に、第25図126・第27図142は128・130～132に形態的に類似するが、

頸部の傾き、口縁部のつくりが異なっており、形式分類の対象とはしなかった。

壺Ｂ（第24図114～118）

ゆるやかに外反する口縁部をもち、最大径を中位におく長胴の（短頸）壺。丸縁（114～116）と平縁（117・118）があり、116の口縁部は有段状に屈曲する。器面はハケ・ナデ・ヘラ削り（内面）によって調整される。口径12.2～15.2cm、116は胴径19.7、器高24.6cmを測る。

また、第24図119・120、第25図124は、器形が不明瞭あるいは調整が異なることなどから、壺Ｂには含めなかったが、後述の壺Ｇと比較すれば、本類により類似する。

壺Ｃ（第26図135・136）

細頸壺。口頸部が有段なもの（136）と無段のもの（135）がある。ともに摩耗が著しく調整は不明瞭。口径９cm前後を測る。

壺Ｄ（第26・27図133・134・137～141・144）

短い有段口縁をもつ広口壺。口縁部外面に擬凹線を全面に明瞭にもつもの（133・134・137～140）と部分的にしかもたないもの（141）、凹線をもつもの（144）がある。134は口縁部外面に逆Ｕ字状浮文、138は口縁部下位に二孔一対の孔をそれぞれもつ。137は赤彩品。器面は、ヘラ研磨・ナデ・ハケ・ヘラ削り（内面）によってしあげられる。口径14.2～20.4cmを測り、法量的には各種を含むようである。なお、第27図145の壺は、有段口縁ではないため壺Ｄには含めなかったが、頸部以下は134などに類似している。

壺Ｅ（第27・28図146～151・157）

有段口縁広口壺。口縁部は比較的長い。無文で、器面はヘラ研磨・ハケ・ナデ・ヘラ削り（内面）によって調整される。口径10.5～18.4cmを測る。147は小形品であろう。146・148は赤彩品。

壺Ｆ（第27図143）

有段口縁壺。口縁部は長く、外面には擬凹線をもつ。口径16.2cmを測る。

壺Ｇ（第25図121～123）

直立ぎみのくの字口縁をもつ広口壺。器面はハケ・ナデ・ヘラ削り（内面）によって調整される。口径14～15.2cmを測る。123は甕としたほうが適切かもしれない。

壺Ｈ（第29図164・165）

外反するくの字口縁をもつ広口壺。器面はハケ・ナデによってしあげられる。口径12.6～13.6cm、164は胴径21、器高23.5cmを測る。

壺Ｉ（第28図161・162）

パレス＝スタイル系装飾壺。擬凹線・棒状浮文などをもつ。器面はハケ・ナデによって調整されている。口径17.6～23.4cmを測る。

壺Ｊ（第27・28図152・153）

いわゆる二重口縁系あるいはその影響を受けていると考えられる有段口縁壺。口縁部内面はくの字状を呈し、外反しながら開く。壺Ｅとしたが、第27図151や第28図157も類似形態をとる。器面はヘラ研磨・ナデ・ハケ・ヘラ削り（外面）によってしあげられる。口径16.4～17.7cm、153の胴

径は28cmを測る。152は口縁部外面に擬凹線文が施されている。

このほか、特に形式分類はおこなわなかったが、大形壺の口縁部片(第28図154)、装飾性にとむ壺の頸部～胴部片(第28図155・156・163)、小形壺の体部片(第28図158～160)、球形に近い長胴平底の壺(第29図166、口縁部を欠く)が出土している。このうち、156・158・160は赤彩品である。

また、器種ではないが、甕・壺等の底部片が相当量出土している(第30・31図185～232)。185～209は甕、217～232は壺と考えたが、それぞれ判断に苦しむものも少なくない。これとは別に、底部穿孔土器も出土している(210～216)。

蓋形土器(第29図167～184)

蓋は、鈕部・体部の形態差等によって6形式を認める。器面はヘラ研磨・ナデによって調整されるが、内面にハケ調整痕を残すもの(181)もある。

蓋A(第29図168～172)　鈕端部を面取りするもの。鈕部径2.5～4.7cm、171は口径7.8、器高4.2cmを測る。171は内面に赤彩痕が認められる(外面は摩耗のため不明)。

蓋B(第29図173～178)　鈕端部を肉厚で丸くしあげるもの。鈕部径2.3～3.7cm、177は口径11.4、器高4.6cmを測る。

蓋C(第29図179～181・183)　鈕端部を先細りで丸くしあげるもの。鈕部径2.8～4cm、181は口径10.7、器高3.9cmを測る。

蓋D(第29図182)　鈕部の形態は蓋Cに類似するが、体部がゆるく内湾するもの。鈕部径3.8、口径8.7、器高4.5cmを測る。

蓋E(第29図167)　鈕部が直立し端部に不明瞭な水平面をもつもの。鈕部径2.2cmを測る。

蓋F(第29図184)　鈕部上面は凹まず、平坦にしあげるもの。鈕部径3.6、口径10.3、器高7.5cmを測る。

高杯形土器(第32・33図233～255)

高杯は、杯部の形態差によって3形式を認める。脚部片(237～241・245～255、238・249・251は赤彩品)は分類の対象としなかった。器面は、ヘラ研磨・ナデによって調整されるが、ハケ・ヘラ削り調整痕(特に内面)を残すものもある。

高杯A(第32図233・234)　口縁端部に水平に近い幅広の面をもつもの。234は、外面に暗文風のヘラ研磨を施す。口径22～28.6cmを測る。

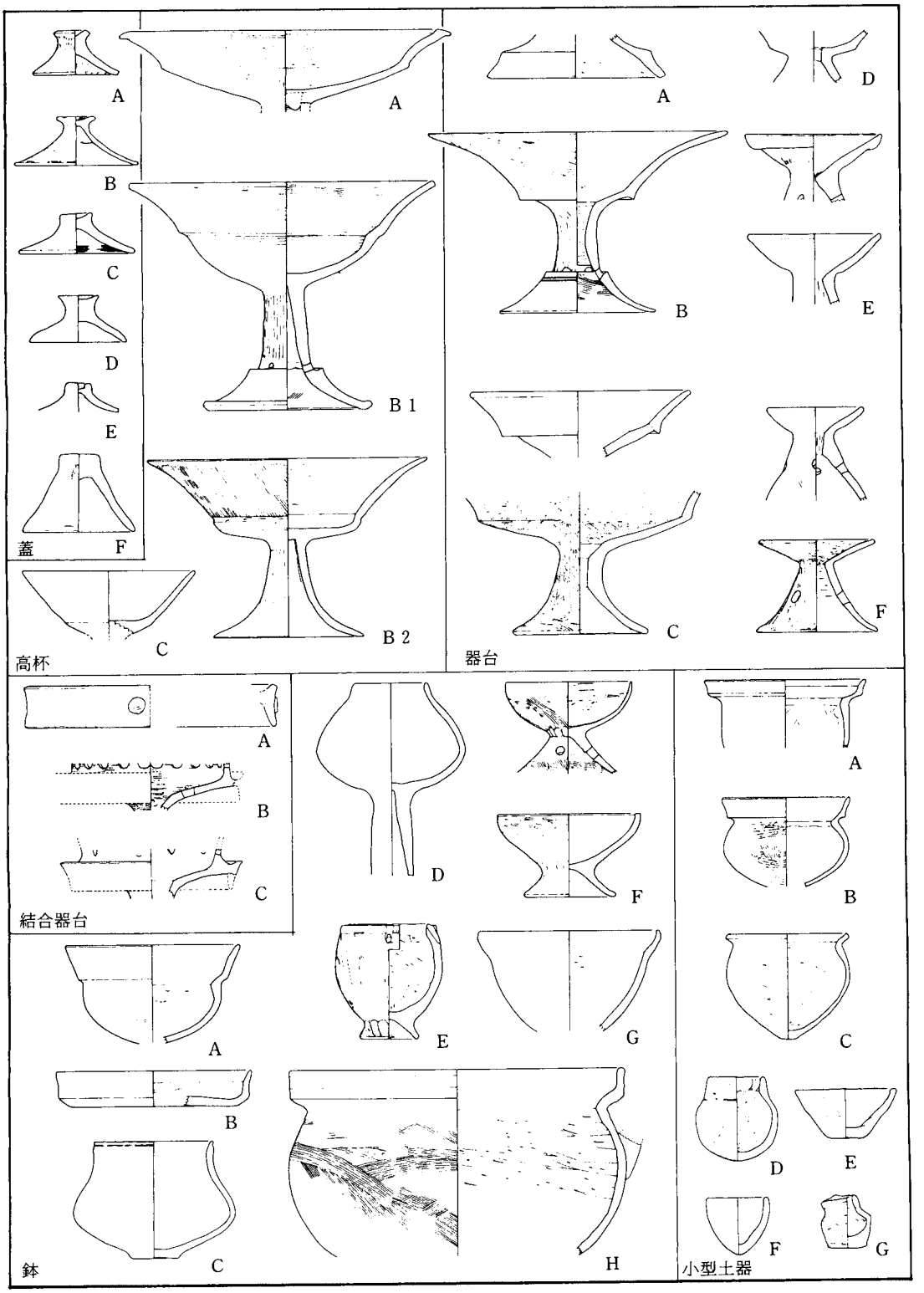
高杯B(第32・33図235・236・242・243)　杯部が有段鉢形を呈するもの。有段脚(B1、235)と無段脚(B2、236)がある。口径18.4～28.4cmを測る。

高杯C(第33図244)椀状の杯部をもつもの。口径16.1cmを測る。

器台形土器(第34・35図256～279)

器台は、6形式を認める。器面の調整は高杯と同様である。

器台A(第34図263)　受部と脚端部が有段となるもの。段部は器台Bに比較してかなり短い。脚部径15.8cmを測る。第34図256も器台Aに類似するが、器台Cとの関連性も無視できないため、強いて分類はしなかった。



第13図　第２次調査出土弥生土器・土師器形式一覧図２（S＝1/6）

器台B(第34図258・260・262・264～266)　有段の受部と脚部が大きく外反しながら開くもの。264は、受部外面にスタンプ文(S字状渦文)をもつ。口径21.5～29.6、脚部径14.4～15.2、260は器高17.1cmを測る。第34図257・259・261・267の脚部片も器台Bと考えるが、確証を欠く。

器台C(第35図268・269)　受部は有段状に屈曲するが、脚部は無段でラッパ状に開くもの。268は赤彩品。口径20.2、脚部径12.2cm を測る。第35図270・271も、器台Cと考えておきたい。

器台D(第35図278)　器台Cに類似するが、小形であることから別形式とした。

器台E(第35図275～277)　小型器台、器台Fに比較して肉厚で粗雑なつくりである。受部径12.2～14.2cmを測る。

器台F(第35図273・274)　小型器台。器台Eに比較して精良なつくりをしている。受部径8.5～10.3、274は脚部径11、器高8.7 cm を測る。第35図272・279は器台F(あるいはE)と考える。

結合器台(第35図280～284)

器台と壺(あるいは鉢)が結合したもの。装飾器台とも呼称されるが、結合した器種が特定できれば、器台結合壺(鉢)もしくは結合壺(鉢)と称したほうが適切かもしれない。法量・透穴の形状等により3形式を認める。器面の調整は高杯・器台と同様である。

結合器台A(第35図280)　受部径22.8cmを測る大形品。垂下帯外面に竹管文を押印した円形浮文をもつが、個数は不明である。

結合器台B(第35図281・282)　体部に雨滴(涙滴)形あるいは円形の透穴を密に穿つもの。法量的には結合器台Aに類似する。

結合器台C(第35図283・284)　受部径16.3～16.9cmを測り、結合器台Aに比較して小形である。体部には雨滴形透穴を正逆交互に穿つ。284は赤彩品。

鉢形土器(第36・37図285～316)

鉢は、8形式を認めたが、個別的には他の器種との区別が困難なものもある。器面の調整は、ヘラ研磨・ナデもしくはハケ・ヘラ削りによる二者があるが、前者の場合でもハケ調整痕を部分的に残すものがあり、後者の場合でもヘラ研磨・ナデが部分的にみられるものがある。

鉢A(第36図285～287)　有段ヘルメット状を呈するもの。口径16.1～17.7cm を測る。

鉢B(第36図289～291)　体部はゆるやかに内屈し、口縁部は外側へ折り曲げられるようにやや開く。口径(18.1～19.7cm)に比して浅い。289は器高 3.3cmを測る。

鉢C(第36図301～303)　鉢Bに類似するが、口径(7.4～11cm)に比して深い。301・302はそれぞれ器高11.3、7.8cmを測る。口縁部は外側へはあまり開かない。体部片側に把手をもつ。303は赤彩品。

鉢D(第36図304)　鉢Cに類似するが、長い脚をもつもの。口径7.4cmを測る。

鉢C・Dを無頸壺とする考え方もあり、ここでは鉢Bとの類似性から鉢と考えたが、資料が増加し形式組列が明らかになった段階で再検討したい。

鉢E(第36図296)　砲弾形の体部をもつ脚台付鉢。口縁部には二孔一対の孔を穿つ。口径7.3、脚台径5、器高10.9cmを測る。

鉢Ｆ（第37図306・307・309～311）　椀状の体部をもつ脚台付鉢。脚台の長いもの(306)と短いもの(307・309)がある。口径11.7～13.9cm、307・309は脚台径8～8.2cm、307は器高7.9cmを測る。

鉢Ｇ（第37図312）　椀状の体部をもつ。口縁部は外側へ屈曲したのち、端部は逆に内屈する。口径16.8cmを測る。

鉢Ｈ（第37図314～316）　有段口縁をもつ大形鉢。314・315の口縁部外面には擬凹線文が施される。316は一対の把手(形状不明)をもつ。口径27.2～32.4cmを測る。314は赤彩品。

このほか、第36図293～295・297～300・305は脚台付鉢、第36図292は大形鉢、第37図308は丸底鉢を考えたが、確証を欠くため分類の対象としなかった。なお、第37図313(赤彩品)は器種不明である。

小型土器（第38図317～336）

小形のものを一括した。甕・壺等の小形品とみなし得るもの(全体的なバランスは異なる)と、手捏ね土器等小型であることが一般的なものとがある。７形式に分類した。

小型土器Ａ（第38図317～319）　有段口縁をもつ甕(・鉢)の小形品。口径11.2～14.5cmを測る。

小型土器Ｂ（第38図320・321）　有段口縁をもつ壺の小形品。口径9.8～11.6cmを測る。

小型土器Ｃ（第38図322・323）　くの字口縁をもつ甕(・鉢)の小形品。口径9.9～11cm、322は器高10.1cmを測る。

小型土器Ｄ（第38図335・336）　壺形を呈するもの。法量(口径５、胴径7.4～7.6、336の器高は８cmを測る。)はかなり小さい。

小型土器Ｅ（第38図328・329）　椀状平底を呈するもの。口径9.3～9.5、器高4.5～4.7cmを測る。

小型土器Ｆ（第38図327・332）　砲弾形を呈する尖底小型土器。332は口径5.6、器高5.5cmを測る。

小型土器Ｇ（第38図326・331・334）　手捏ねによる小型土器。小型土器Ｅに類似するもの(326・331、口径６、器高3.6～3.7cm)と、小型土器Ｄに類似するもの(334、口径３、器高5.1cm)がある。

このほか、第38図324・325・330は口縁部を欠くため分類の対象としなかった。第38図333は器種不明である。このうち、325は外面肩部から胴部中位にかけて、長楕円(長方)形の区画内に沈線文・列点文(２段２、１段１)を上位からそれぞれ３・３・４組ヘラ描きし、胴部下位にもヘラ描きの文様を施している。(文様の意味するところはよくわからない。)胎土は最大７㎜の岩石片を多く含み、他に石英も認められる。第35図268の器台の間にはさまるようにして出土しているが、時期的に共伴するものかどうかは不明である。

土製品・その他の土器（第38図337・338）

337は土錘である。338は大型の甑かとも考えたが確証を欠く。類例の増加を待って再検討したい。

2　縄文土器・須恵器ほか(第39図1～27)

第39図に第2次調査で出土した弥生土器と古式土師器以外の遺物をまとめて掲載した。縄文土器、須恵器、土師器、中世陶磁器、古銭など種々の遺物がある。

縄文土器　第2次調査で溝状遺構を部分的に断ち割って確認する作業を実施したが、5区の断ち割り最下層(腐植質を多く含む茶褐色土)から1片の縄文土器が出土している。第39図1に拓本を示した深鉢の口縁部である。口縁端部を太い棒状具で押圧し、小さな波状の口縁とする。やや外反して開く口縁部外面に一条の沈線を加え、これより下部には細かい縄文がある。

弥生土器　2は溝状遺構の上面から出土した壺形土器の小片。細いヘラ描き平行線文や細かい櫛？描き文がみられる。弥生時代後期後半の所産に含まれよう。

須恵器　3～18の須恵器は、第2次調査の際に採集した資料で、溝状遺構の上面から出土したもの以外に、工事による排土中から採集した資料も多い。3は広口の甕。口縁部を面取りし、体部は弱いカキ目を残す。4は直口壺の口縁部。16条単位の細かい櫛描き波状文がある。5は薄い造りの口縁部断片で長頸瓶の口縁とみたが、外面に自然釉があるのに内面にみられないことから高杯の脚端部の可能性もある。6は中形の甕口縁部。端部を肥厚させ、下部に1条の凹線を入れる。口縁部は丁寧にヨコナデ調整をする。断面は赤灰色を示して焼成も良い。7は長頸壺の頸部。上下2条のヘラ描き沈線をめぐらす。8は大型甕の口縁部断片で、端部を肥厚させ、二条の断面三角形のシャープな隆帯を付ける。細い7条単位の櫛描き波状文がある。胎土の色調は赤灰色を呈するが、暗灰色の自然釉をかぶっている。断面の一部に黒茶色の接着の痕跡がみられ、使用時に割れたため、樹脂等によって接合が行われたことが明らかである。調整および胎土の色調から、古式の感じを与える。9も8と共通した調整法の甕口縁部。つまみ上げた口縁部下端に粘土を細く加えて端部を肥厚させる。口縁外面にある断面三角形の細隆帯もシャープである。頸部に櫛描きの波状文がある。焼成は良好。胎土の色調は淡赤灰色を呈する。10は外反する口縁端部を薄くし、外面に断面三角形の突帯をもつ。灰色で焼成はやや甘い。11・12は稜をもつ杯蓋。11の蓋の稜は鋭く、水平近くに突出する。口縁端部に浅い段をもつ。小片のため復元口径には正確さを欠くが、12cm前後、器高約3.3cmを測る。天井部はヘラで削って薄くしている。胎土中に砂粒も多く含むが色調は淡赤灰色をして9の胎土と類似する。12は口径13.2cmの蓋で、形態的には第7図8と良く似る。口縁部に内傾する段があり、内外面ともに丁寧なナデ調整を行なう。稜は小さく天井部は丸味をもつ。胎土中の砂粒は少ないが、焼成はやや甘く青灰色をする。13は杯の小片。口縁が受部からゆるいカーブをもって立ち上がり、内傾する明瞭な段をもつ。胎土も良好でナデ調整も丁寧である。15・16は復元口径14cm前後、器高約3.5cmを測る杯蓋。15は稜は全く消え、天井部から口縁部にかけては丸くなだらかな曲線を描いている。口縁端部も丸く仕上げ、天井部外面の回転ヘラ削り調整は、全体の約½である。胎土・焼成ともに良好で、断面は灰赤色を呈する。16は天井部の稜が省略されて沈線化して退化しており、わずかにくぼむ。口縁端部もナデて丸く仕上げる。焼成は甘い。14・17・18の杯身は、たちあがりが短く内傾している。端部は丸く段を

なさない。いずれも底部を欠くが、丸味をもって安定しない底部と推定される。これらの杯身は15・16の蓋とセットをなす。

19～22は高杯の脚部。いずれも杯部を欠失した脚部のみの断片である。19は脚部径9.2cmの短脚小型高杯で、脚端部を湾曲させる。脚部外面にカキ目を施し、ヘラで切り込んだ長方形の透しを３方向に設ける。胎土・焼成ともに良い。20も19と同タイプの脚部。長方形の透しは３ないし４方向とみられる。21も短脚の脚部であるが、端部は肥厚して丸い。長方形の透しの短辺が2.7cmを測ることから、４方向の透しとなる。20•21は色調こそ異なるが、焼成はいずれも良好。22はラッパ状に開脚し、端部は薄くなって先端部底に小さな面をもつ。外面に稜に似た段をつける。長方形の三方透しがある。

第２次調査で採集した須恵器は、いずれも断片的な資料で口径や形状も復元図示となった。甕の４・６・８～10、杯蓋の11・12、杯身の13、高杯の19～22などは第１次調査で得られた須恵器とほぼ同時期の古墳時代後期前半（田辺編年のＴＫ47型式からＭＴ15型式、中村編年のＩ型式５段階からII型式の１段階併行）の所産と考えておきたい。杯蓋の15・16、杯身14•17•18などは明らかにその退化型式であり、古墳時代後期後半（中村編年のII型式３段階からII型式５段階併行）まで下がるものとみたい。７の長頸瓶は更に新しく、古墳時代も終末に近い頃の時期に比定しておきたい。いずれにしろ、第１・２次調査での採集した結果をみると、調査地の近辺（特に吉竹集落のある微高地上）に県内ではまだ調査例の多くない古墳時代後期の集落遺跡が存在することは確実である。

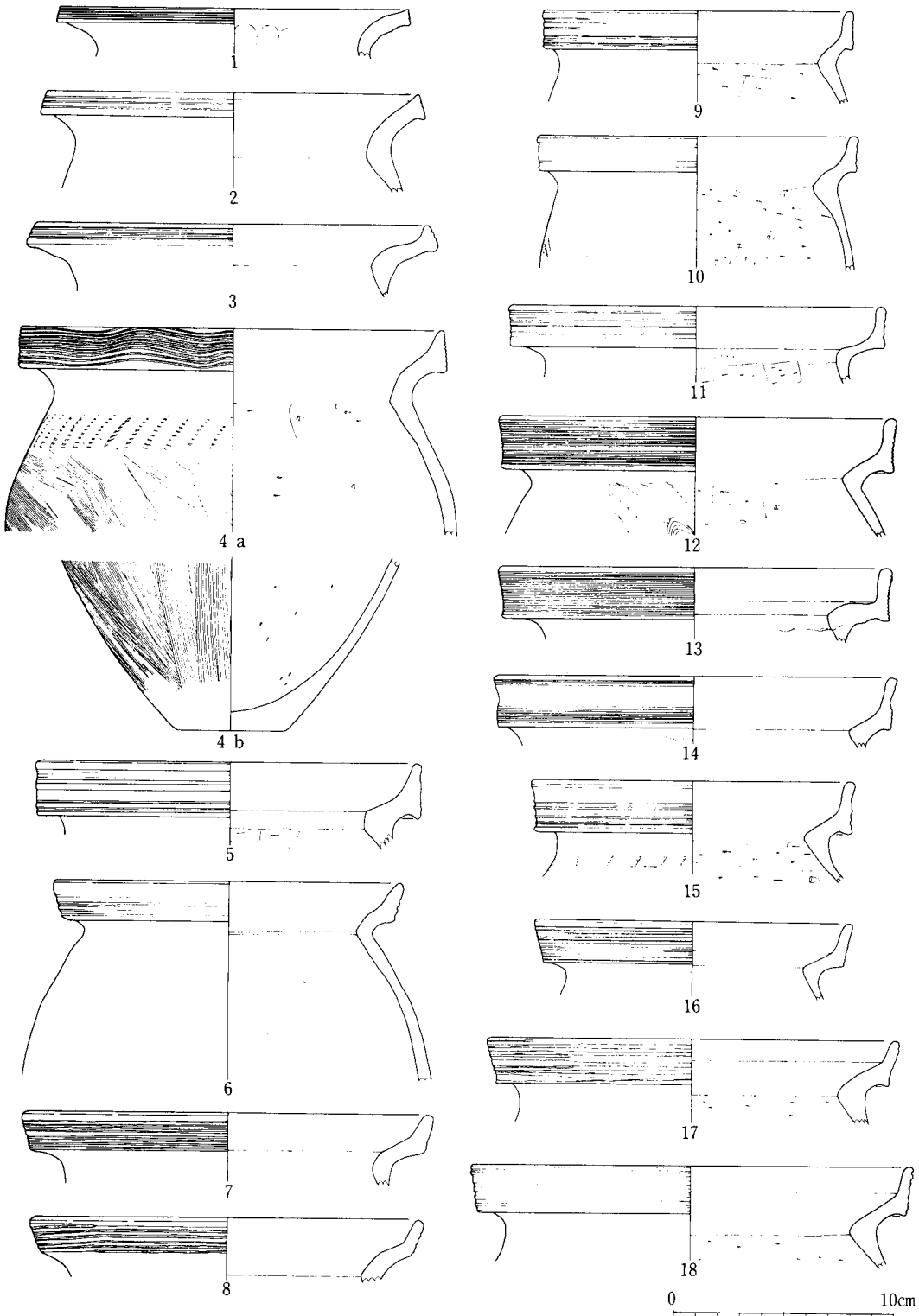
土師器　第39図23•24は土師器の杯または椀の底部断片、23は底面に回転糸切り痕をとどめる。24は内面黒色処理をし、高台の内側底面を指頭で押さえて調整する。断片的資料であるため、細かな時期比定は難かしく、一応平安時代も中頃（９世紀～10世紀）の所産とみておきたい。

中世陶磁器　第39図25は瀬戸の灰釉小皿断片。淡橙灰色の素地に、淡い鶯色の灰釉がかかる。室町時代後半（16世紀代）の製品である。第39図26は越前焼の擂鉢。体部下半を回転ヘラ削りの後に、三角形を呈する高台を貼り付けている。内面のおろし目は幅1.3cm、９条と密である。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。その製作技法とおろし目の状況からして、越前焼の中でも古い様相を示し、その製作年代は鎌倉時代前半（13世紀前半）である。

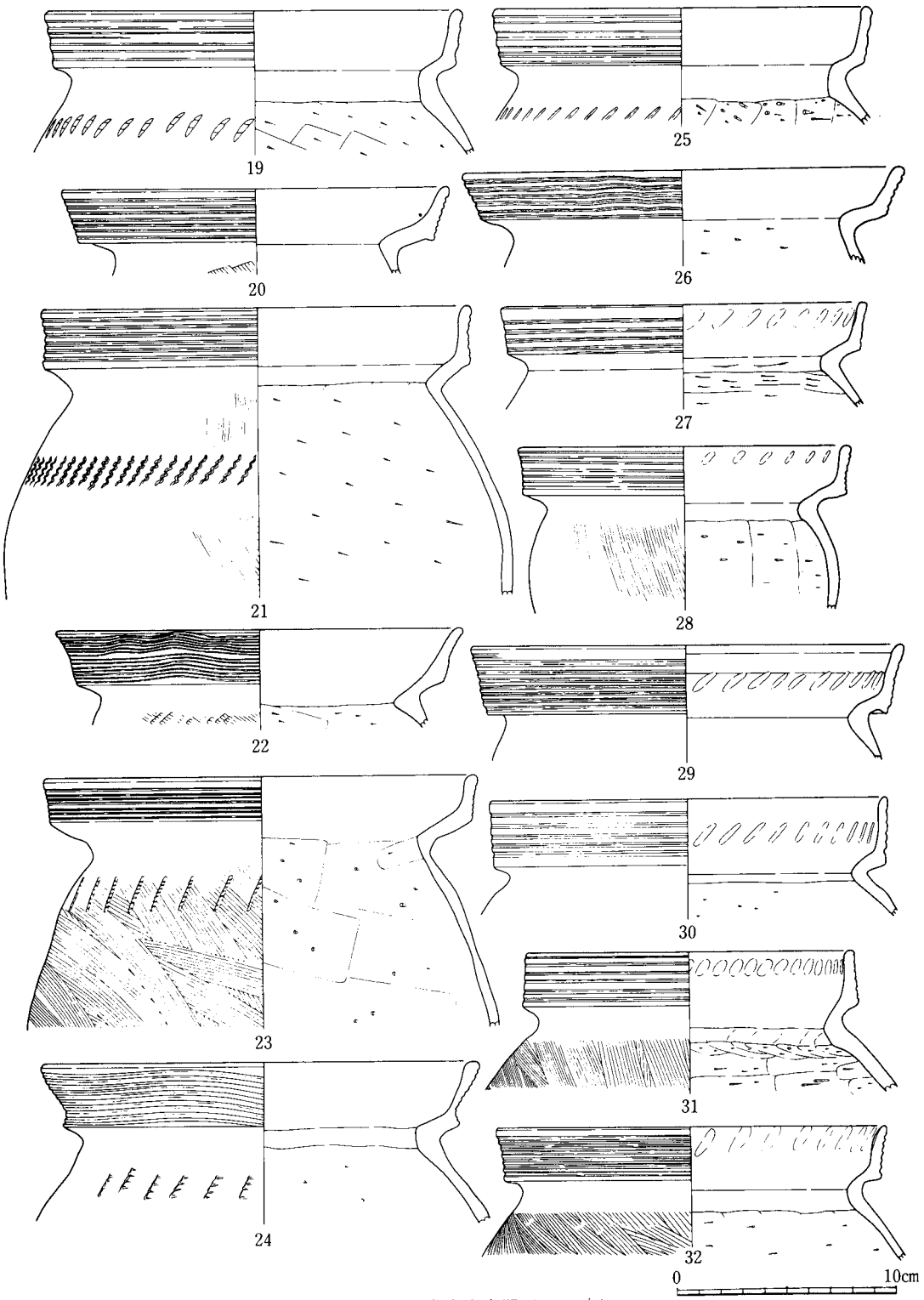
古銭　第39図27の銅銭は、北宋の「景徳元寶」である。鋳上がりが悪く、楷書体の字形も不鮮明である。「景徳元寶」は、景徳２年（1005）初鋳の北宋銭であるが、県内でも中世の集落遺跡や古銭（備蓄銭）出土遺跡などから、他の宋銭とともに出土している。

参　考　文　献

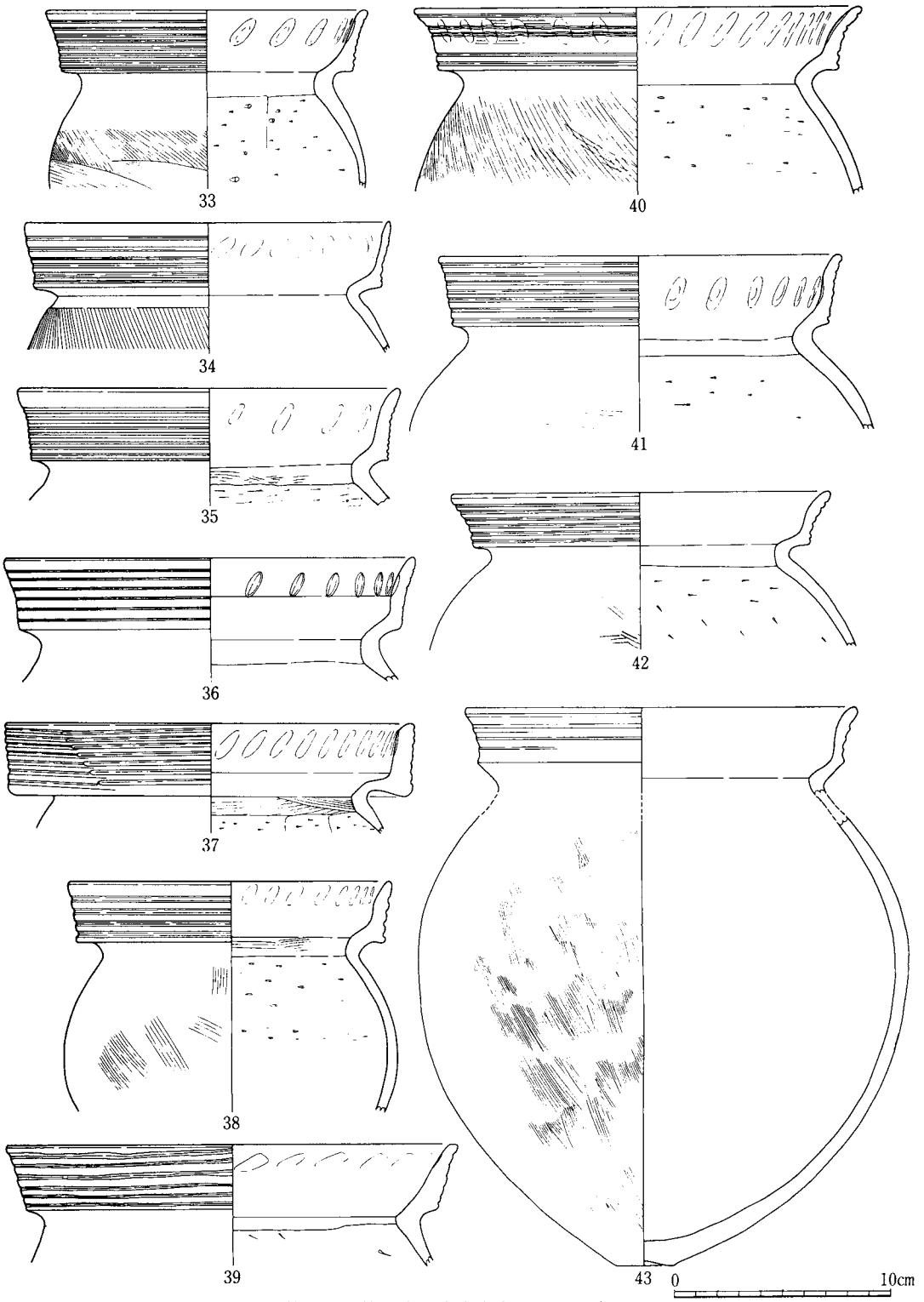
田辺昭三　『陶邑古窯址群Ｉ』　平安学園考古学クラブ　1966年　京都。
田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981年　東京。
中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981年　東京。
楢崎彰一監修　『日本陶磁の源流――須恵器出現の謎を探る』　柏書房　1984年　東京。
楢崎彰一編集　『世界陶磁全集』　２　日本古代　小学館　1979年　東京。
楢崎彰一編集　『世界陶磁全集』　３　日本中世　小学館　1980年　東京。
芝田　悟　『多太神社境内遺跡――中世備蓄銭の報告書――』　多太神社　1984年　小松。



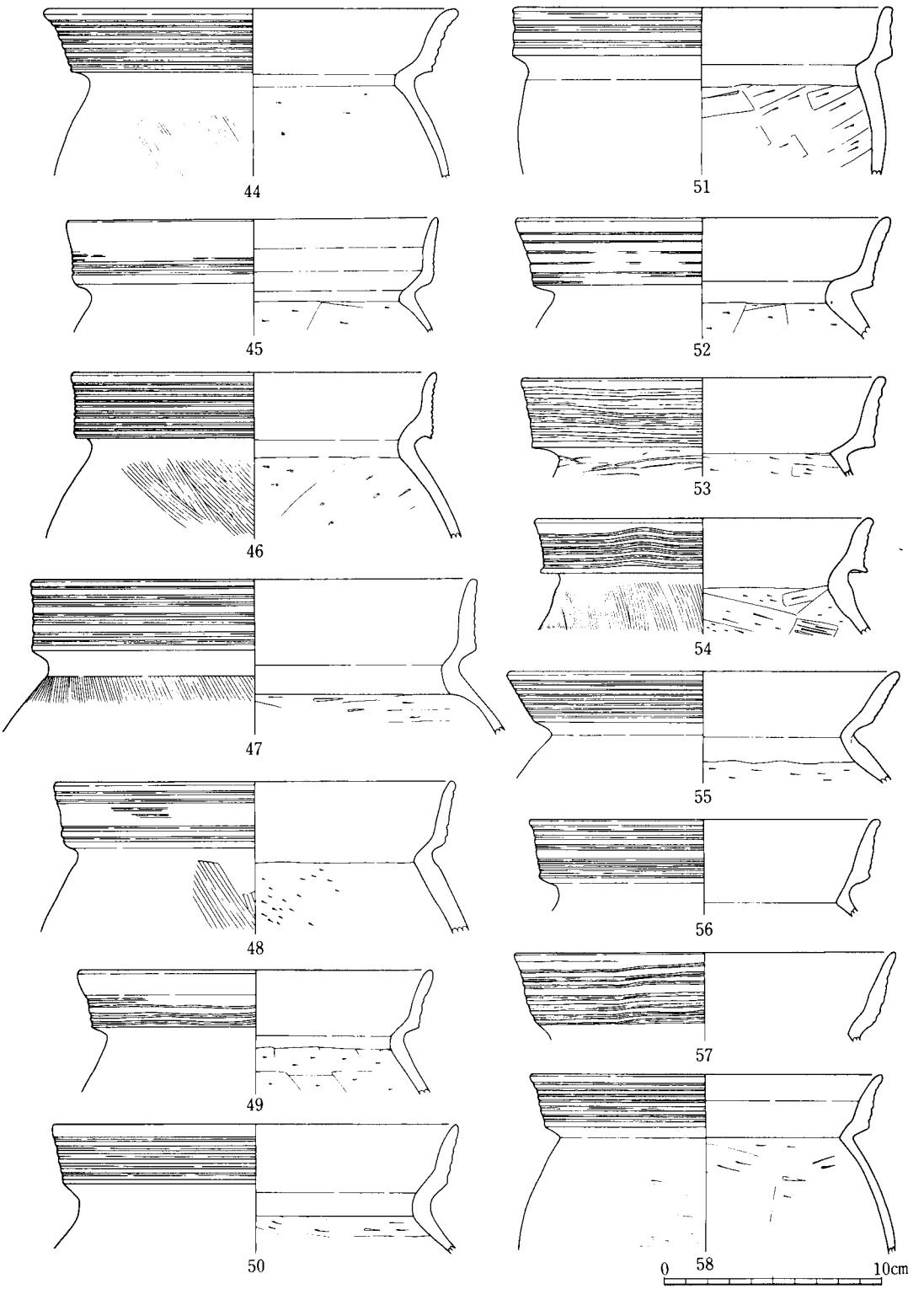
第14図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



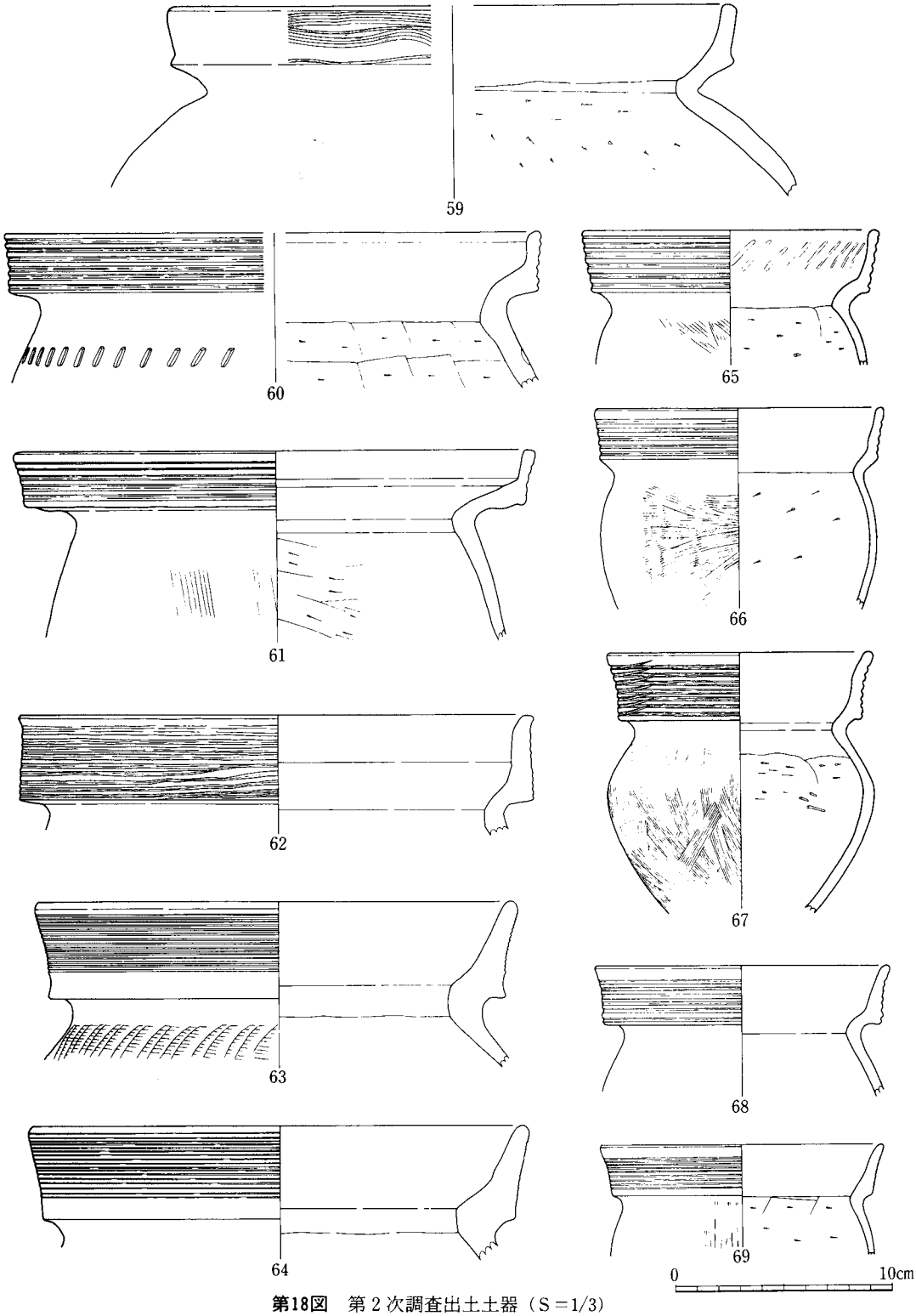
第15図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



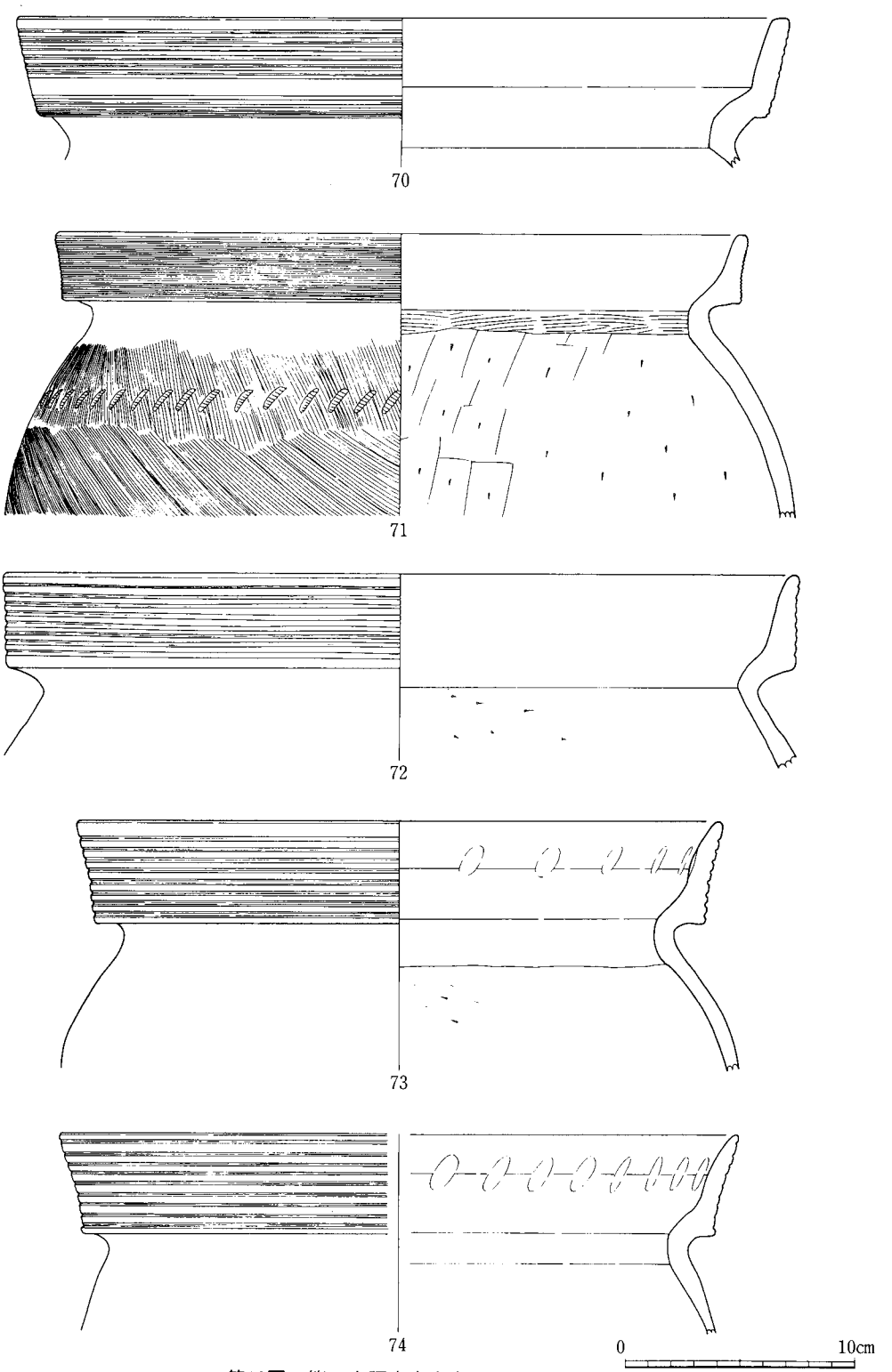
第16図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



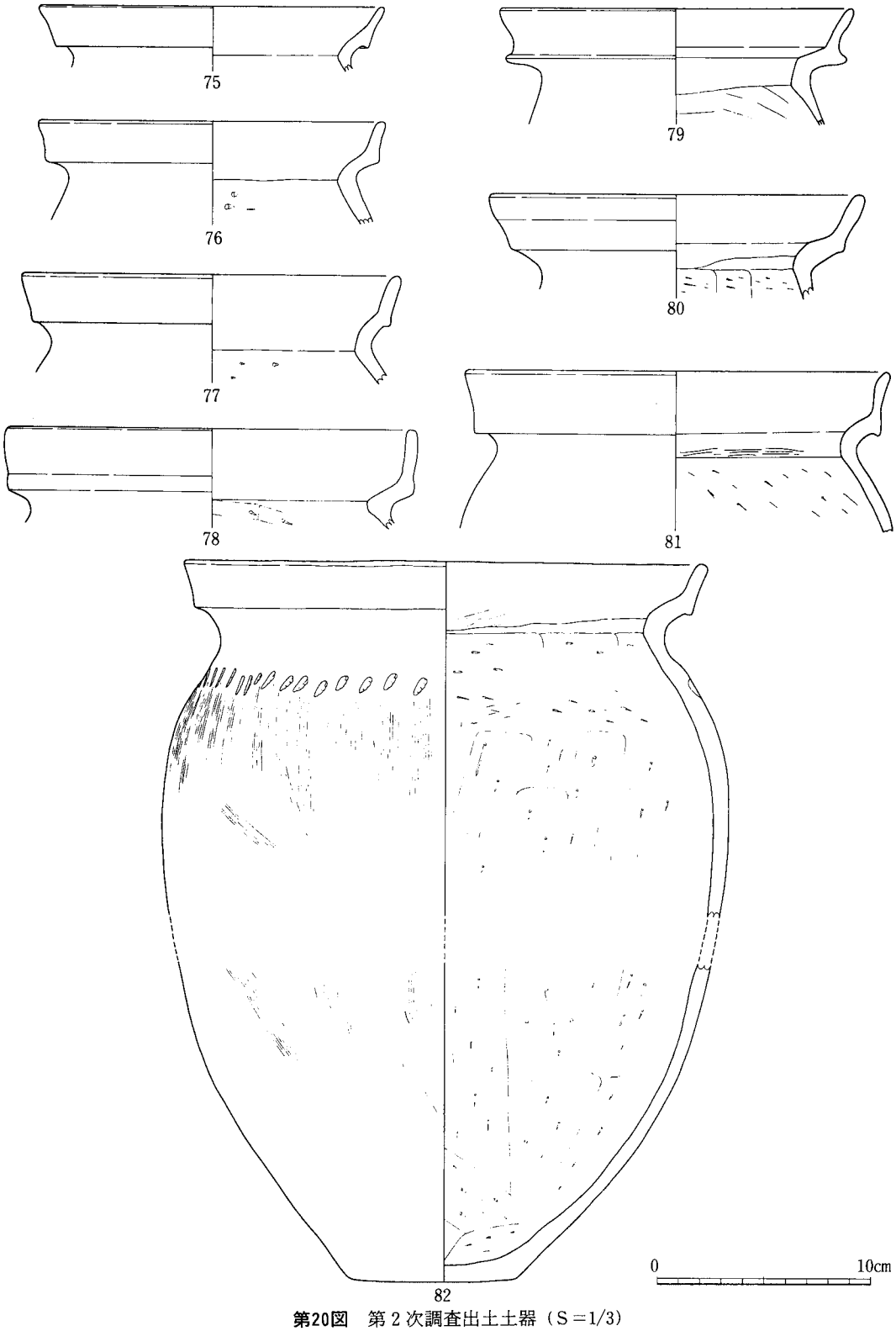
第17図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



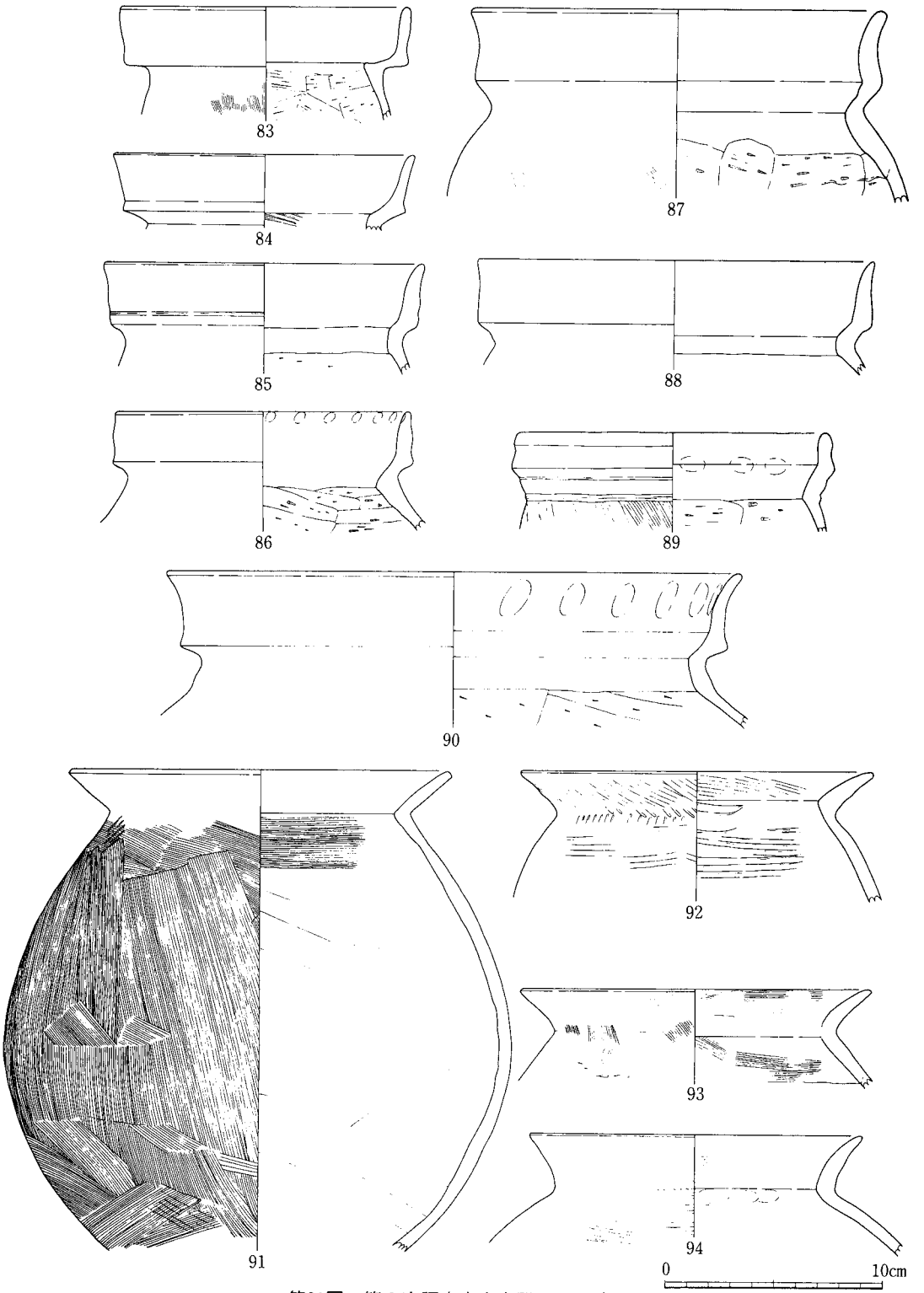
第18図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



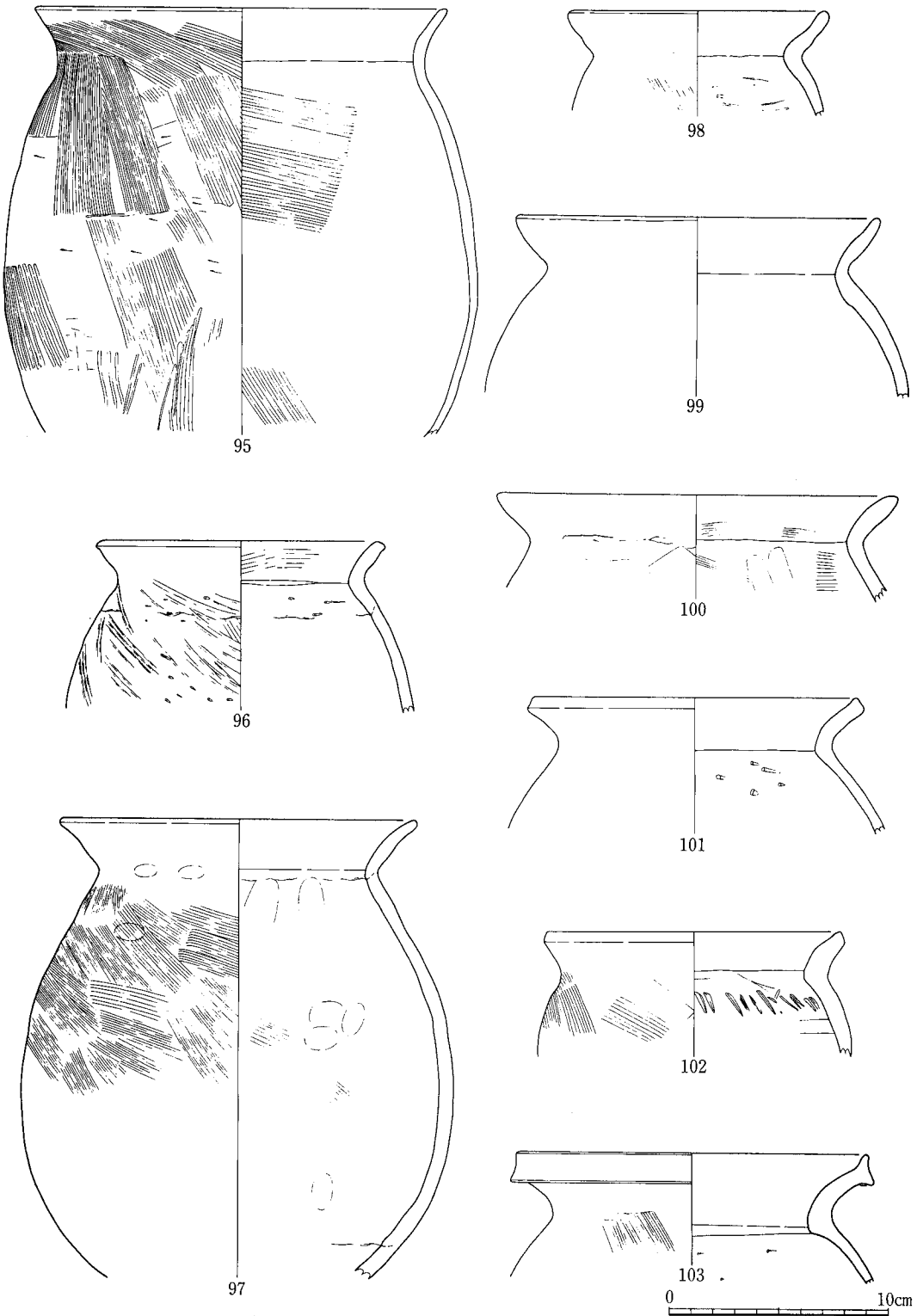
第19図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



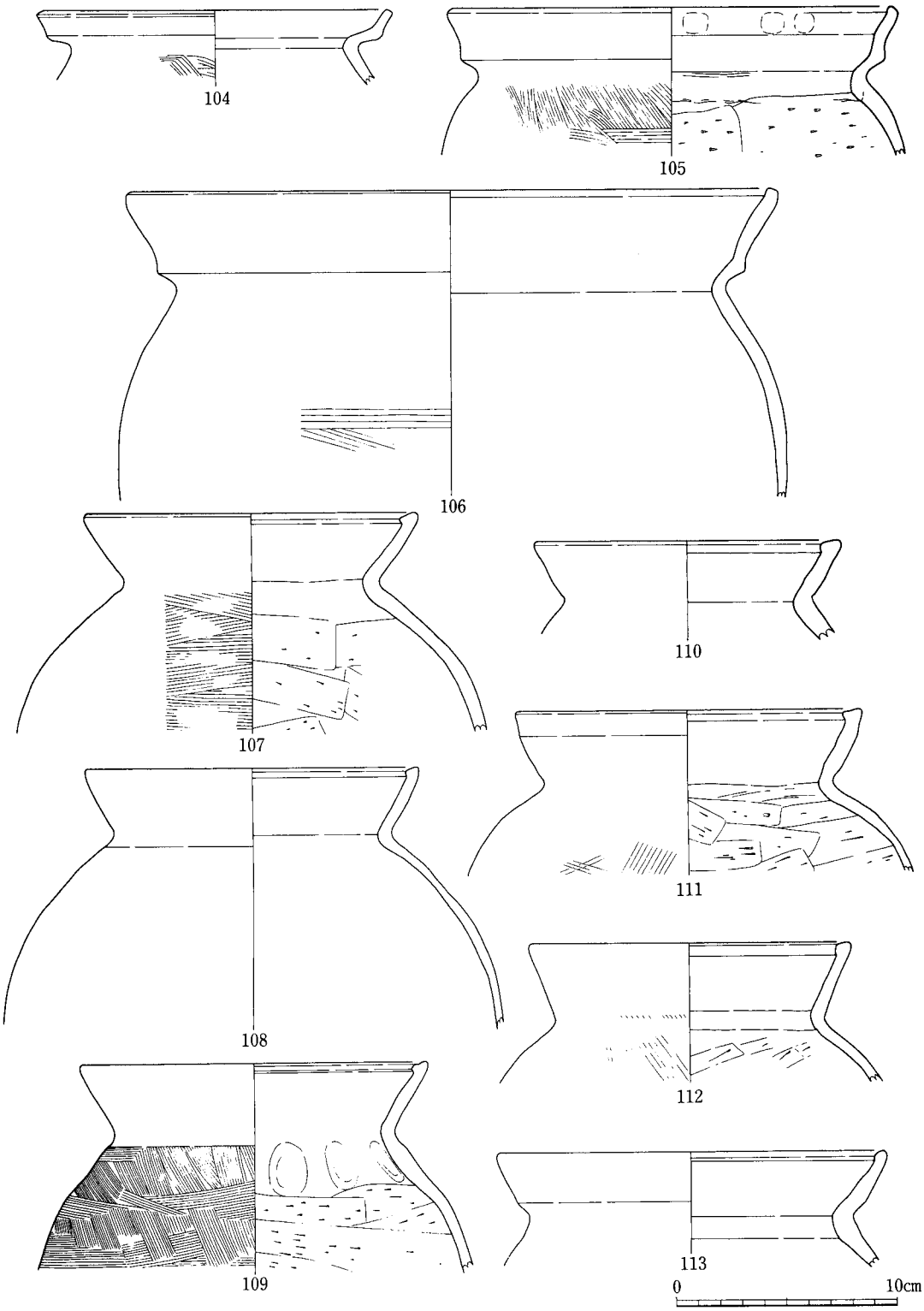
第20図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



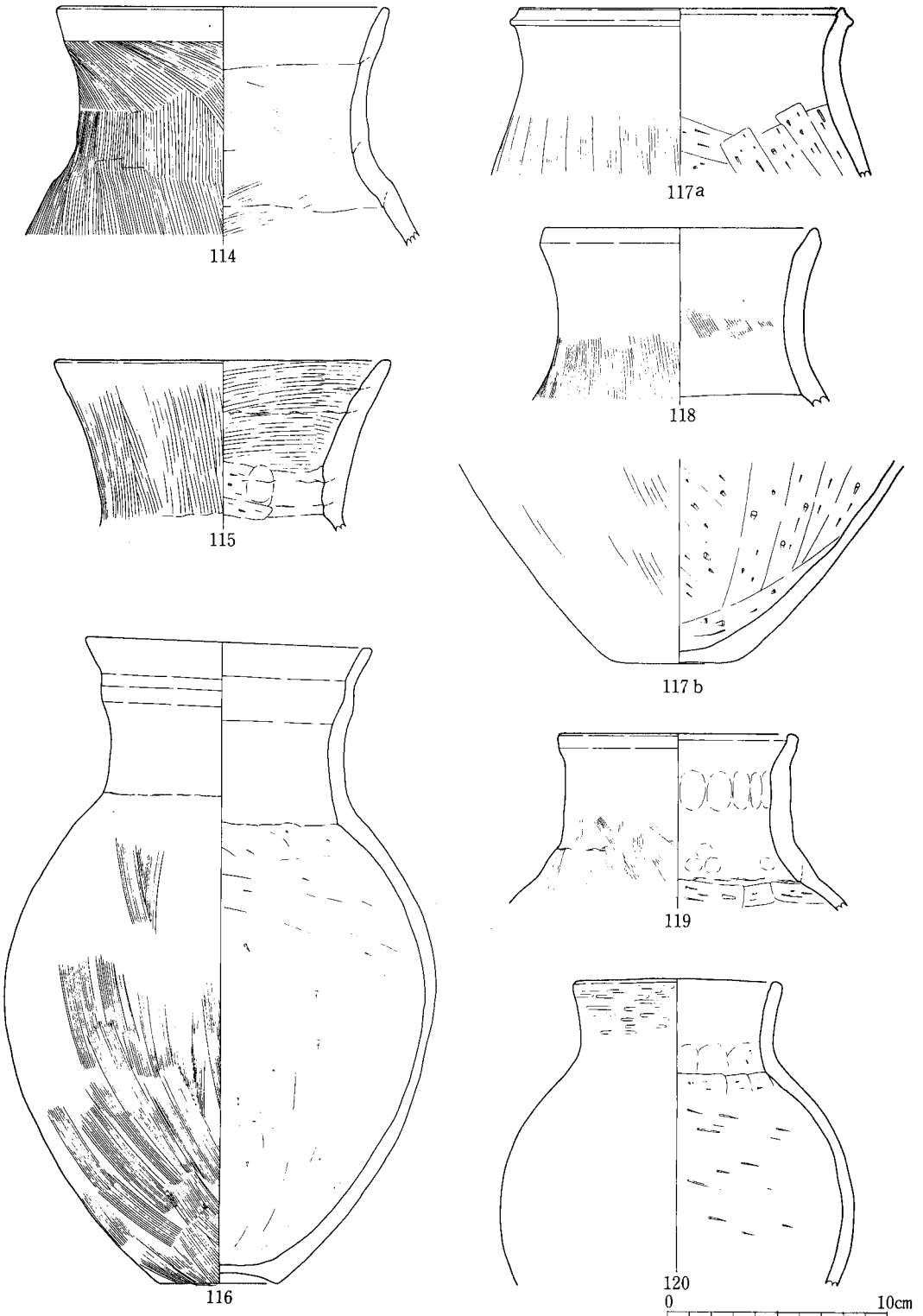
第21図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



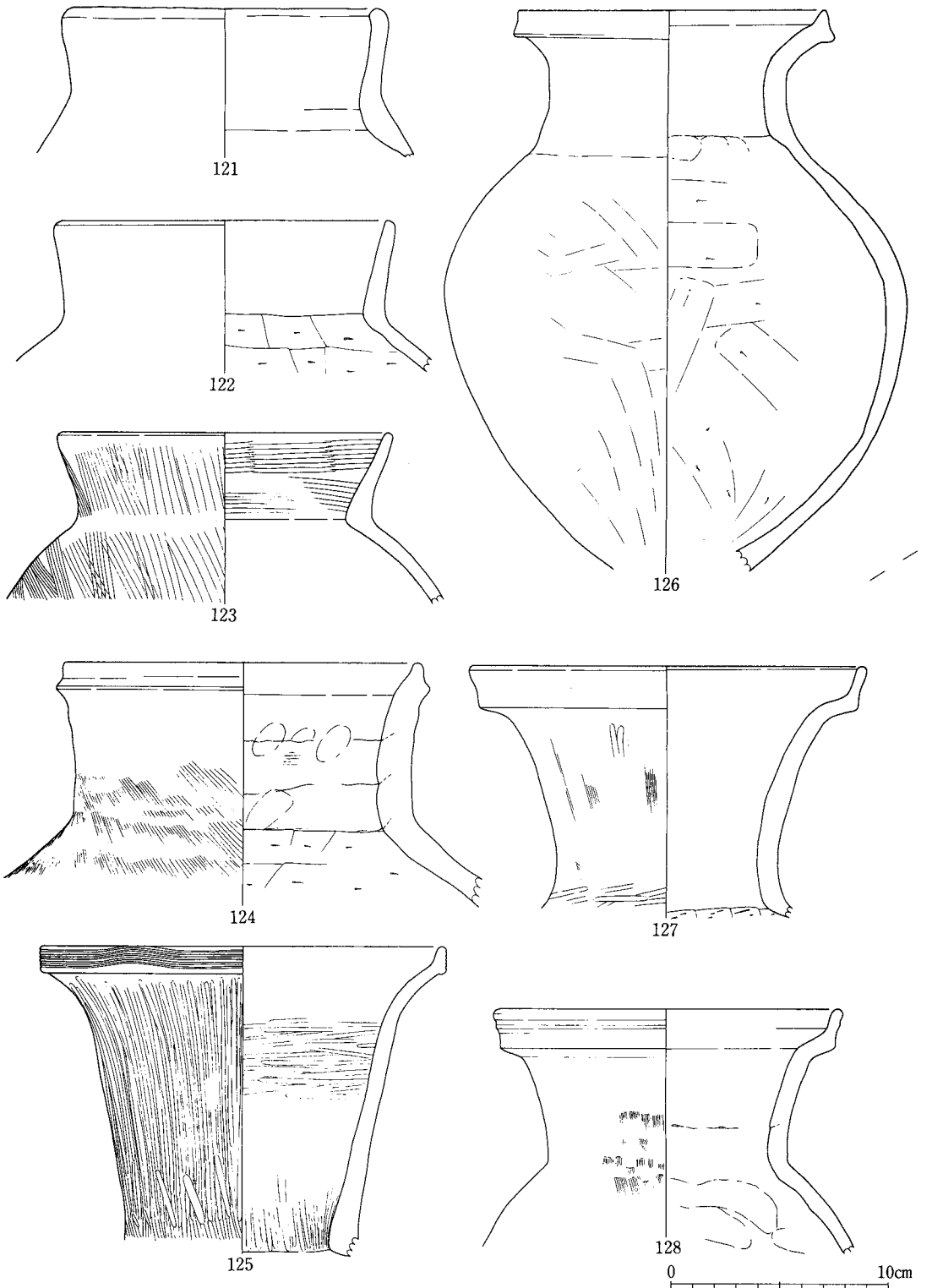
第22図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



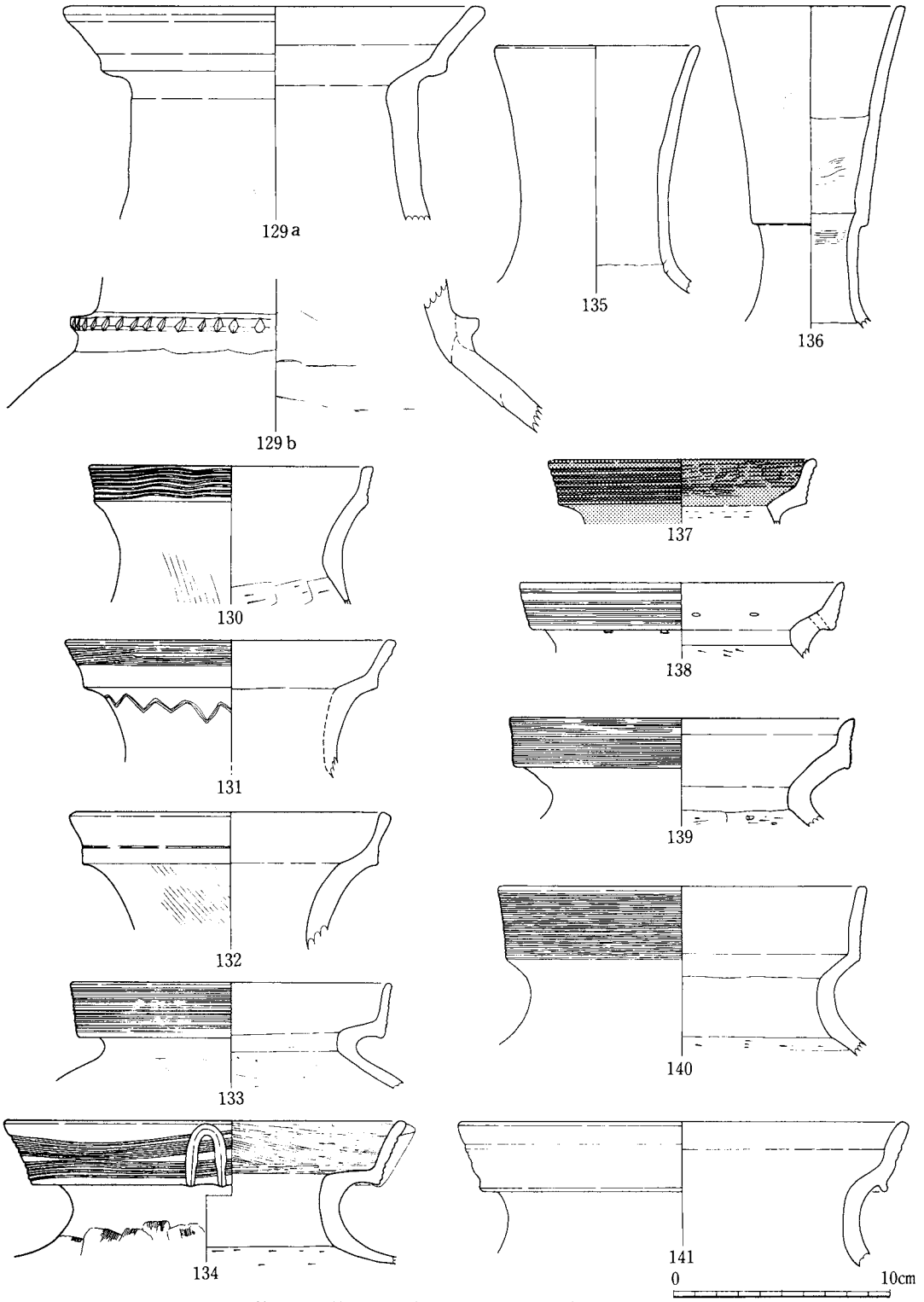
第23図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



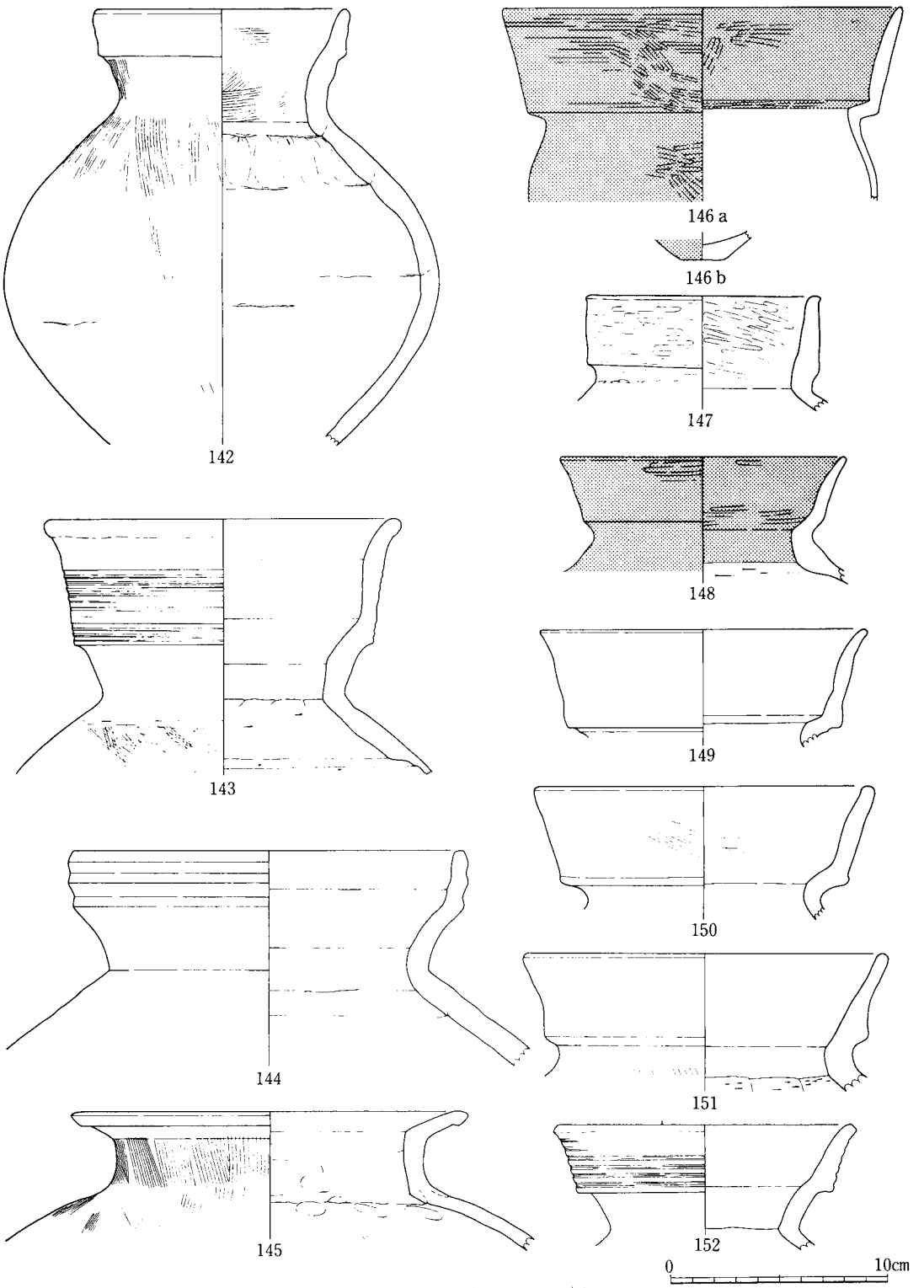
第24図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



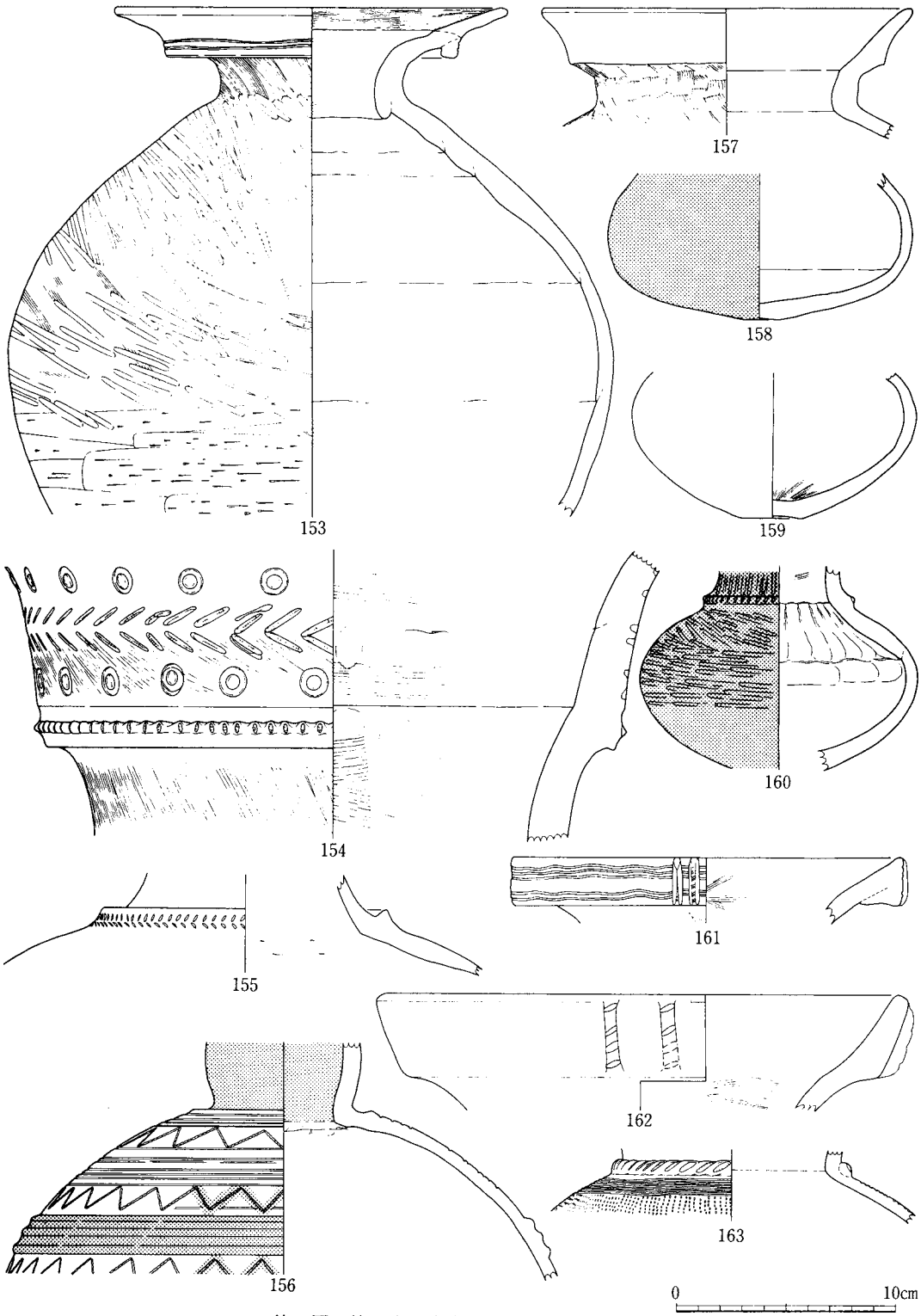
第25図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



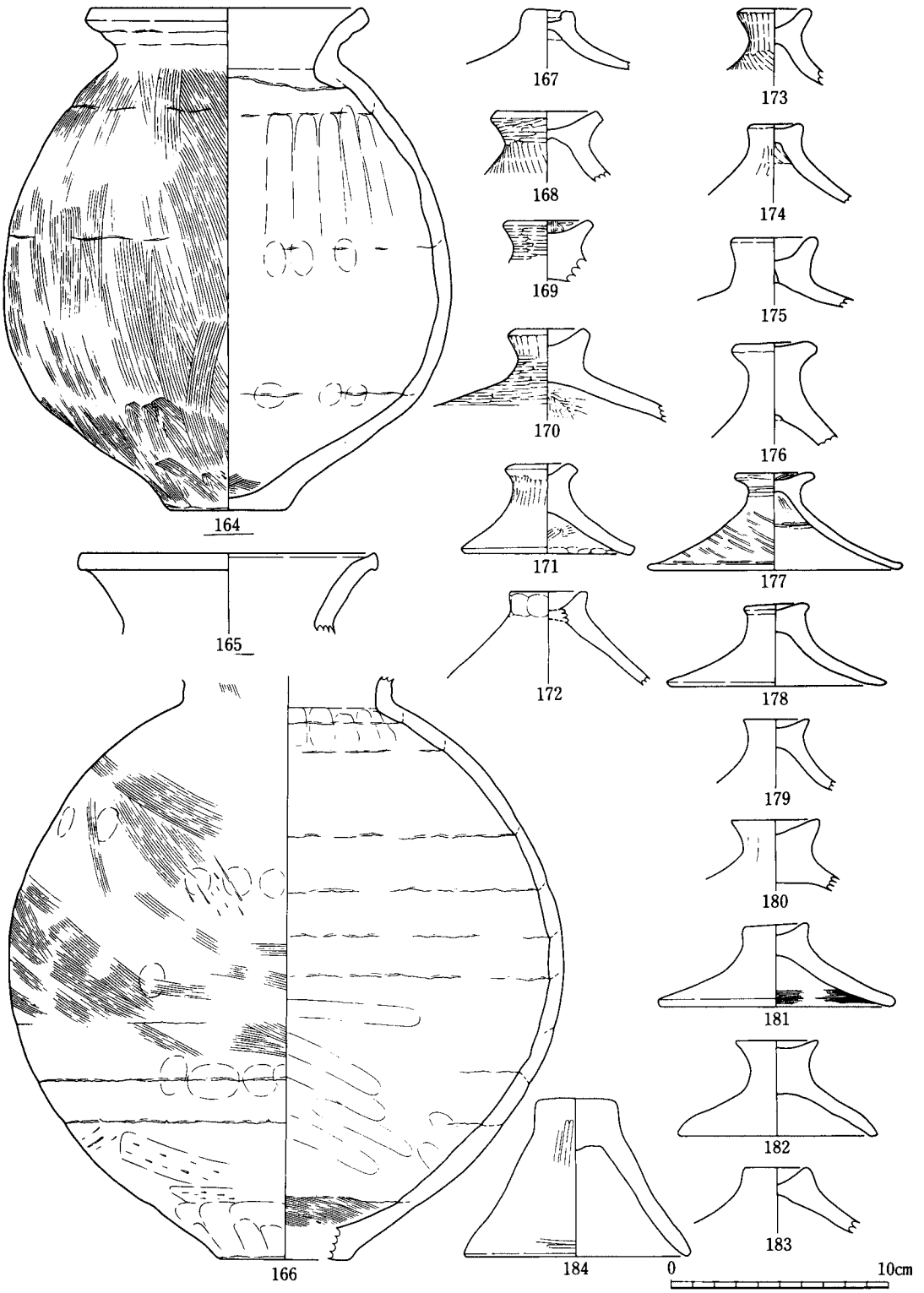
第26図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



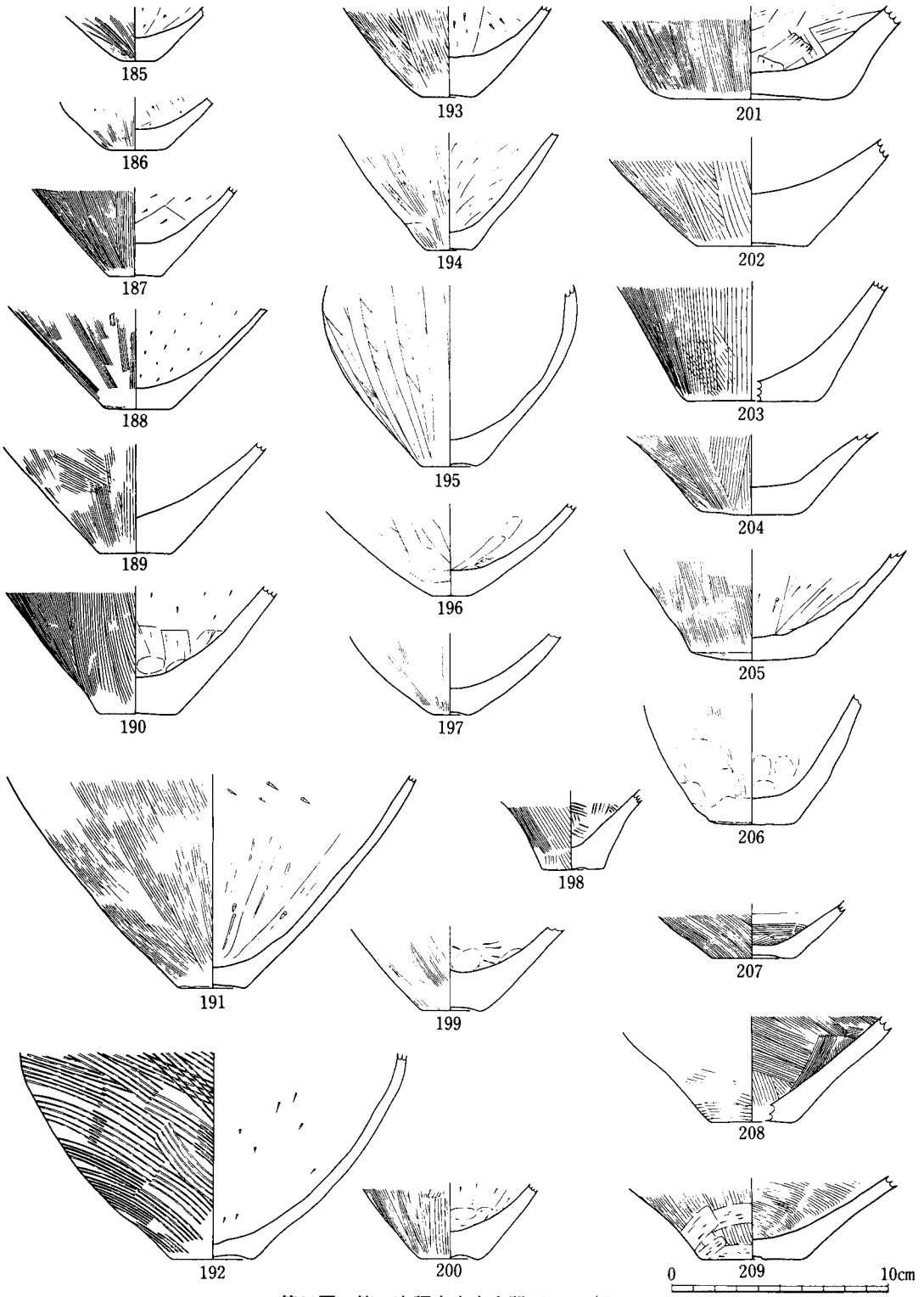
第27図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



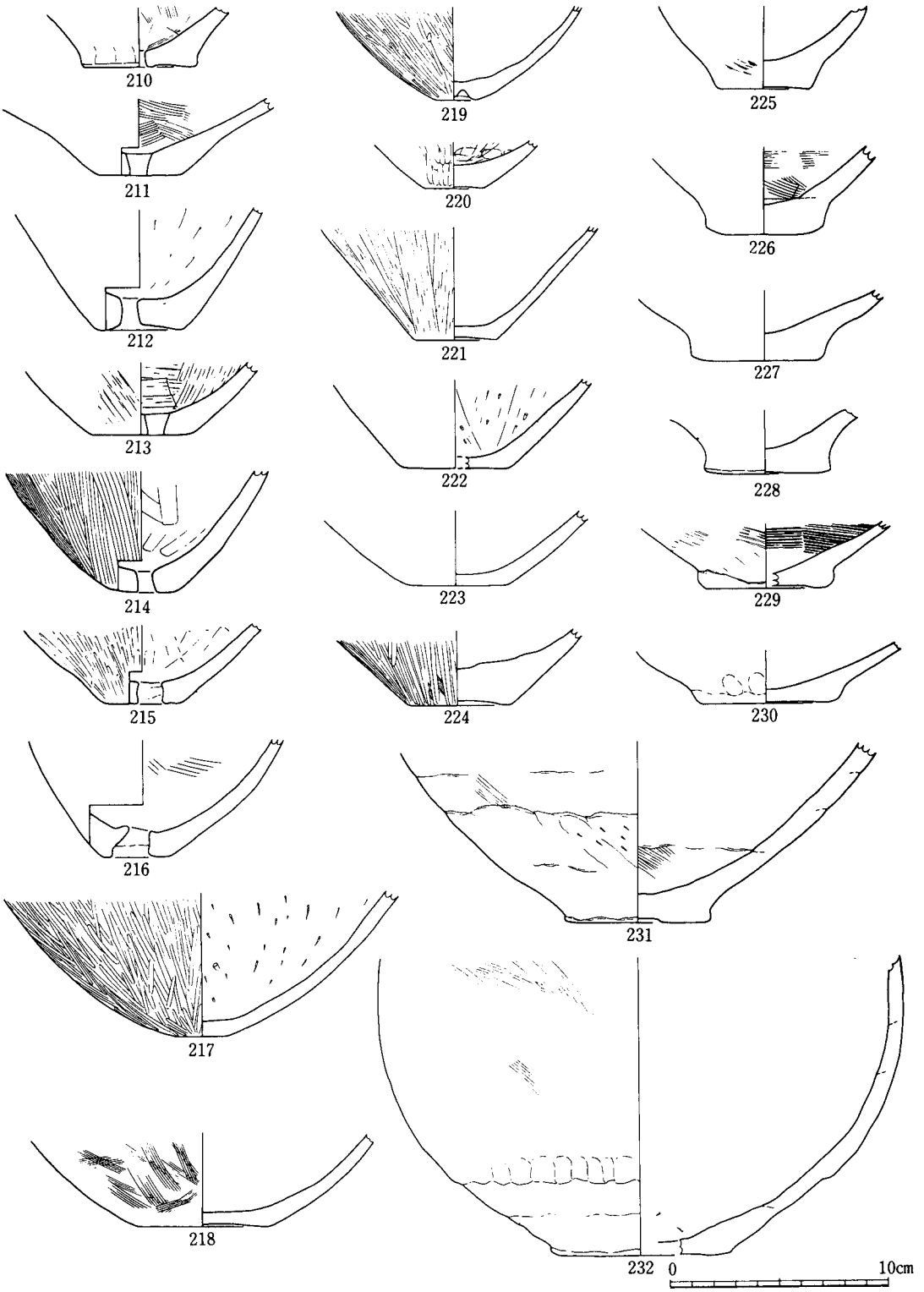
第28図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



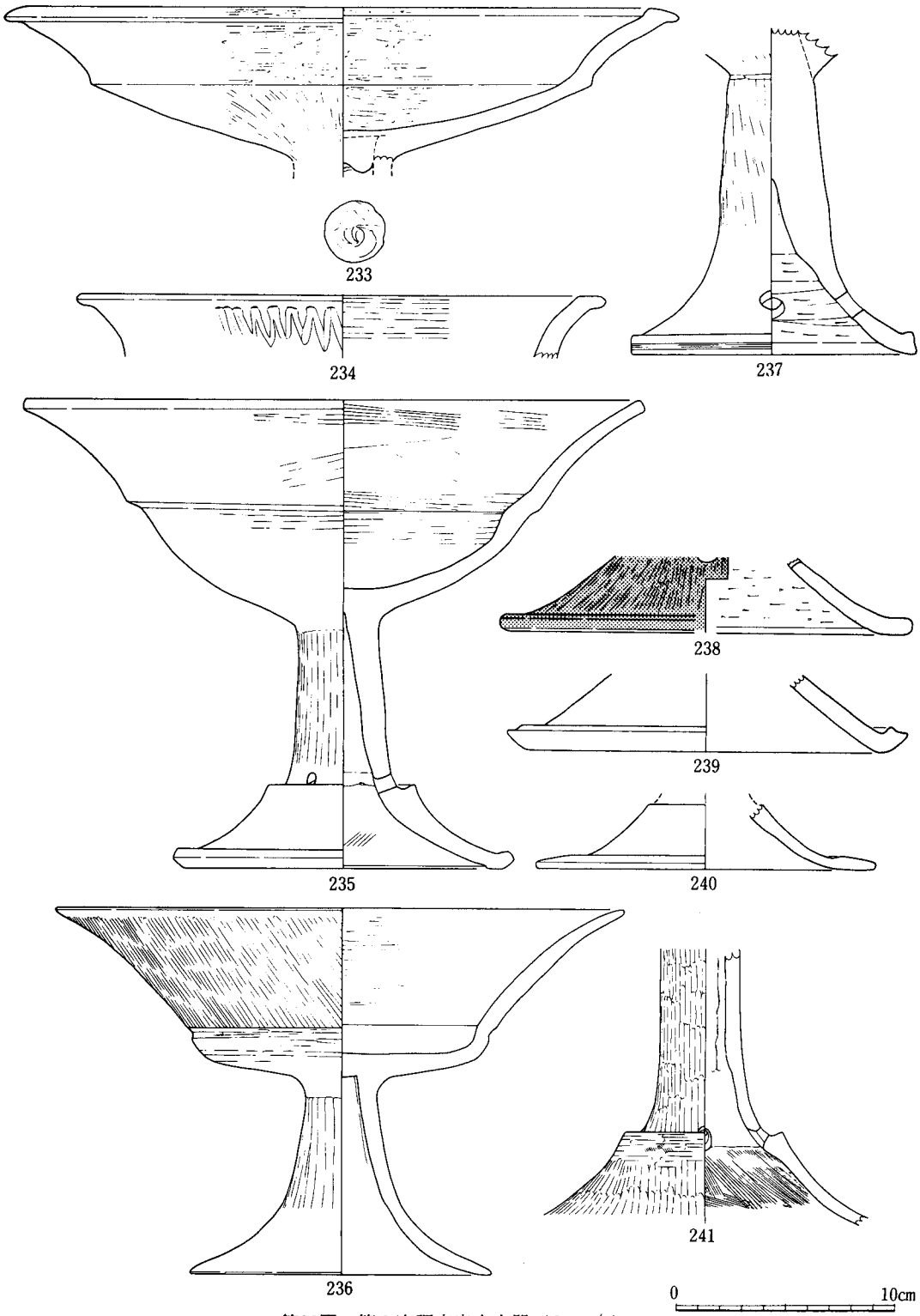
第29図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



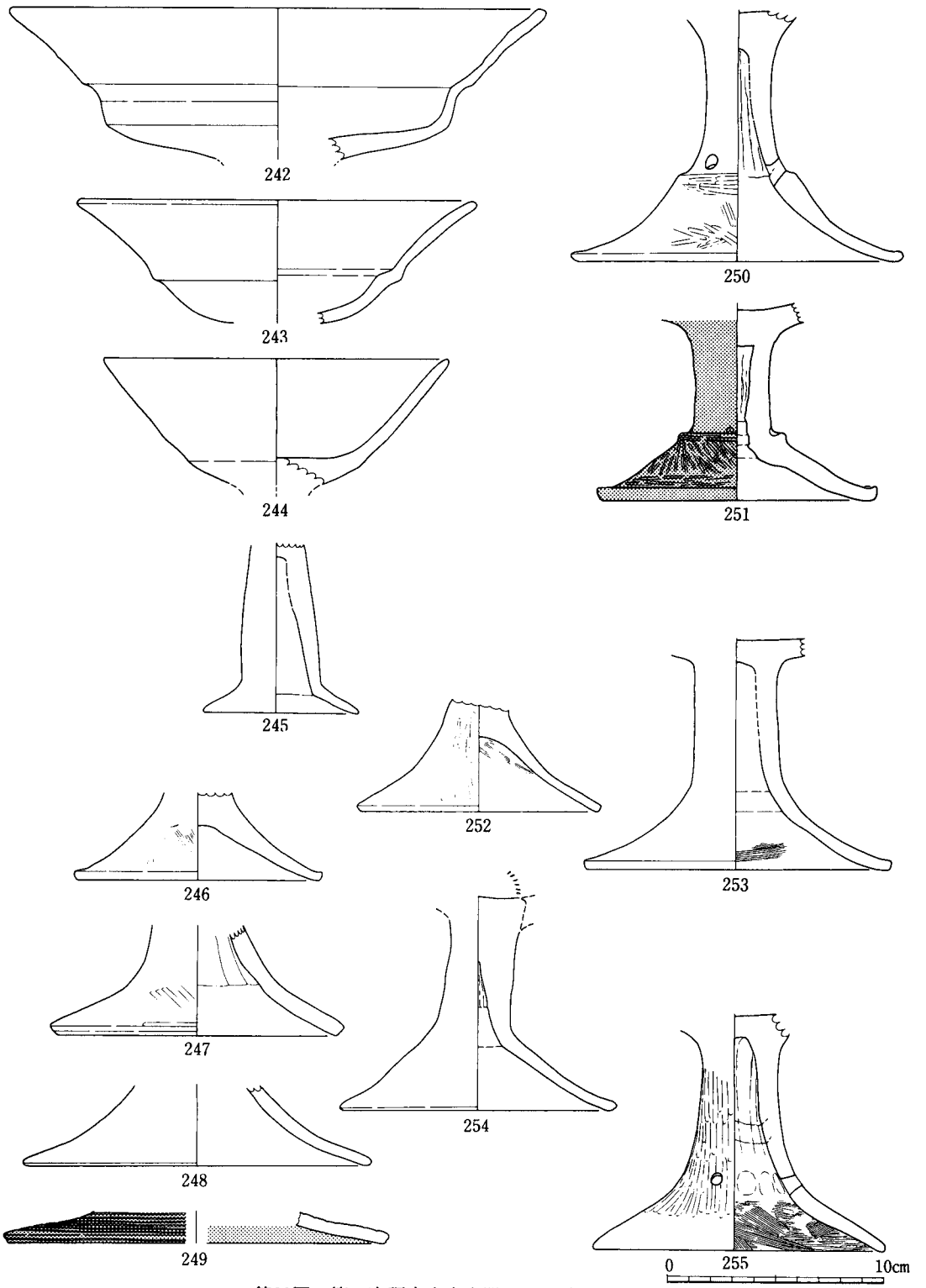
第30図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



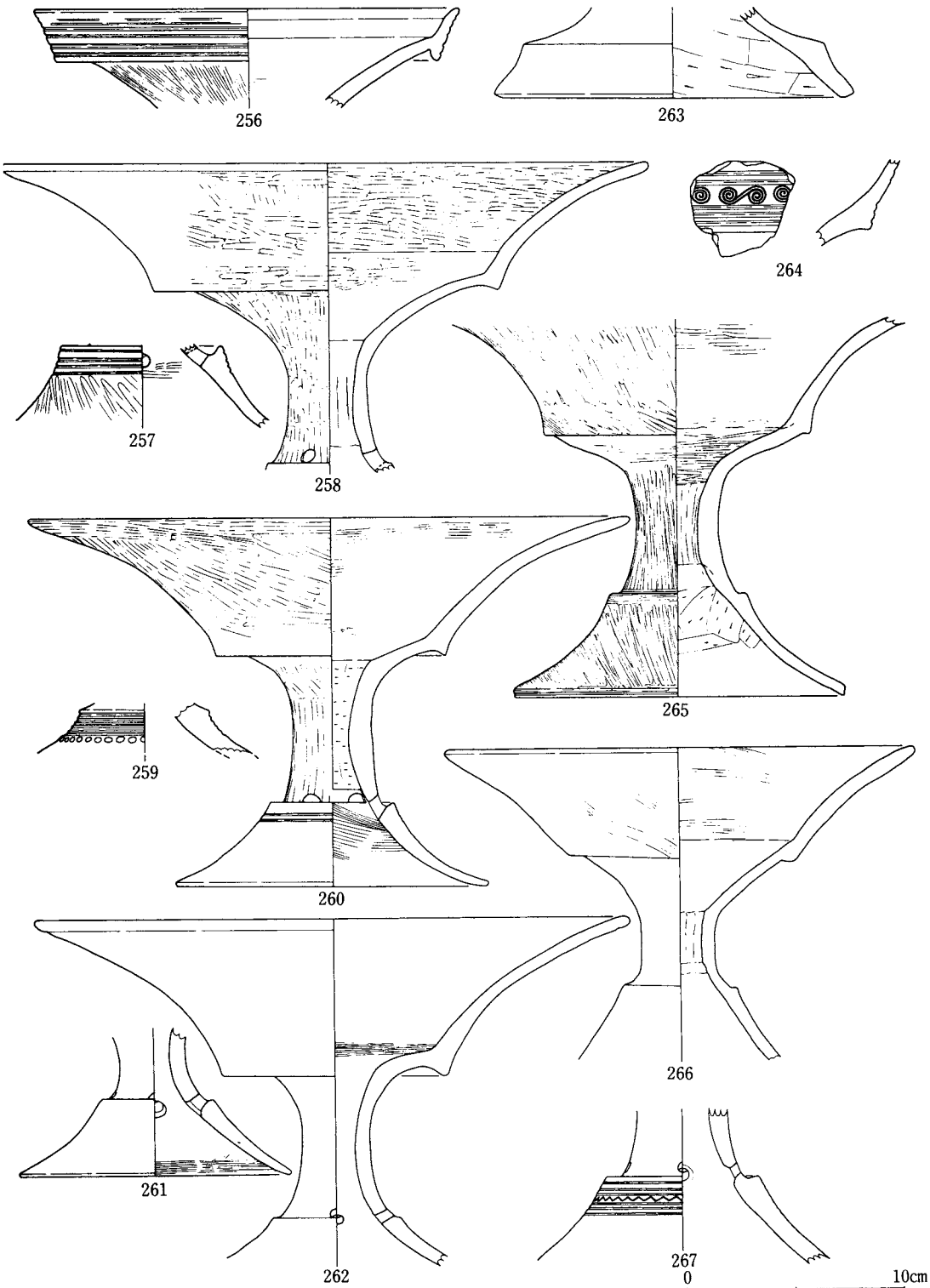
第31図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



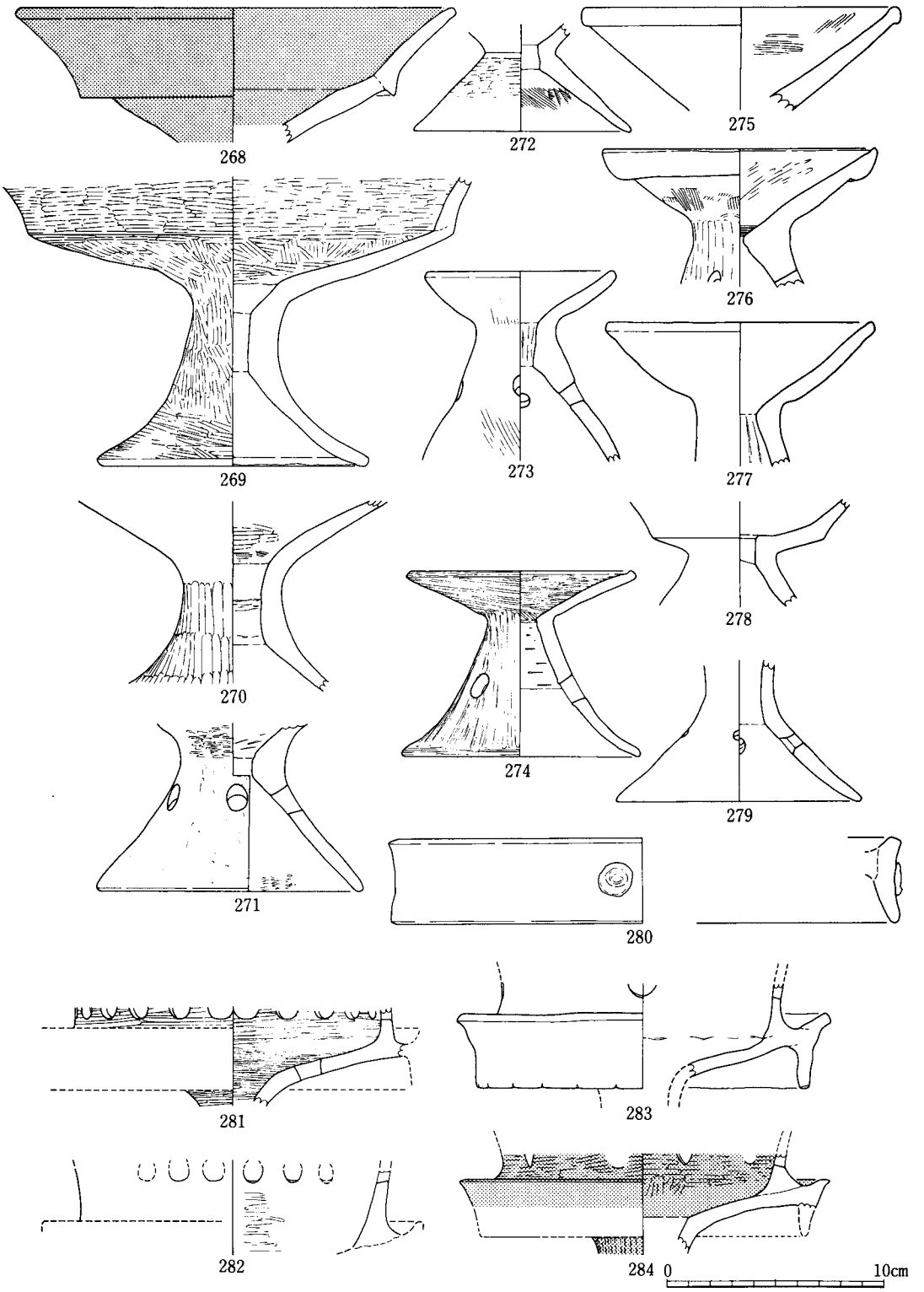
第32回　第２次調査出土土器（S＝1/3）



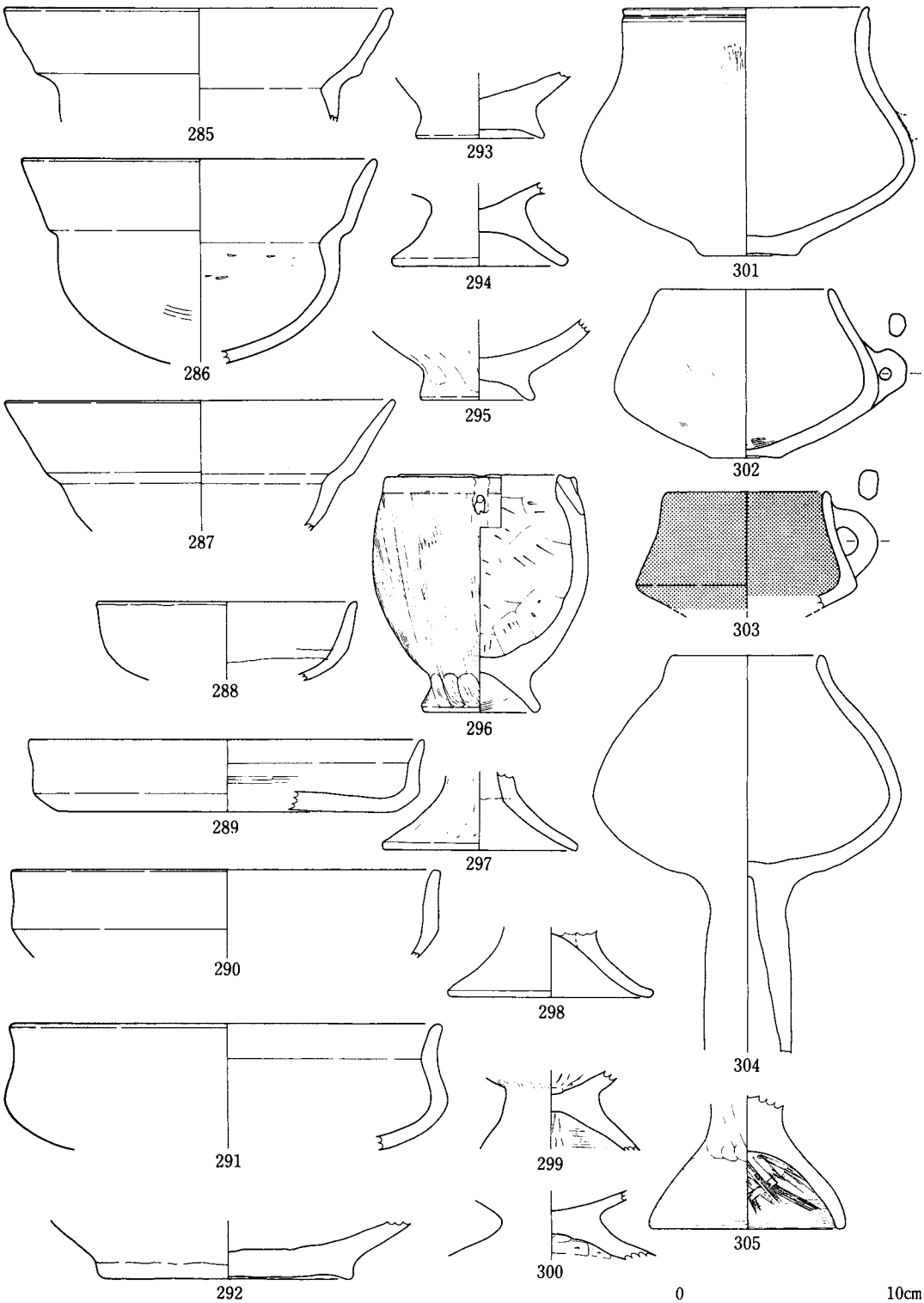
第33図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



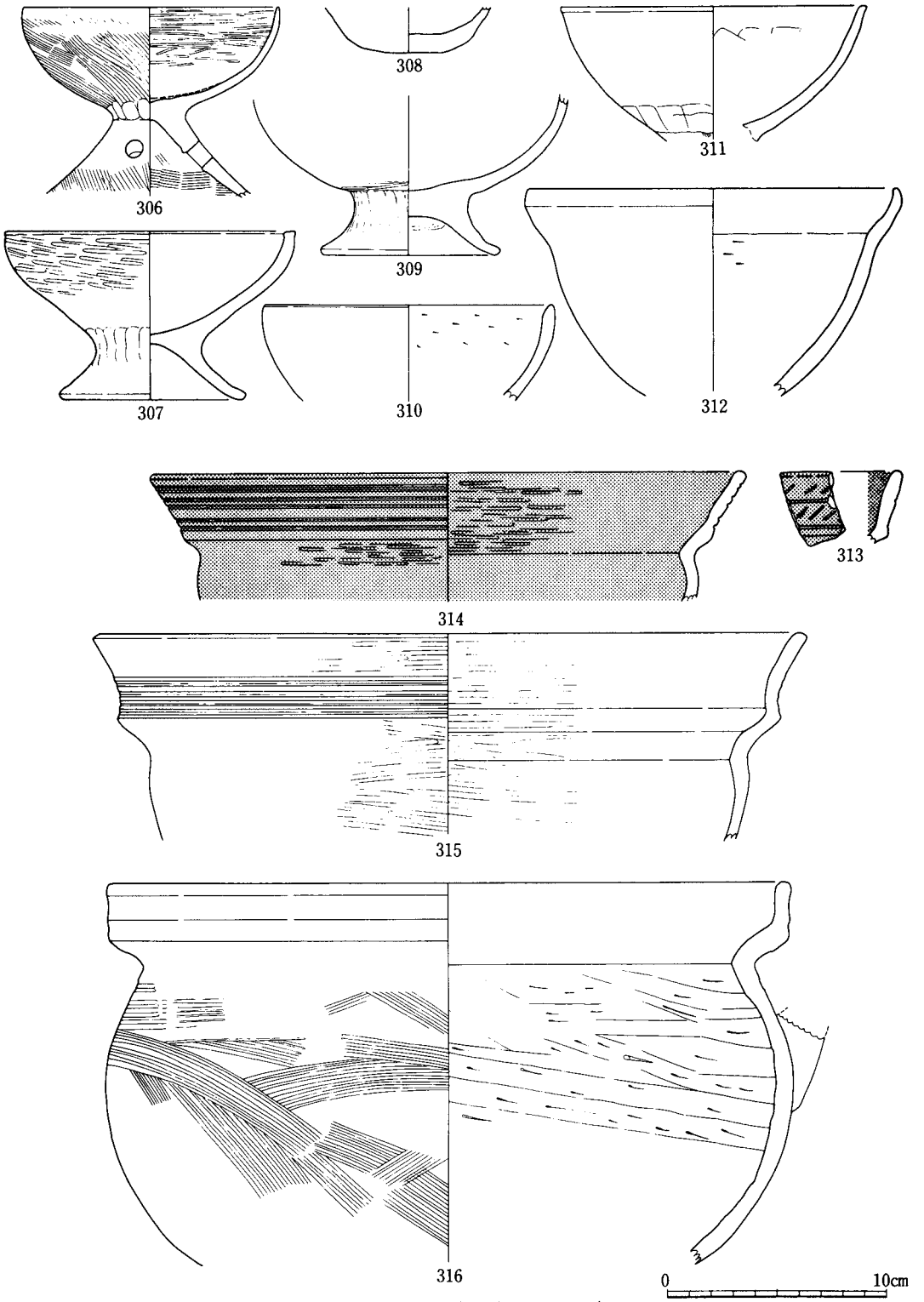
第34図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



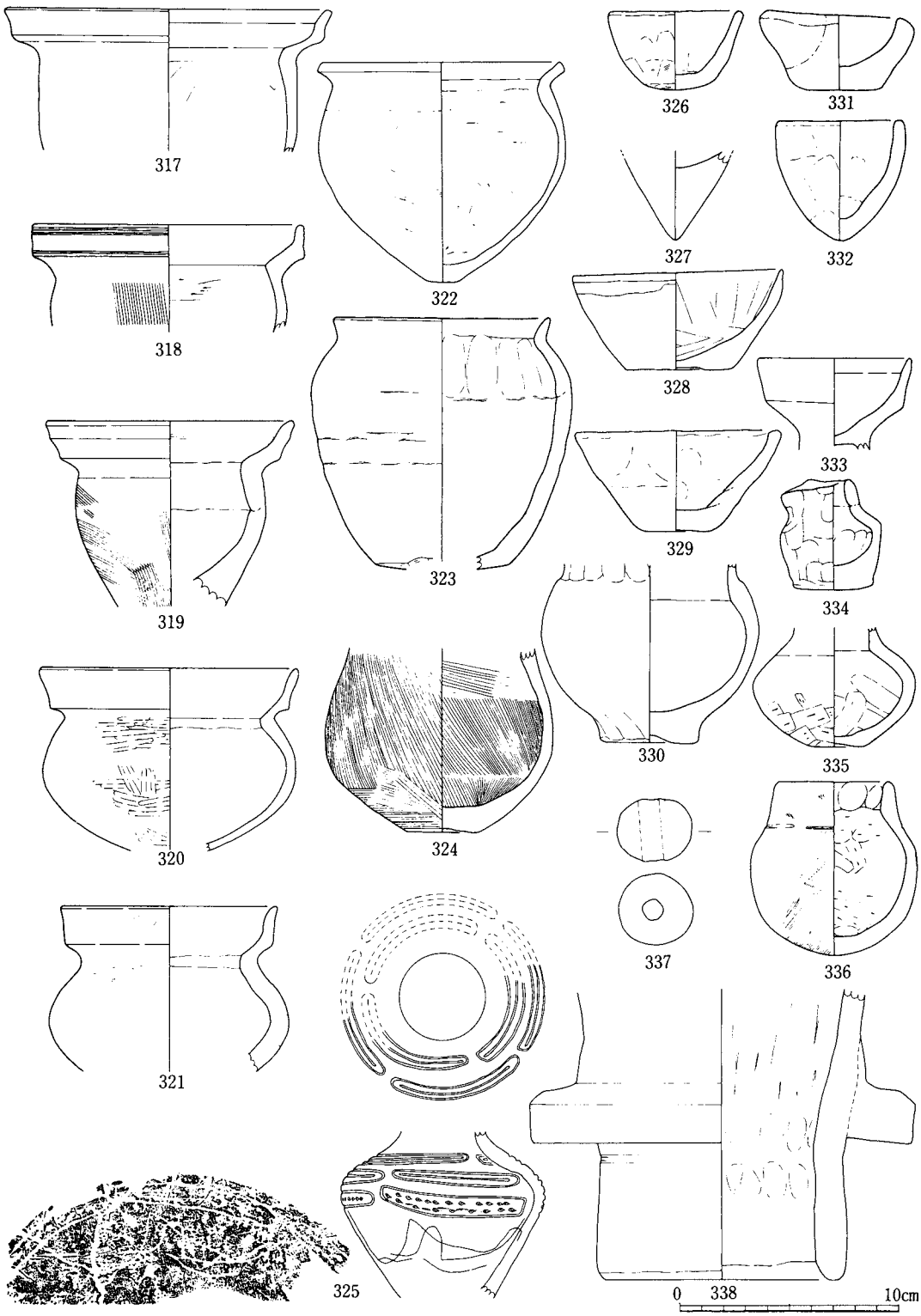
第35図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



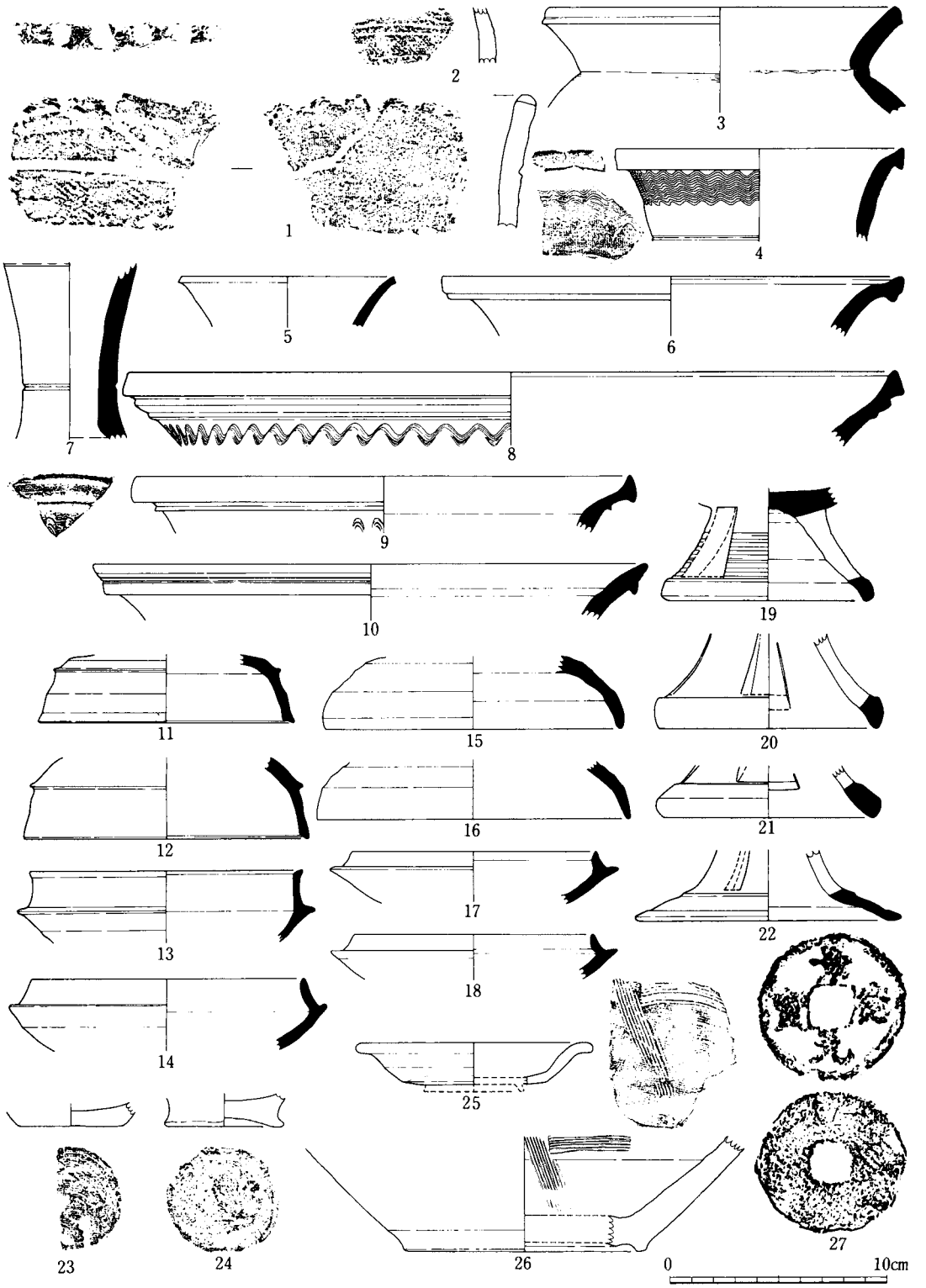
第36図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



第37図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



第38図　第２次調査出土土器（S＝1/3）



第39図　第２次調査出土縄文土器・須恵器ほか（S＝1/3、27はS＝1/1）

第3表　第1次調査出土土器観察表

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外／内	備考
7-1・2 包含層	土師器 甕G	口径 17	やや良／並	茶褐色～黒褐色／茶褐色	内外面ヨコナデ、外面煤付着
2・2 包含層	〃	〃 10.2	やや良／並	淡茶褐色	口縁内面・外面ヨコナデ、頸部内面ナデ、外面一部煤付着
3・1 包含層	〃	〃 9.8	並／良	暗褐色	口縁外面煤付着
4・1 包含層	弥生 把手		やや不良／不良	にぶい黄橙色	上面ケズリ、他面ナデ、左方に黒斑
5・ 表採	〃		不良／並	灰白色	上部黒斑
6・ 包含層	〃		やや不良／並	にぶい黄橙色	内面ケズリ、接合部刷毛調整
7・ 包含層	〃		やや不良／やや不良	浅黄橙色	内外面ナデ、接合部刷毛調整
8・2 包含層	須恵器 蓋	口径 13.2	やや不良／並	灰色	内外面ヨコナデ
9・2 包含層	須恵器 杯	〃 11.2	良／良	灰色	内外面ヨコナデ
10・ 包含層	〃	〃 11	並／良	灰色	内外面ヨコナデ、体部外面自然釉
11・1 包含層	〃	〃 12.8	並／並	灰色	内外面ヨコナデ、体部外面自然釉
12・ 包含層	須恵器 高杯脚	脚部径8.4	やや良／並	灰色／灰～暗灰色	内外面ヨコナデ、外面自然釉、方形透穴4孔
13・ 包含層	須恵器 壺		やや良／並	灰色	内外面自然釉
14・1 包含層	〃		並／並	灰色	内外面ヨコナデ、外面凸帯より下方うすく自然釉
15・1 トレンチ	弥生甕 A	口径 15.7	並／並	淡黄橙色	擬凹線6、内外面摩耗、口縁外面一部煤付着
16・1 トレンチ	〃 A	〃 15.4	並／並	淡茶褐～黒褐色／淡茶褐色	擬凹線7、内外面ヨコナデ、口縁外面煤付着
7-17・1 トレンチ	〃 A	〃 17.2	やや不良／並	暗茶褐色／灰褐色	擬凹線7か？内外面ヨコナデ、外面一部煤付着
18・1 トレンチ	〃 A	〃 19.2	やや不良／不良	淡黄橙色	擬凹線あるも数不明、内外面摩耗
19・1 トレンチ	〃 A	〃 16.5	やや不良／並	黒褐色／淡茶褐色	擬凹線4、内外面ヨコナデ、外面煤付着
20・1～3 トレンチ	弥生壺 E	〃 13.6	やや不良／不良	にぶい黄橙色	内外面摩耗
8-21・1 トレンチ	弥生甕 D	〃 16	やや不良／並	茶褐～黒褐色／茶褐色	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外面煤付着
22・1 トレンチ	弥生壺	〃 10.8	並／並	淡黄橙色	口縁内外面ヨコナデ
23・1 トレンチ	弥生土器底部	底径 2.1	やや良／並	にぶい黄橙色 黒褐色	外面ナデ・ミガキ、内面ケズリ、底部に黒斑
24・1 トレンチ	〃	〃 1.8	やや不良／並	暗黄橙色／淡黄橙色	内面ナデ、外面ハケ・ナデ、外面一部煤付着
25・1 トレンチ	弥生台付壺		並／並	淡黄橙色	底、外面ハケ・ミガキ
26・1 トレンチ	弥生蓋	鈕部径1.8 口径 7.1 器高 2.9	良／並	黄橙色／淡黄橙色	外面ミガキ・化粧土が施されている
27・1 トレンチ	弥生高杯B	口径 25	並／並	にぶい黄橙色	内外面摩耗
28・1 トレンチ	弥生高杯脚部		良／良	橙色／淡黄橙色	内面ナデ、外面ミガキ、透穴4
29・1 トレンチ	弥生器台脚部		やや良／並	淡黄橙色	透穴4、内外面摩耗
30・2、3 トレンチ	弥生高杯脚部	脚部径9.5	やや良／並	淡黄橙色	裾部・外面摩耗脚内面ヨコナデ
31・2、3 トレンチ	弥生小型壺	胴径 8.3	やや良／良	浅黄橙色	胴内面ナデ、外面摩耗
32・2～4 トレンチ	須恵器 高杯？		やや良／並	灰色	波状文、内外面ヨコナデ

（番号・区、出土状況欄、7－1・2、包含層：本書第7図1、2区包含層出土の意味。第4表も同様。）

第４表　第２次調査出土土器観察表（１～８）　1

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外／内	備考
14-1・1 遺構上面	甕Ａ１	口径 16	並／並	黒褐色	擬凹線５条（以下74まで数のみ）、内外面ヨコナデ
2・2 遺構上面	〃	〃 17	やや不良／並	淡橙色	3、外面ヨコナデ・煤付着
3・ 表採	〃	〃 17.8	並／やや不良	茶褐色／淡茶褐色	3、外面ヨコナデ・外面煤付着
4・6 土器群13	〃	口径 19.2 底径 5	並／並	淡茶褐色	9、口縁・外頸ヨコナデ、外面煤付着、外面一部暗茶褐色
5・8 表採	〃	口径 17.1	やや不良／並	淡黄橙色／濁黄橙色	4、内外面ヨコナデ
6・5 たちわり	〃	〃 15・9	やや不良／並	黒褐色	3、口縁内ヨコナデ、胴部内ケズリ、外面摩耗
7・6 土器群13	〃	〃 18.4	やや不良／並	淡黄橙色	8、内外面摩耗
8・6 遺構上面	〃	〃 17.5	並／良	淡黄橙色	5、内面摩耗
9・9 表採	甕Ａ２	〃 14	良／並	淡黄橙色	4、口縁内面ヨコナデ
10・9 土器群24	〃	〃 14.1	やや良／並	淡茶褐色	(2)、口縁・頸部ヨコナデ
11・8 土器群19	〃	〃 16.8	良／並	淡灰褐色	4、内外面ヨコナデ
12・7 溝上層	〃	〃 17.6	良／良	暗茶褐色	12、外煤付着、内面一部淡茶褐色
13・2 土器群６	〃	〃 17.6	並／並	黄橙色 灰白色	14、外面煤付着
14・6 土器群13	〃	〃 17.8	やや不良／並	にぶい黄橙色	7、外面煤付着内面摩耗
15・8 土器群 21、22	〃	〃 14.5	並／並	淡茶褐色	4～5、内外面ヨコナデ
16・2 表採	〃	〃 14.4	並／並	淡黄色	11、内外面ヨコナデ
17・6 土器群14	〃	〃 18.3	やや不良／良	濁黄橙色	7～8、外面部分的煤付着
18・8 たちわり	〃	〃 19.9	やや良／並	灰褐色	6、内外面ヨコナデ、外面一部淡茶褐色
15-19・9 溝上層	甕Ａ３	〃 19	やや不良／良	淡黄橙色	7、口・頸部ヨコナデ
20・2 表採	甕Ａ２	〃 18	並／並	黄橙色	7、外面煤付着内面淡黄橙色
21・7 土器群18	甕Ａ３	〃 19.8	並／並	淡黄橙色、外一部淡灰褐色	6、口・頸ヨコナデ、胴外摩耗一部ハケ残存、189と同一個体
22・9 表採	〃	〃 18.8	やや良／並	灰褐色／暗灰褐色	14、内外面ヨコナデ、外面一部煤付着
23・8 土器群19	甕Ａ２	〃 19.8	やや不良／並	淡灰褐色	7、内外ヨコナデ、外煤付着
24・6 土器群13	甕Ａ３	〃 20	やや不良	淡褐色	10、内外面ヨコナデ
25・8 土器群19	〃	〃 17	やや不良	淡茶褐色	8、内面ヨコナデ、外面摩耗
26・8 表採	甕Ａ２	〃 20	やや不良／並	におい黄橙色	8～9、内外面ヨコナデ、口縁外上部黒斑
27・6 土器群14	〃	〃 16.3	やや不良／並	濁黄橙色	4、内外ヨコナデ、外面煤付
28・2 土器群６	〃	〃 15	やや不良／並	にぶい黄橙色	7、内外ヨコナデ、外煤付着
29・2 遺構上面	甕Ａ３	〃 19.8	やや良／良	淡黄橙色	8、内外面ヨコナデ
30・7 土器群19	〃	〃 18	やや良／やや不良	淡黄橙色	5、内外摩耗、内胴部ケズリ
31・10 土器群27	〃	〃 14.8	やや不良／良	暗茶褐色／暗灰褐色	6、内外面ヨコナデ
32・11 土器群28	甕Ａ４	〃 17.8	やや良	淡褐色	6、内外面ヨコナデ、外煤付着
16-33・11 土器群28	〃	〃 14.6	並／並	茶褐色／淡茶褐色	8、内外面ヨコナデ、外面煤付着
34.8 土器群21	〃	〃 16.9	やや良／やや不良	淡橙色／淡黄橙色	6、外面強いヨコナデ、内面摩耗
35・6 土器群14	〃	〃 17.5	並／並	黒褐色／黄橙色	10、内外面ヨコナデ、外面煤付着
36・2 土器群４	〃	〃 18	並／並	淡黄橙色	6、口内ヨコナデ、外煤付着
37・9 土器群 21、22、22-2	〃	〃 18.8	並／並	淡黄橙色／淡茶褐色	7、内外面ヨコナデ
38・2 土器群６	〃	口径 14.8 胴径 15.4	やや不良／並	暗褐色／黄橙色	4、内外面ヨコナデ、外面煤付着
39・8 土器群21	〃	口径 20.8	やや不良／並	淡黒褐色	6、口内ヨコナデ、外摩耗、外一部淡黄橙色
40・2 土器群６	〃	〃 20.6	並／良	黄橙色	5、外面煤付着
41・8 土器群21	〃	〃 18.4	並／並	淡黄橙色	7、内外ヨコナデ、外煤付着
42・9 表採	〃	〃 17.4	やや良／並	淡黄橙色	6、内外面ヨコナデ
43・4 土器群８	〃	口径 18 胴径 22.8 底径 2.8 器高推(26)	やや不良／並	淡黄橙色	4～5、外面煤付着、内面炭化物付着
17-44・6 土器群14	〃	口径 19	やや不良／並	淡黄橙色	7、内外面ヨコナデ
45・2 遺構上面	〃	〃 17.2	やや不良／並	淡赤橙色／淡灰褐色	4以上、内外面ヨコナデ
46・3 遺構上面	〃	〃 17	並／良	濁黄橙色／淡橙褐色	10、口縁内面摩耗、外面ヨコナデ・煤付着
47・6 土器群14	〃	〃 20.5	やや不良／良	淡橙色	7、内外面ヨコナデ
48・7 土器群18	〃	〃 18.4	並／並	淡灰褐色	6～7、内外ヨコナデ、外煤付

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
49・9 表採	〃	〃 16.4	並／並	淡黄橙色	4、口縁内面・外面ヨコナデ
50・6 土器群13	〃	〃 18.8	不良／良	黄橙色／淡黄橙色	5、内外面摩耗
51・9 土器群23	〃	〃 17	並／並	淡黄橙色	6、口内ヨコナデ、外摩耗
52・2 表採	〃	〃 17.2	やや良／並	淡黄橙色	6、内外面ヨコナデ
53・8 土器群21	〃	〃 16.8	良／良	淡灰褐色	6、口縁内面ヨコナデ
54・3 遺構上面	〃	〃 15.4	並／並	淡茶褐色	6、内外ヨコナデ、外煤付着
55・2 表採	〃	〃 18	並／並	淡黄橙色	9、内外面ヨコナデ
56・6 土器群14	〃	〃 16.1	良／良	黄橙色	6〜、口内ヨコナデ、外煤付、外一部淡黒褐色
57・6 土器群14	〃	〃 17.6	並／やや不良	淡灰褐色／濁黄橙色	7、内面摩耗、外面薄く煤状のもの付着
58・6 土器群13	〃	〃 16.2	やや不良／並	濁黄橙色／淡黄橙色	7、内外面摩耗、外面部分的に濃く煤付着
18-59・6 土器群14	甕B 2		やや不良／並	濁淡黄橙色	口縁外一部・内面ヨコナデ、口縁部歪みあり
60.2 遺構上面	甕A 2		やや不良／並	淡灰褐色	6、内外面ヨコナデ
61・7 溝上層	〃	口径 23.4	並／やや不良	淡黄橙色	5、内面摩耗、外面ヨコナデ
62・8 表採	甕A 4	〃 23.8	並／良	淡黄橙色	9、内外面ヨコナデ
63・9 表採	甕A 3	〃 22	やや不良／並	濁黄橙色	15、外面ヨコナデ
64・8 表採	〃	〃 23	やや不良／並	にぶい黄橙色	16、内外摩耗、外面薄く煤付着
65・2 土器群 6	〃	〃 13・5	やや良／やや不良	濁黄橙色／灰白色	6、内外面ヨコナデ、外面煤付着
66・2 土器群 4	〃	口径 13.2 胴径 12.8	やや不良／良	黄橙色／淡黄橙色	5、外面ヨコナデ・煤付着
67・2 土器群 6	甕A 4	口径 12 胴径 12.3	やや不良／並	にぶい橙色／灰褐色	7、内外面ヨコナデ、外面煤付着
68・8 表採	〃	口径 13・3	やや良／やや不良	灰褐色／淡灰褐色	6、内外面摩耗、外面煤付着
69・2 表採	〃	〃 13	やや不良／並	濁黄橙色／灰褐色	9、内外面ヨコナデ、外面煤付着
19-70・9 土器群25	甕A 3	〃 34	やや不良／やや不良	にぶい灰褐色	9、内面摩耗、外面ヨコナデ
71・2 土器群 4	甕A 2	〃 30.4	やや不良／並	淡黄橙色	17、内外面ヨコナデ
72・9 土器群24	甕A 4	〃 34.8	並／やや不良	淡黄橙色	8、内外面ヨコナデ
73・2 土器群 6	〃	〃 28.4	やや良／並	淡橙褐色	8、内外摩耗、口縁外黒斑

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
74・2 遺構上面	〃		やや良／並	淡黄橙色	9、口縁外面煤付着
20-75・6 土器群 9	甕B 2	口径 16	やや良／並	黒褐色	内摩耗、外ヨコナデ・煤付着
76・7 土器群17	〃	〃 16	やや不良／やや不良	暗灰褐色／淡灰褐色	口縁ヨコナデ、胴内ケズリ、外面煤付着
77・2 土器群 6	〃	〃 17.5	やや不良	黄橙色	内外面ヨコナデ、胴内ケズリ
78・ 表採	甕B 3	〃 18.7	やや不良／並	淡黄橙色	内外面ヨコナデ、胴内ケズリ
79・8 土器群21	甕B 2	〃 16.4	良／並	淡黄橙色	内面摩耗、外面ヨコナデ
80・8 溝上面	〃	〃 17.2	並／やや不良	灰黄褐色／濁黄橙色	内外面ヨコナデ、外面煤付着
81・6 土器群14	甕B 4	〃 19.5	やや不良／並	黄橙褐色	口縁内ヨコナデ、外摩耗・煤付
82・2 土器群 4	甕B 2	口径 24.2 胴径 26.7 底径 7.8 器高推(34)	やや不良／並	淡黄色／灰白色	口縁内外面ヨコナデ、底部付近内外面黒斑、外面煤付着
21-83・7 土器群16	甕B 3	口径 13.2	やや良／良	茶褐〜淡赤色／淡茶褐色	内外面ヨコナデ、外面煤付着
84・6 土器群14	甕B 4	〃 13.9	やや不良／並	赤橙色／濁黄橙色	内外面ヨコナデ
85・7 土器群17	〃	〃 14.8	やや良／並	淡赤褐色	口縁内面摩耗、外面ヨコナデ
86・9 土器群24	〃	〃 13.5	並／並	淡灰褐色／茶褐色	内外面ヨコナデ、胴内ケズリ
87・2 土器群 6	〃	〃 18.8	やや不良	黄橙色	口縁内外面ヨコナデ
88・6 土器群13	〃	〃 18.3	やや不良／並	濁黄橙色／淡褐色	内外面摩耗、頸部煤状のもの部分的付着
89・3 遺構上面	甕B	〃 14.2	並／やや不良	黄橙色	内外面ヨコナデ、外面黒斑
90・2 土器群 6	甕B 4	〃 26.6	並／並	淡黄橙色	内外面ヨコナデ、胴内ケズリ
91・9 土器群23	甕C 1	口径 17.7 胴径 23.7	やや良／良	にぶい橙色	口縁外面ヨコナデ・煤付着
92・2 土器群 6	甕C 3	口径 16.2	やや不良／並	淡橙褐色／黒褐色	
93・8 土器群20	〃	〃 15.8	やや良／並	淡黄橙色	
94・9 土器群23	〃	〃 15.2	並／並	淡黄橙色	内外面ヨコナデ
22-95・9 表採	甕C 2	口径 17 胴径 21.8	やや不良／並	濁橙色／濁黄橙色	内面摩耗、外面薄く煤状のもの付着
96・9 土器群23	甕D 1	口径 12.6	やや不良／並	淡黄橙色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
97・9 土器群24	甕C 2	口径 16.2 胴径 19.8	やや不良／並	淡黄橙〜濁黄橙色／黒褐色	口縁ヨコナデ、胴外面摩耗、外面煤付着

3

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
98・5 たちわり	甕Ｃ４	口径 11.5	並／並	淡黄橙色	内外面摩耗
99・5 たちわり	〃	〃 16.5	並／並	淡褐色	
100・9 土器群22	〃	〃 18.0	並／良	灰褐色	内面摩耗、外面ヨコナデ
101・7 土器群18	甕Ｄ２	〃 14.7	並／並	淡灰褐色	内外面摩耗、胴内ケズリ
102・11 土器群28	〃	〃 13.4	やや良／やや不良	にぶい褐色	口縁外面ヨコナデ
103・6 土器群15	甕Ｄ３	〃 15.8	並／並	淡黄橙色／明橙黄色	内外ヨコナデ・化粧土（摩耗の為不明瞭）
23-104・7 土器群14	甕Ｅ	〃 15.7	やや良／並	濁黄橙色	口縁ヨコナデ、外頸部煤付着
105・2 土器群６	甕Ｆ	〃 19.9	やや不良／並	にぶい黄橙色	外面煤付着
106・10 土器群25	〃	〃 29	並／並	暗橙色／橙色	外面胴部のごく一部に煤付着
107・8 土器群20	甕Ｇ	〃 15	やや良／不良	淡茶褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
108・9 土器群24	〃	〃 15.3	並／並	にぶい橙色	内外面摩耗
109・8 表採	〃	〃 15.8	やや良／やや不良	濁黄橙色／淡灰褐色	口縁内外面ヨコナデ、外面煤付着
110・8 たちわり	〃	〃 13.8	良／やや不良	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ、外面煤付着
111・8 土器群21	〃	〃 15.6	やや良／並	灰褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
112・8 表採	〃	〃 14.6	良／良	暗黄橙色／濁黄橙色	口縁ヨコナデ、外面薄く煤状のもの付着
113・2 表採	〃	〃 17.4	やや良／並	淡黄橙色	内外面ヨコナデ
24-114・7 土器群18	壺Ｂ	〃 14.7	やや不良	黄橙色	口縁外面ヨコナデ、内面一部黒褐色
115・9 土器群23	〃	〃 15.2	やや不良／良	浅黄橙色	
116.3 遺構上面	〃	口径 13 胴径 19.7 底径 5.4 器高 24.6	やや不良／並	淡黄橙色／暗淡黄橙色	口縁内外面ヨコナデ、胴部外面最大径より下部煤付着
117・8 たちわり	〃	口径 14.6 底径 5.6	やや不良／並	茶褐色	口・頸内外面ヨコナデ、内面一部灰褐色
118・8 溝上面	〃	口径 12.2	並／並	淡灰褐色	口・頸内外面ナデ、赤味化粧土か？
119・2 土器群７	壺	〃 10.5	並／やや不良	にぶい黄橙色	口・頸ヨコナデ、外面煤付着
120・2 遺構上面	〃	口径 8.9 胴径 16.2	並／並	黄橙～橙色／黄橙色	口縁内面ヨコナデ、外面ミガキ
25-121・6 土器群13	壺Ｄ	口径 14	やや不良／並	明淡黄橙色	内外摩耗、外面一部薄く黒斑
122・10 土器群27	〃	〃 15.2	やや良／良	淡黄橙色	口縁内面ヨコナデ
123・8 たちわり	〃	〃 15.2	やや不良／良	暗灰褐色／淡灰褐色	口縁外面ヨコナデ
124・9 表採	壺	〃 16.6	良／並	淡黄橙色	口・頸内外面ヨコナデ
125・2 たちわり	壺Ａ	〃 18.6	やや良／並	茶褐色	擬凹線５、口縁内外ヨコナデ
126・6 遺構上面	壺	口径 14.2 胴径 21.5	やや不良／並	淡黄褐色	内外面ナデ、胴外面下部火を受けた痕アリ
127・2 表採	壺Ａ	口径 18.1	やや良／並	淡茶褐色	口縁ヨコナデ、口頸外面摩耗
128・2 溝上面	〃	〃 15.8	やや不良／並	暗淡黄橙色	口・頸内外面ヨコナデ
26-129・7 表採	壺	〃 19	やや良／やや不良	淡黄橙～濁黄橙色	口縁外ヨコナデ、頸部内ナデ、突帯上に刻み
130・4 土器群８	壺Ａ	〃 12.9	並／並	濁灰褐色／淡灰褐色	擬凹線８、口頸内外面ナデ
131・9 土器群23	〃	〃 15.4	並／やや不良	にぶい黄橙色	擬凹線4～5、口内ヨコナデ、外面山形沈線文
132・7 表採	〃	〃 14.2	並／やや不良	淡黄橙色／淡灰褐色	内外面摩耗
133・6 土器群13	壺Ｄ	〃 14.8	やや不良／やや不良	淡褐色／淡褐～黒灰色	擬凹線11～13、口・頸内外面ナデ、外面摩耗
134・7 土器群 19、22-2	〃	〃 18.3	並／並	淡茶褐色	擬凹線８、逆Ｕ字状浮文、口縁内へラミガキ、口頸外ヨコナデ
135・6 土器群14	壺Ｃ	〃 9.3	並／やや不良	淡褐色	内外摩耗、口縁外面黒斑
136・8 土器群19	〃	〃 8.7	良／やや不良	灰褐色	内外面摩耗、外面一部淡灰褐色
137・11 表採	壺Ｄ	〃 14.2	やや不良／良	淡黄橙色／淡橙色	擬凹線６、口縁内外赤彩
138・9 土器群24	〃	〃 15	やや良／並	にぶい黄橙色	擬凹線５、口縁外面黒斑
139・8 たちわり	〃	〃 15.8	やや不良	にぶい黄橙色	擬凹線14、口・頸ヨコナデ
140・2 土器群６	〃	〃 16.9	並／やや不良	にぶい橙色	擬凹線18、内外面ヨコナデ
141・5 土器群12	〃	〃 20.4	やや不良	淡黄橙色	擬凹線３以上、内外面ヨコナデ
27-142・ 2・3、 遺構上面	壺	口径 11.7 胴径 20.4	やや不良	浅黄橙色	口縁ヨコナデ、胴外面中央部黒斑
143・6 土器群13	壺Ｆ	口径 16.2	やや不良／並	灰褐色	擬凹線９以上、全体的に摩耗
144・7 土器群18	壺Ｄ	〃 18.3	やや不良	濁灰褐色	凹線２、口・頸部ヨコナデ
145・9 土器群23	壺	〃 17.4	並／並	茶褐色	口縁ナデ、内面一部暗灰褐色
146・1 土器群１	壺Ｅ	口径 18.4 底径 1.8	やや不良／良	淡黄橙色	口縁内面赤彩、外面赤彩

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
147・3 遺構上面	〃	口径 10.5	並／やや不良	浅黄橙色	内外面ヘラミガキ
148・3、4 溝上面	〃	〃 13	並／並	淡黄橙色	内外面ヘラミガキ、赤彩痕アリ
149.2 土器群6	〃	〃 15	やや不良／良	にぶい黄橙色	内外ヨコナデ、口縁外煤付着
150・8 たちわり	〃	〃 15.4	並／やや不良	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ
151・8 表採	〃	〃 16.4	並／良	暗灰褐色	内外面ヨコナデ
152・ 土器群27	壺J	〃 13.6	並／並	淡黄橙色	擬凹線6、内外面ヨコナデ
28-153・9 土器群 22-2	〃	口径 17.7 胴径 28	並／並	暗灰褐色	擬凹線2、口縁外面ヨコナデ、外面一部茶褐色
154・9 土器群 23-3	壺		並／やや不良	にぶい黄橙色	竹管文、綾杉文、突帯上に刻み、内外面ヨコナデ
155・7 土器群18	〃		やや不良／良	淡黄橙色	八ノ字形刺突文
156・9 表採	〃		並／並	淡黄橙色／淡黄橙～灰褐色	平行沈線11、山形沈線、突帯上に凹線2、頸部内面・外面一部赤彩
157・ 土器群 23-4	壺E	口径 17	やや良／良	淡橙色	口縁内外面ヨコナデ
158・9 土器群 23-2	壺	胴径 13.9 底径 1.8	やや良／良	にぶい黄橙色	内外摩耗、外面赤彩痕、内面一部褐色
159・10 表採	〃	胴径 13 底径 2.7	並／並	淡黄橙色	内面ナデ、外面摩耗
160・2 土器群6	〃	胴径 12.6	やや良／良	黄橙色	胴外面下位黒斑、外面赤彩
161・2 土器群4	壺I	口径 17.6	やや良／並	淡黄橙色／淡橙色	擬凹線3・2、棒状浮文（組数不明）、内面ヨコナデ
162・9 土器群24	〃	〃 23.4	やや良／やや不良	にぶい黄橙色	棒状浮文の中に刻み（組数不明）
163・10 土器群27	壺		やや不良／良	にぶい黄橙色	平行沈線7、突帯上に刻み、刺突文、内面一部浅黄橙色
29-164・9 表採	壺H	口径 12.6 胴径 21 底径 5.3 器高 23.5	並／やや不良	淡橙褐色／淡橙褐～黒褐色	口縁ナデ、胴外面中央部より下位煤付着
165・6 土器群13	〃	口径 13.6	やや不良	にぶい黄橙色	内外面摩耗
166・10 土器群25	壺	胴径 26 底径 6	並／並	黄灰色／暗灰色	胴外面中央部より下位黒斑
167・6 土器群13	蓋E	鈕部径2.2	並／並	淡黄橙色	内外面摩耗
168・ 土器群27	蓋A	〃 4.7	やや良／並	淡黄橙褐色	鈕上・内面ナデ、外面ミガキ
169・9 表採	〃	〃 3.7	やや良／並	淡橙色	鈕端部ナデ、外面ミガキ
170・9 表採	〃	〃 3.2	良／良	淡黄橙色	鈕部上面ナデ、内外面ミガキ
171・2 土器群6	〃	鈕部径2.5 口径 7.8 器高 4.2	やや良／良	黒～淡黄橙色	鈕部黒斑、外面ヨコナデ・ミガキ、内面赤彩（外面摩耗不明）
172・ 土器群24	〃	鈕部径3.6	やや良／並	淡黒褐色	体部内面ナデ
173・2 土器群4	蓋B	〃 2.8	やや良／良	淡黄橙色	鈕部上・内面ナデ、外面ミガキ
174・ 表採	〃	〃 2.3	やや不良	淡褐色	内外面摩耗、一部黒斑
175・2 土器群3	〃	〃 3.7	良／並	淡橙色	鈕部上面・内面ナデ
176・ 表採	〃	〃 3	やや良／並	淡黄橙色	内外面摩耗
177・8 表採	〃	鈕部径3.5 口径 11.4 器高 4.6	良／やや不良	暗灰褐色	内外面ヘラミガキ
178・6 土器群14	〃	鈕部径2.8 口径 9.8 器高 3.9	良／並	淡褐色	内外面摩耗
179・1、2 表採	蓋C	鈕部径3	良／良	淡黄橙色	内外面摩耗
180・7 土器群14	〃	〃 4	やや不良／並	淡灰褐色	鈕部上面・内面ナデ
181・8 土器群21	〃	鈕部径2.8 口径 10.7 器高 3.9	やや不良／並	淡灰褐～暗灰褐色	内外面ナデ
182・7 土器群18	蓋D	鈕部径3.8 口径 8.7 器高 4.5	やや不良／並	淡灰褐色	内外面摩耗
183・7 表採	蓋C	鈕部径2.9	やや不良	淡灰褐色／濁黄橙色	内外面摩耗
184・4 遺構上面		鈕部径3.6 口径 10.3 器高 7.5	良／やや不良	灰白～黒色／灰白色	内面ナデ、外面ヘラミガキ、黒斑
30-185・10 土器群27	（底部）	底径 1.6	やや不良／並	暗黄橙色	内面ケズリ、外面ハケナデ
186・9 土器群 23-2-1	〃	〃 2.7	やや不良／良	暗黄橙色／灰褐色	内外面一部ナデ
187・1 土器群1	〃	〃 2.5	やや良／並	淡灰褐色	外面煤付着、外面橙～黒褐色
188・11 土器群28	〃	〃 3.2	やや不良／並	黒褐色	外面ハケ・一部煤付着
189・7 土器群18	〃	〃 3.2	やや良／良	淡黄橙色	甕A№21と同一個体
190・2 たちわり	〃	〃 3.7	やや不良／並	濁淡黄橙色	内面ケズリ・ナデ
191・2 土器群6	〃	〃 3	並／並	にぶい黄橙色	外面下端部黒斑
192・9 土器群 23-4-1	〃	〃 3.8	並／並	灰褐色／暗茶褐色	内面一部ナデ、外面ハケ
193・9 土器群 22-2	〃	〃 2.5	やや不良／やや不良	にぶい黄橙色	外面黒斑
194・7 土器群14	〃	〃 2.2	やや不良／並	淡黄橙色	外面一部煤付着

5

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
195・4 土器群８	〃	胴径 12 底径 2.6	やや不良	暗茶褐色／淡茶褐色	内面摩耗、外面一部煤付着
196・2 たちわり	〃	底径 2	並／並	淡黄橙色	内面炭化物付着、外面煤付着
197・11 土器群28	〃	〃 1.8	やや不良／並	暗淡褐色	外面一部黒斑
198・10 土器群27	〃	〃 2.9	やや不良／並	淡橙色	
199・6 土器群14	〃	〃 2.8	やや不良	暗褐～黒褐色	内外面一部黒斑
200・2 たちわり	〃	〃 2.8	並／並	淡黄橙色／黒褐色	内面ケズリ、外面煤付着
201・3 遺構上面	〃	〃 7.4	良／並	淡茶褐色	内面ナデ、外面ハケ、外面一部黒褐色
202・ 表採	〃	〃 5.2	やや良／並	淡黄橙色	外面上部黒斑
203・2 たちわり	〃	〃 6	やや良／並	淡黄橙色	内面ナデ
204・3 遺構上面	〃	〃 4.6	やや不良	淡茶褐色	内面ナデ、外面ハケ
205・2 たちわり	〃	〃 5.6	並／やや不良	淡灰褐色	外面黒斑
206・11 土器群28	〃	〃 3.9	やや不良／並	淡黄橙色	外面中央より下位黒斑
207・7 土器群17	〃	〃 3.7	やや良／並	濁灰褐色	
208・9 土器群 23-3-1	〃	〃 3.8	やや良／並	淡黄橙色	外面ナデ
209・9 土器群 22-2-1	〃	〃 4.7	並／やや不良	にぶい黄橙色	外面黒斑
31-210・7 土器群14	底部穿孔土器	底径 5.1 孔径 0.7	やや不良／並	淡黄橙色	外面一部黒斑
211・2 表採	〃	底径 3.8 孔径 0.8	やや不良／並	淡黄橙色	
212・6 土器群14	〃	底径 3.8 孔径 0.9	やや不良／並	淡黄橙色	内外面摩耗
213・2 たちわり	〃	底径 4.5 孔径 0.7	やや不良／良	淡黄橙色	
214・8 溝上面	〃	底径 3.2 孔径 0.9	やや不良／並	淡橙色	内面ナデ
215・9 土器群24	〃	底径 3.2 孔径 1.1	やや不良／並	淡黄橙色	外面ミガキ・化粧土
216・8 土器群20	〃	底径 3.2 孔径 1.9	やや不良	淡橙色	外面摩耗
217・3 遺構上面	(底部)	底径 2.4	並／並	淡茶褐色／淡灰褐色	内面ケズリ、外面ヘラミガキ
218・6 土器群15	〃	〃 6	やや不良／並	黒褐色／淡褐色	内外面ナデ、外面煤付着
219・4 土器群８	〃	〃 1.9	並／並	淡橙色	内面ナデ、外面ヘラミガキ
220・1 土器群１	〃	〃 2.8	並／並	淡橙色／淡灰褐色	内面ナデ、外面ミガキ
221・4 土器群８	〃	〃 3.8	やや不良／並	暗灰褐色	内面ナデ、外面ハケ
222・8 表採	〃	〃 5	やや不良／やや不良	濁黄橙色／灰褐～黒褐色	外面ナデ
223・4 遺構上面	〃	〃 4.6	やや不良／やや不良	暗茶褐色／茶褐色	内面摩耗、外面ナデ
224・9 土器群 22-2	〃	〃 4.8	やや不良／良	灰褐～黒褐色／灰褐色	内面ナデ、外面ヘラミガキ
225・9 表採	〃	〃 4.1	やや不良	明淡黄橙色	外面化粧土が施されている
226・2 たちわり	〃	〃 5.4	並／やや不良	淡黄橙色	内外面ナデ
227・3 表採	〃	〃 5	やや不良	淡黄橙色	内外面摩耗
228・9 土器群 23-3	〃	〃 5.8	やや不良	淡褐色／黒褐色	外面黒斑
229・7 表採	〃	〃 5.5	良／やや不良	濁灰褐色	外面黒斑
230・10 土器群25	〃	〃 5.9	やや不良／並	濁暗褐色	内面ナデ、外面煤付着
231・6 土器群13	〃	〃 6.8	並／並	にぶい黄橙色	内外面ナデ、外面黒斑
232・7 土器群14	〃	〃 8.3	やや不良／並	淡黄橙色	内面摩耗、外面ナデ・黒斑
32-233・6 土器群15	高杯Ａ	口径 28.6	やや不良／並	淡黄褐色	内外面ミガキ・摩耗
234・9 土器群24	〃	〃 22	良／良	黄橙色	外面黒斑、暗文風ヘラミガキ
235・1 遺構上面	高杯 Ｂ１	口径 28.4 脚部径 14.7 器高 21.6	良／並	淡黄橙色	外面摩耗、脚孔３
236・3 遺構上面	高杯 Ｂ２	口径 26.2 脚部径 14 器高 16.9	良／並	淡橙～淡黄橙色	内外面摩耗
237・7 表採 土器群16	高杯 (脚)	脚部径 12.9	やや不良／並	暗黄橙色	脚孔４
238・6 土器群14	〃		やや不良／並	黄褐色	外面赤彩、脚孔の数不明
239・4 遺構上面	〃	脚部径 15.7	やや良／並	淡黄橙色	内面ナデ、外面脚端部ナデ
240・2 土器群６	〃	〃 15.6	良／並	淡黄橙色	内外面摩耗
241・2 土器群６	〃		良／良	淡黄橙色	内面上位ナデ、脚孔４
33-242・7 土器群18	高杯Ｂ	口径 24.5	良／やや良	淡黄橙色	内外面摩耗
243・2 土器群６	〃	〃 18.4	並／並	淡橙褐色	内外面摩耗
244・8 たちわり	高杯Ｃ	〃 16.1	良／やや不良	淡橙色	内外面摩耗
245・9 表採	高杯 (脚)	脚部径7.2	やや不良／並	淡黄橙色	内外面摩耗

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／ 焼　成	色調 外 内	備　考
246・6 土器群13	〃	〃 11.4	やや不良／やや良	淡褐色	内面ナデ・下端黒斑、外面上部から¾黒斑
247・7 土器群14	〃	〃 13	良／良	にぶい黄橙色	内面ナデ、外面摩耗
248・1 表採	〃	〃 16	やや良／並	乳白色	内外面ヘラミガキ
249・6 土器群14	〃	〃 17.6	良／並	淡茶色	内外面赤彩、内面ナデ、外面裾部沈線7・端部沈線1
250・1 土器群1	〃	〃 14.8	良／並	淡黄橙色	外面脚部化粧土脚孔3
251・2 たちわり	〃	〃 12.6	やや不良	にぶい黄橙色	外面・杯部内面赤彩、脚に未貫通穴4
252・6 土器群14	〃	〃 11.3	やや不良	黄橙色	内面ヨコナデ、外面摩耗
253・ 表採	〃	〃 14	良／良	淡橙～淡黄橙色	内面ヨコナデ、外面摩耗、脚端部煤付着
254・6 土器群14	〃	〃 12.7	やや不良／並	淡褐色	内外面摩耗、受部底面刻目
255・9 土器群24	〃	〃 13.4	良／良	淡黄橙色	内面ナデ、外面黒斑
34-256・2 土器群6	器台	受部径 19.6	並／やや不良	淡橙色	擬凹線6、内面ミガキ
257・2 土器群7	器台 (脚)		良／やや不良	にぶい黄橙色	平行沈線4、内面ナデ、脚孔4
258・6 表採	器台B	受部径 29.6	良／並	淡黄橙色	脚孔3
259・9 表採	器台 (脚)		良／やや不良	淡黄橙色	平行沈線5、竹管文
260・9 土器群24	器台B	受部径 27.9 脚部径 14.4 器高 17.1	良／良	淡灰褐色	脚部外面摩耗、脚孔二孔一対4(孔径0.8cm)
261・8 土器群19	器台 (脚)	脚部径 12.4	やや良／並	淡灰褐色	外面摩耗、脚孔4
262・11 表採	器台B	受部径 27.5	並／やや不良	乳白色	内外面摩耗、脚孔4
263・7 土器群18	器台A	脚部径 15.8	やや不良／良	にぶい黄橙色	内面ケズリ、外面摩耗
264・8 たちわり	器台13		良／並	淡茶褐色	内外面ヘラミガキ、上位より平行沈線2、S字状渦文スタンプ平行沈線3
265・3 遺構上面	〃	脚部径 15.2	並／並	淡橙色	脚端部沈線1
266・4 土器群9-2	〃	受部径 21.5	やや不良／やや不良	黄橙色	内外面摩耗、全体に化粧土が施されている
267・7 表採	器台 (脚)		良／並	淡黄橙色	上位より平行沈線3、山形文、平行沈線2、脚孔4
35-268・7 土器群16	器台C	受部径 20.2	並／良	淡黄橙色	内外面摩耗、外面口縁部黒斑、内外面赤彩
269・2 土器群17	〃	脚部径 12.2	並／良	淡黄橙色	脚内面下位ヨコナデ、外面黒斑
270・2 たちわり	器台		良／並	淡黄橙色	内外面ミガキ
271・6 土器群14	〃	脚部径 12.1	やや不良／良	淡褐～暗褐色	内面一部ナデ、外面煤状の物付着、脚孔4
272・9、10 土器群25	〃	〃 10.2	良／並	淡橙色	内外面一部ナデ
273・9 土器群24	器台F	受部径8.5	並／良	淡橙色	内外面摩耗、脚孔4
274・9 土器群 22-2	〃	受部径 10.3 脚部径 11 器高 8.7	良／良	赤褐色	脚内面上位ケズリ、下位ナデ、脚孔3
275・3 遺構上面	器台E	受部径 14.2	並／並	淡黄橙色	内外面ヘラミガキ
276・9 土器群23	〃	〃 12.5	やや良／並	にぶい橙色	脚孔3
277・2 土器群5	〃	〃 12.2	やや不良／良	淡橙褐色	内外面摩耗
278・2 たちわり	器台D		並／並	淡橙色	内外面摩耗
279・2 土器群3	器台	脚部径 11	やや不良／並	淡黄橙色	内外面摩耗、脚孔4
280・6 土器群13	結合器台A	受部径 22.8	やや不良／やや不良	淡黄橙色	内外面摩耗、円形浮文上に竹管文個数不明
281・9 表採	結合器台B		良／並	淡茶褐色	体部透穴20(?)、受部透穴4～6
282・ 表採	〃		やや不良／並	淡黄橙色	内外面摩耗、体部透穴数不明
283・2 土器群6	結合器台C	受部径 16.9	やや不良／やや不良	にぶい黄橙色	垂下帯外面黒斑・下端に刻みアリ、体部透穴16(?)
284・9 土器群24	〃	〃 16.3	やや良／並	赤橙色／淡黄橙色	内外面ミガキ、内外面赤彩、体部透穴10
36-285・8 土器群21	鉢A	口径 17.6	やや不良／やや不良	淡灰褐色	内面摩耗、外面口縁ナデ・体部ハケ・煤付着
286・2 土器群6	〃	〃 16.1	やや不良	淡橙褐色	内外摩耗、外煤付着・底部黒斑
287・7 土器群17	〃	〃 17.7	やや不良／並	淡黄橙色	内外面摩耗
288・10、11 土器群 27・28	鉢B	〃 11.8	やや良／並	にぶい褐色	内外面摩耗
289・7 土器群16	〃	口径 18.1 底径 15.5 器高 3.3	やや良／やや不良	暗橙色	内外面摩耗
290・6 土器群14	〃	口径 19.7	やや良／やや不良	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ、外面全体煤付着
291・2 土器群6	〃	〃 19.4	やや不良／良	黄橙色	内外面摩耗、外面底部煤状のもの付着
292・ 表採	鉢	底径 11.2	やや不良	淡明黄橙色	内面ナデ、外面摩耗
293・6 土器群14	〃	脚台径5.8	やや不良／並	淡黄橙色	全体に摩耗

7

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
294・8 表採	〃	〃 7.8	並／やや不良	灰白色／灰褐色	内外面摩耗、脚台部内面ナデ
295・1 遺構上面	〃	〃 5.1	やや良／並	淡赤橙色	内外面ナデ、外面上端煤付着
296・3 遺構上面	鉢E	口径 7.3 胴径 10 脚台径5 器高 10.9	やや不良／良	灰褐色／暗灰褐色	口縁内外面・脚台部内面ナデ、口縁部に二孔一対の孔
297・6 土器群13	鉢	脚台径9	やや不良	淡黄橙色	内面ナデ、外面化粧土
298・3 遺構上面	〃	〃 9.2	やや不良	淡黄橙色	内外面摩耗
299・8 表採	〃		やや不良／並	浅黄橙色	内外面摩耗、脚部外面黒斑
300・2 表採	〃		やや不良／良	にぶい黄橙色	内面ナデ、外面摩耗
301・7 土器群18	鉢C	口径 11 胴径 15.7 底径 4.3 器高 11.3	やや良／並	淡黄橙色	内外面摩耗、化粧土が施されている
302・6 土器群13	〃	口径 7.8 胴径 12 底径 3.1 器高 7.8	並／並	淡黄橙色	内外面ナデ、管状把手1
303・5 たちわり	〃	口径 7.4 胴径 10.1	やや不良／並	濁橙褐色／淡橙褐色	内外面摩耗、管状把手1、全面赤彩
304・10 土器群27	鉢D	口径 6.7	やや不良	淡黄橙色	内外面摩耗
305・3 遺構上面	鉢	脚台径8.7	良／やや不良	淡灰褐色	内外面一部ナデ
37-306・8 たちわり	鉢F	口径 11.7	良／並	灰褐色	脚孔3
307・2 土器群6	〃	口径 13.2 脚台径8.2 器高 7.9	やや不良／やや不良	灰白色	内外面ミガキ、脚内面ナデ、杯部黒斑
308・6 土器群14	鉢		やや不良／並	淡褐色	内外面摩耗
309・3 遺構上面	鉢F	脚台径8	並／やや不良	淡橙色	脚内面ナデ、外面ヘラミガキ
310・1 遺構上面	〃	口径 13.4	やや不良	淡黄橙色／灰褐色	内外面ナデ
311・9 土器群24	〃	〃 13.9	やや不良／良	にぶい褐色	内外面摩耗
312・2 土器群6	鉢G	〃 16.8	やや不良	灰白色	内面ナデ、外面摩耗
313・2 表採			良／やや不良	浅黄橙色	平行沈線2、貝殻復縁圧痕文、全面赤彩
314・2 土器群6	鉢H	口径 27.2	やや良／並	黄橙色	擬凹線6、内外面ミガキ・赤彩
315・8 土器群21	〃	〃 32.4	やや良／良	にぶい橙色	擬凹線4、内外面ミガキ
316・1 土器群2	〃	〃 30.8	やや良／やや不良	淡灰褐色／暗褐色	口縁内面ナデ、肩部に把手(一対)
38-317・8 表採	小型土器A	〃 14.5	やや良／並	淡黒褐色／濁黄橙色	口縁内面ヨコナデ、外面摩耗
318・10 土器群27	〃	〃 12	やや良／並	明灰褐色	擬凹線3、口縁内面摩耗、外面頸部ヨコナデ
319・4 遺構上面	〃	口径 11.2 胴径 8.7	やや良／やや不良	淡黄橙色	内面ナデ、外面口頸部ヨコナデ
320・2 表採	小型土器B	口径 11.6 胴径 11.6	やや良／並	淡黄橙～橙色／淡黄橙～淡灰褐色	口縁内外摩耗、胴部内面ナデ、外面煤状のもの付着、外面黒斑
321・6 土器群13	〃	口径 9.8 胴径 11	並／やや不良	淡黄橙色	内外面ナデ
322・5 土器群11	小型土器C	口径 11 胴径 11.1 底径 1.5 器高 10.1	やや不良／並	黄橙～暗黄橙色／黄橙色	内外面ナデ、胴部外面ハケ
323・8 土器群20	〃	口径 9.9 胴径 12.1 底径 6.2	良／並	黄橙色／黄橙～灰褐色	内外面ナデ、口縁外面黒斑、外面煤付着
324・9 土器群23	小型土器	胴径 10.6 底径 3.2	やや良／並	濁黄橙色／淡黄橙色	内外面ハケ
325・7 土器群16	〃	胴径 9.5	やや不良／やや不良	淡灰橙色／暗灰橙色	内外面ナデ、外面肩部に長楕円形のヘラ描文・列点文、体部にヘラ描文、外黒斑
326・9 表採	小型土器G	口径 6 器高 3.6	やや良／良	淡黄橙色	内外面強いナデ、外面底部黒斑
327・ 表採	小型土器F		やや良／並	淡黄橙色	
328・9 土器群24	小型土器E	口径 9.5 底径 4.8 器高 4.5	やや良／並	にぶい黄橙色	
329・6 土器群13	〃	口径 9.3 底径 3 器高 4.7	やや不良／やや不良	淡褐色	外面ナデ
330・2 たちわり	小型土器	胴径 10 底径 4.4	良／並	淡黄橙色／淡灰褐色	内面ナデ、外面底部ナデ
331・6 表採	小型土器G	口径 6 底径 3 器高 3.7	並／並	淡褐色／暗褐色	外面ナデ・破線内黒斑
332・9 溝上面	小型土器F	口径 5.6 器高 5.5	やや不良	淡黄橙色	内外面強いナデ
333・7 表採		口径 6.9	やや良／やや不良	淡灰褐色	
334・9 土器群23	小型土器G	口径 3 胴径 4.6 底径 3.6 器高 5.1	良／並	淡灰褐色／暗灰褐色	内外面ナデ
335・8 たちわり 表採	小型土器	胴径 7.4 底径 2・3	良／並	淡灰褐色／淡灰褐色	外面頸部ヨコナデ、体部内外面ナデ
336・2 表採	〃	口径 5 胴径 7.6 器高 8	やや良／並	淡黄橙色／黒褐色	外面肩部に沈線
337・7 土器群18	土錘	長さ 2.9 幅 3.5 孔径 0.9 重さ (29.3g)	良／良	灰褐色	

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
338・9 表採		底径 10.8	やや不良／並	淡黄橙色	
39-1・5 たちわり 最下層	縄文土器		不良／不良	淡茶褐色／明茶褐色	風化著しい
2・1 遺構上面	弥生土器		やや不良／並	淡黄橙色／黒色	平行線文、内面ナデ
3・4 表採	須恵器壺	口径 16	並／並	暗灰色	内外面ヨコナデ、外面頸部カキ目・一部自然釉
4・5 表採	〃	〃 13.3	やや良／良	暗灰色	沈線1、波状文、内外面ヨコナデ
5・ 表採	〃	〃 10	良／並	黒灰色／灰色	外面自然釉
6・7 表採	須恵器甕	〃 21.4	並／良	青灰色	内外面ヨコナデ
7・5 表採	須恵器長頸壺		やや良／良	暗灰褐色／灰～灰褐	沈線1、内面ヨコナデ、外面自然釉
8・8 たちわり	須恵器甕	口径 35.8	並／良	暗赤灰色／赤灰色	突帯2、波状文、内外面ヨコナデ、外面自然釉
9・8 たちわり	〃	〃 23.2	並／良	暗灰色／灰色	突帯1、波状文、内外面ヨコナデ、外面自然釉
10・3 遺構上面	〃	〃 25.8	良／やや不良	灰色	突帯1、内外面ヨコナデ
11・5 遺構上面	須恵器杯蓋	〃 11.9	やや良／良	暗灰色／灰褐色	内外面ヨコナデ、頂部ケズリ
12・8 たちわり	〃	〃 13.2	やや良／並	暗青灰色	内外面ヨコナデ
13・11 表採	須恵器杯身	〃 12.8	やや良／良	灰色	内外面ヨコナデ
14・1 遺構上面	〃	〃 12.7	並／並	暗灰色	内外面ヨコナデ

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
39-15・10	須恵器杯蓋	〃 13.8	良／良	暗青灰色／青灰色	内外面ヨコナデ、頂部ケズリ
16・10	〃	〃 14.6	良／不良	暗灰色／橙灰色	内外面ヨコナデ
17・5 トレンチ	須恵器杯身	〃 11.5	並／並	淡灰色	内外面ヨコナデ
18・5 トレンチ	〃	〃 11.2	やや良／やや不良	淡灰色	内外面ヨコナデ
19・9 表採	須恵器高杯	脚部径9.2	良／良	青灰色	杯底面ナデ、脚ヨコナデ、カキ目、脚裾部降灰釉付着、透穴3
20・10 表採	〃	〃 9.8	良／良	暗青灰色	内外面ヨコナデ、透穴3または4
21・2 たちわり	須恵器高杯	〃 9.6	並／良	淡灰色	内外面ヨコナデ、透穴4
22・8 表採	〃	〃 11.5	やや良／良	暗青灰色	内外面ヨコナデ、外面降灰釉付着、透穴3
23・2 表採	土師器底部	底径 4.8	並／不良	淡黄橙色	回転糸切り
24・5 土器群11	〃	〃 5.2	やや良／並	淡黄橙色／黒色	内面黒色、外面摩耗
25・3	瀬戸焼皿	口径 10.6	やや不良／良	淡緑灰～乳白色／淡緑灰色	瀬戸の灰釉皿
26・10 表採	越前焼擂鉢	底径 10.5	並／良	淡灰色	内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ
27・2 表採	宋銭	径 2.3 孔径 6.5 重さ (1.8g)			景徳元寶

第5章　考　　察

第1節　はじめに

本調査で出土した遺物の大半を占めるものは、第2次調査出土弥生土器・土師器である。第4章で触れたとおり、それらは概略弥生時代後期から古墳時代前期に至る時期幅をもち、一括性の弱いものである。本章では当初、諸先学の研究成果によりつつ、第4章で分類した諸形式および個別土器の編年的な位置づけをおこなうつもりであったが、結果的には全く断念せざるを得なくなった。第一に、吉竹遺跡が所在する南加賀における該期の資料が著しく乏しいこと、第二に、最近あいついで新たな弥生土器・土師器編年が公表され、県内に定着していた該期の編年の枠組みそのものに変更をせまる大きな問題提起がなされたこと、が私の力量不足以外に強いてあげられるその理由である。

特に後者の問題は、昨年催された「月影式」土器についてのシンポジウム(1)前後から県内外の研究者によって検討されてきており、個別遺跡の報告にあたっても、報告者の見解を明示することなくしては、報告内容の理解が難しい状況にある。本章では、第2節と第3節において、それら弥生土器・土師器の編年をめぐる問題と、そこから派生する若干の問題を検討したが、冒頭にも述べたように、本書で報告した弥生土器・土師器の個別的な検討はできていない。その点については、南加賀の該期の資料の増加を待って、別の機会に検討したいと考えている。

第2節　「月影式」土器をめぐる編年的な問題について

1　問題の所在

周知のように、昨年、田嶋明人氏と出越茂和氏があいついで弥生土器・土師器編年案を発表した(2)。両案は、対象とする時期幅が異なるため簡単な比較はできないが、「月影式」土器をめぐる評価はほぼ一致しており、近年、弥生土器・土師器編年として県内外に定着している谷内尾晋司氏の編年案(3)とは、多くの点で大きなくい違いをみせている。本節ではそうした問題のすべてを検討することはもちろんできないが、「月影式」土器の下限をめぐる問題を中心に整理検討し、若干の私見をのべたい。

また、昨年の「月影式」土器をめぐるシンポジウムの際、若干の問題提起がなされた「月影式」土器の前段階をめぐる問題についても検討を加える。それらは、「月影式」土器の組成とその前段階のそれとの相違と類似性を中心としたものであり、第V様式期前半の良好な資料が不十分な現状では、上述の「月影式」土器の下限をめぐる問題とは質の異なる点もある。しかしながら、本質的な問題は共通すると考えており、「月影式」土器の総体的な理解のためにも、あわせて検討することとする。

なお、「月影式」の土器圏については、原則として北陸東部(能登・越中・越後)は含まないものとする。越前は当然含まれるものと考えるが、若狭とともに状況が不明瞭であるため、今回は加賀を対象とする。(使用した資料は北加賀のものが多い。)

2　「月影式」土器の下限をめぐる問題(第5表)

第5表は、谷内尾編年[4]と田嶋氏の漆町編年[5]および出越編年[6]の比較対照表である。両者の相違は、何をもって「月影式」とするのか、どこまでを「月影式」とするのか、という問題にたいする見解の違いとしてあらわれている。(「古府クルビ式」・「高畠式」についても同様。)このうち、本項での課題に直接関係する「月影II式」と「古府クルビ式」にたいする谷内尾氏の理解[7]は、次のようにまとめることができる。

(1)　「月影II式」

①　北陸内部の地域差が、地域集団の再編成過程のなかでさらに明確化される。

②　土器組成・個別形式が定型化し、「月影式」土器が完成する。

③　有段口縁擬凹線文甕(本書甕A)および有透装飾器台(本書結合器台)・小型台付装飾壺などの「在地祭式土器」が盛行する。

④　外来系土器[8]の流入・在地土器の小地域間移動が活発化する。

⑤　外来系土器を多出する遺跡と、それらをほとんど含まない遺跡が存在する。

⑥　外来系土器の流入が顕現化する「月影II式」新相では、一部の器種に組成上の変容が認められるが、なお在地の土器組成が主体的である。

(2)　「古府クルビ式」

①　土器の在地色が急速に失われる。有透装飾器台・小型台付装飾壺などの「在地祭式土器」が前段階でほぼ消失し、在地の土器組成は主体性を失う。

②　「古府クルビ式」古相では、在地系土器の残存度が比較的高く、外来系土器も布留系・山陰系・庄内系・近江系・東海系土器が存在するが、新相では、在地系土器の残存度が低く、外来系土器もほぼ布留系・山陰系土器に限定される。

第5表　弥生土器・土師器編年案比較対照表　　(註(1)〜(3)文献より)

漆町編年(1986)(南加賀)					出越編年(1986)(北加賀)	谷内尾編年(1983)(北加賀)
段階		型式	群			
1		I　I_1	3	月影I式	月影I式	月影I式
		I　I_2	4	月影II式	月影II式	月影II式
2	2a	II　II古	5	白江式	「近岡ナカシマ遺跡(2号溝)上層」	月影II式
		II　II新	6		(+)	古府クルビ式
	2b	III	7	古府クルビ式	古府クルビ式	
		IV	8	(+)		高畠式
3		V	9	高畠式		

③　庄内系・近江系・東海系土器は流入という形をとるが、布留系・山陰系土器は在地土器相を根底から変節させ、在地土器と取りかわる。

④　過渡的な段階として、土器相は遺跡・遺構単位で様相差が大きい。

谷内尾氏のこうした理解をさらに要約すれば、「月影式」とは、汎北陸的とでもいうべき性格をもっていた前段階(谷内尾氏のいう「法仏式」、次項参照。)とは対照的に、独自の在地色の強固な土器群を成立・完成させる段階であり、「月影II式」に開始される遺跡やその新相段階では、外来系土器の流入がみられるが、それらは在地性をほとんど変質させていないというものである。また、「古府クルビ式」とは、在地系土器が急速に変質・解体・消滅していく一方で、各地域の外来系土器が出現し、両者が渾然一体となり、最終的には布留系・山陰系土器に斉一化されていく過渡的な段階とされる。

これにたいして、漆町編年と出越編年は、「月影式」土器の主要概念を「強固な在地性」という点におき、谷内尾氏のいう「月影II式」を外来系土器を含まないものと含むものとに時期的に二分し、「月影II式」を前者に限定したうえで、後者を「月影式」から分離した。さらに、谷内尾氏のいう「古府クルビ式」古相には布留系甕の確実な共伴例がないことから、「古府クルビ式」を新相に限定したうえで、古相を「古府クルビ式」から切り離した。そして、両者をあわせて、布留系甕を基本的には含まない外来系土器によって、在地の土器組成が変質・解体・消滅する段階とし、同一土器様式に包括した。漆町編年では、それらを「白江式」(漆・5・6群土器)と仮称し、出越編年ではその古相段階を「近岡ナカシマ遺跡(2号溝)上層」と仮称した。

まず、外来系土器の出現のしかたが遺跡の性格によって異なるという考え方は、将来的にはともかく、現段階ではここで対象としているような問題の前提とはしがたい。遺跡の開始・廃絶時期を限定することは、若干の例外を別とすれば困難であり、仮に限定できたとしても、たとえば、谷内尾氏のいう「月影II式」に開始される遺跡である野々市町御経塚ツカダ遺跡は外来系土器(能登系の土器は別として)を含んでいない[9]などの問題がある。小地域や個別遺跡間で、若干のズレがある可能性は認めるとしても、外来系土器の出現は、谷内尾編年にそくして考えても「月影II式」を二分する大きなメルクマールと考える。

「白江式」古相段階で確認できる外来系土器は、庄内系甕[10]、近江系甕[11]、東海系甕[12]、二重口縁装飾壺[13]、東海系パレススタイル壺[14]、東海系(?)高杯[15]、小型高杯[16]、小型器台[17]などである。山陰系甕は現状では新相段階で確認される[18]。在地系土器に与える影響は一律ではなく、器種別では壺・高杯・器台が先行して変質・解体するが、甕・結合器台は根強く残存する。特に、在地系甕は「白江式」新相でも甕の約5割を占める[19]。この間、布留系甕の確実な共伴例は存在しない[20]。一方、布留系甕が確実に出現する最古の段階(「漆・7群土器」=谷内尾編年「古府クルビ式」新相)では、擬凹線文有段口縁系甕はすでに消滅しており[21]、在地系土器は、無文有段口縁系甕(本書甕B)がわずかに残存するのみである[22]。したがって、変質・解体段階にある在地系土器と布留系甕が一定量の比率で共伴する可能性は、「白江式」の最新段階かその直後のわずかな幅のな

かに存在するが、その段階を分離設定できるかどうかは現状では不明である。

外来系土器の出現・定着・盛行と在地系土器の変質・解体・消滅とは、「白江式」のなかで、結合器台を別とすれば、壺・高杯・器台などの祭祀(用)土器に始まり、煮沸形態である甕に収斂するといった方向で、漸次的に進行したものと考える。この間、山陰系甕の出現を留保すれば、新たな器種・形式の出現は確認できず、「在地系土器」対「外来系土器」の量的比率による場合を除けば、「白江式」のなかに大きな画期を求めることはできない。結論としては、「月影式」と「在地性」、「古府クルビ式」と「布留系甕の出現」という名称と概念は、それぞれ分離できないものであるから、両者の間に「白江式」を設定する心要性を認め、漆町編年・出越編年を支持する。その場合、私はすでにそうした考え方はとらないが、擬凹線文有段口縁系甕に象徴される在地系土器の残存を根拠に、「月影Ⅰ式」から「白江式」までをすべて「月影式」土器とする考え方も成立する。もちろんその際、「月影式」に付与される概念は大きく変更されなければならない。

「白江式」についての当面の問題は、南加賀での「月影式」と北加賀での「白江式」新相の良好な資料の欠落であり、その課題は「月影式」から「白江式」にいたる在地系土器の形式組列と型式変化の明確化である。問題点はともかく、課題については早急な検討が要求されている。

3　「月影式」土器の前段階をめぐる問題 (第40図)

昨年の「月影式」土器をめぐるシンポジウムにおいて、私は、「月影式」土器の主たる土器形式がその前段階に組成として出現するとし、若干の問題提起をおこなった[23]。このことについては、現在も修正の必要を感じていないし、本項では、その後確認し得た事柄を含め当時よりは明瞭な検討ができると考えている。また、その段階を「月影式」と呼称すべきか否かという当時は曖昧であった問題についても、本項であわせて検討する。

「月影式」をめぐっては、谷内尾晋司氏が一連の弥生土器・土師器の編年的な作業[24]のなかで、「月影式」の前段階として「法仏式」を設定している。その主要概念は「月影Ⅰ式」を含め、つぎのようにまとめることができる。

(1)　「法仏Ⅰ式」

①　山陰地方の土器と姉妹関係にある土器群。

②　北陸独自の地方色が強まる段階。

(2)　「法仏Ⅱ式」

①　広義の「北陸型土器」の成立。

②　「月影式」土器の祖形をなす土器群。

(3)　「月影Ⅰ式」

①　高地性集落や環濠などの防禦機能を備えた集落がこの期を中心に出現する。

②　北陸内部の個別地域差が最も顕現化する。

③　土器組成の内容や分布圏は流動性に富む。

④　外来系土器をほとんど含まない。

こうした谷内尾氏の「法仏式」にたいする理解の特徴は、スタンプ施文土器・細頸壺などの外来的要素を受容しながらも、基本的にはその推移を、(「猫橋Ⅰ式[25]」→)山陰姉妹型→広義の「北陸型」→「月影式」の祖型と、段階的自律的な発展と捉えるところにある。私は「月影式」の前段階の土器群が、「猫橋式[26]」土器の自律的発展によって成立したとは考えない。むしろ、広義の「北陸型」土器とは、外来系土器[27]の出現に象徴されるような他地域との交流が、個別加賀だけでなく、北陸全体に波及したため、北陸各地に類似器種・形式が認められるという意味において捉えられるべきと考える[28]。

「猫橋式」からの系譜をもつ土器形式の大部分、土器にみる限りでの他地域との交流の消滅等を根拠に、「月影Ⅰ式」[29]以降を「月影式」とするのが妥当だとしても、逆にその前段階を「法仏式」と呼称すべきか否かは、土器形式の認定、その型式変化にたいする理解と評価、および概念的な把握のありかたにかかっているといえる。

「月影式」の前段階の土器組成は、①「猫橋式」からの系譜をもつ形式、②新たに出現する形式、③「猫橋式」からの系譜をもつものから派生し、別個の形式として展開するもの、よりなる。①には「月影式」に継承されるものと継承されないものがあり、②・③は基本的に「月影式」に継承され主体的な形式となる。以下、壺・高杯・器台・鉢を中心に、一部能登の資料も援用[30]しながら、その土器組成について略述する[31]。

壺　台付壺のうち、「猫橋式」に祖型をもとめられる[32]頸部に明瞭なくびれをもたない(かもしくは有段状の稜しかもたない)もの[33]は、「月影式」にも継承される[34]が、それは「月影式」に主体的な台付壺[35]にはつながらない形式であって、むしろその多くは細頸壺[36]からの系譜をもつと考える。細頸壺は「猫橋式」からは生じないものであり、「月影式」の前段階に出現する代表的な形式である。河北郡高松町中沼C遺跡では、細頸壺が後述の大型器台とセットをなす例が複数確認されており[37]、「月影式」にみられる細頸の有段口縁台付壺[38]は、その形骸化したものといえる[39]。「月影式」の台付壺の多様性[40]は、細頸壺自体の多様性に加えて、有段口縁壺からの系譜をもつものがある[41]ためであろう。また、この段階に出現するものとして、頸部に二孔一対の孔をもつ台付の擬凹線文有段口縁壺がある[42]。それはスタンプ文等を施し装飾性に富むもので、類似土器は能登でも確認できる[43]・[44]。

高杯　小型高杯[45]・棒状有段脚高杯[46]が新たに出現し(ともに「月影式」に継承される[47])、口縁部が発達した有段鉢形高杯[48](「月影式」において主体的な形式となる[49])が、口縁部が短いもの[50]から派生する。

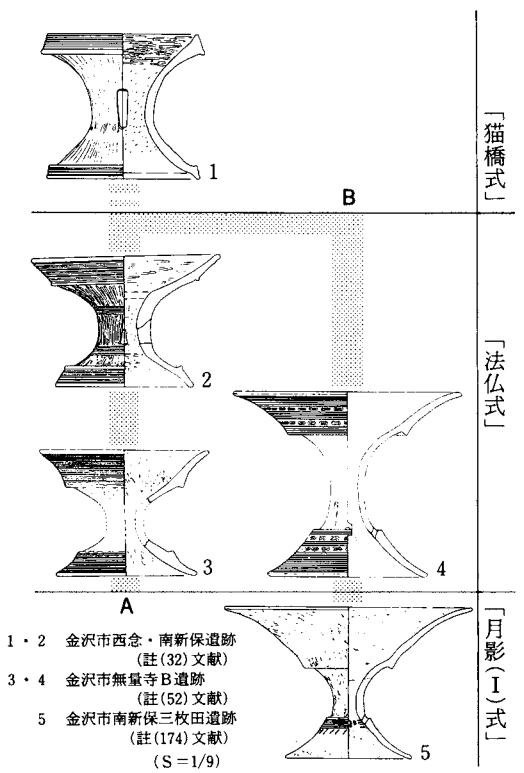
器台　「猫橋式」からの系譜をもつ中型器台[51]から、大型器台[52]が派生する。中沼C遺跡では、細頸壺のほかに鉢(本書鉢C)とセットをなす[53]が、後述の有段口縁鉢との関連も看過できない。「月影式」に継承され主体的な形式となる[54]が、中型器台は「月影式」へは継承されない。大型器台は、北加賀では(擬)凹線文・スタンプ文等で加飾されるもの[55]が多いが、能登では装飾性は弱く、加えて口縁部があまりのびない[56]ようである。

鉢　口縁部の発達した有段口縁鉢[57]が、口縁部ののびないもの[58]から派生する。前者は「月影

式」に継承され[59]主体的な形式となる。ほかに、有孔鉢[60]もこの段階に出現する。

結合器台　大型器台と壺(または鉢)が結合したもので、類似形式として、丹後系装飾器台[61]があげられる。「月影式」の前段階の確実な例はなく(最も祖型に近い形態のものが存在する可能性はあるが)、形式化したもの[62]は「月影式」に出現し定型化する[63]と考えておきたい。

以上、出現・派生形式を中心に「月影式」の前段階の土器組成を概観した。冒頭でも述べたように、谷内尾編年では、これら「月影式」に継承される形式群は、細頸壺・棒状有段脚高杯などの出現形式を別とすれば、ほとんどすべてが「法仏II式」の概念で包括され、同期に位置づけられている[64]。というよりむしろ、概念上谷内尾氏のいう「法仏I式」は、上述の「月影式」の前段階の土器組成のうち、主として①•②よりなり、「法仏II式」は①〜③よりなると考える。こうした理解は、「法仏式」の主体を①•②とおくことにより、「猫橋式」との区別と連関を明瞭にし、③を①から生まれる「月影式」へのあくまで過渡的なものとおくことにより、「月影式」との間に画期を求めようとする谷内尾氏の編年観を強く反映してはいるが、「月影式」の前段階の土器組成を反映するものかどうかは疑問である[65]。私は、「月影式」の前段階の土器組成は、基本的には①〜③よりなり、現状では、器種・形式によっては明瞭には確認できないものがあるためそのすべてとはいえないが、少なくとも③を新相段階に限定するべきではないと考える。そうした概念的な把握が「月影式」の前段階の理解を困難にし、一般に「法仏式」を難解なものにしていると思えてならない。このことは、③の①からの派生のあり方にたいする理解と評価にかかわる問題としてあらわれる。以下、中型器台と大型器台に具体例をとり検討する。



第40図　北加賀の第V様式期の中型・大型器台

第40図は、北加賀の第V様式期の中型・大型器台である。中型器台(Aとする)は上述の①にあたり、大型器台(Bとする)は上述の③にあたる[66]。谷内尾氏がBの出現を「法仏II式」に位置づけていることはすでに指摘したが、その形態変遷上の根拠は、A・Bを同一形式内での型式変化と捉え、基本的にA→Bという新古関係を想定することによる。Aが漸次的に変化してBになるのであれば、A・Bの中間的な型式が存在しなければならないが、現在確認できる資料は、Aは最後まで中型であり、Bは当初から大型である。中間的なものはない。また、A・Bを新古関係におく限り、その共伴例の説明が難しくなる。3・4は同一遺構(溝状遺構であるが)から出土し、同様の例は、金沢市塚崎遺跡第21号竪穴[67]でも確認できるが、A→Bと捉える限り、それらはA・Bいずれかが混入品で

あるか、廃棄の同時性≠製作の同時性として処理される。一括性の問題はともかく、製作時期の差異を把握できるような良好な資料を、現在私達はほとんどもっていない。それは将来的に実証されるべき対象ではあっても、A→Bと捉える際の前提とされるべき性質のものではないと考える。さらにまた、高松町中沼C遺跡では、型式学的にみて4よりも明らかに古相を示す大型器台(B)が、最も古相を呈す細頸壺とセットをなしている[68]。私は、個々の資料では欠落することがままあり、地域差、遺跡の性格、両者の量的比率の推移といった検討すべき問題はあるとしても、A(①)・B(③)の共伴を、「月影式」の前段階に一般的におこり得る現象としてひとまず認めたいと思う。BはAから派生した時点[69]で、基本的には別個の形式として独自の型式変化を辿るのであって、その共伴関係から、Bの存在がAの型式変化に影響を与えている可能性さえ考えてもよいと思っている。

以上私は、①を基調としながらも、②・③の出現・派生こそが「月影式」の前段階の土器組成上の最大の特徴と考える[70]。そうした土器群の出現は、「猫橋式」の実態が不明瞭であるため明言はできないが、大きな(「月影式」を含めた第V様式期を二分し得るような)画期といわざるを得ない。「月影式」の前段階は、高杯・器台・鉢などの派生形式を中心に器形の大形化・端部の飛躍的伸長(および器壁の薄化)を指向し、同時にスタンプ文をはじめとした各種施文を盛行させる。それらの諸形式を継承した「月影式」は、一転して器形の小型・定型化、形式・形骸化を指向し、同時に各種施文も消滅・衰退する。①の大部分の消滅とともに、こうした対照的なあり方から、両者を様式的に分離する必要は認めるが、諸形式の継承関係を考えると、その画期が上述のそれより大きいとは考えない。逆に、土器形式にみる限りでの「月影式」の独創性は、わずかに月影型甕(擬凹線文有段口縁甕)と結合器台にしかみられない(それとても完全なオリジナルではない)ようにみえ、あらためて「月影式」とは何かが問題になるように思う。

谷内尾編年が公表されてのち、「法仏A群土器」を標式とする「法仏I式」の単純遺構資料はほとんど確認できない。このことは、「月影式」の前段階の土器組成が、程度の差こそあれ①・②とともに③を含むものであり、「法仏式」のメルクマールであるスタンプ文は、基本的には①には伴わず、②・③の形式に施文される(第3節参照)ことと無関係ではない。私は、谷内尾氏のいう「法仏I式」の概念は、「月影式」の前段階古相の土器組成の実態を反映するものとしては成立しないと考える。したがって、具体的な資料による詳細な検討が急務であるが、谷内尾氏のいう「法仏II式」の概念をすでに述べてきた方向で修正・再構成したうえで、それをもって「月影式」の前段階のすべてを再度「法仏式」と呼称したい。

4　小　　結

本節では、「月影式」をめぐる問題について若干の検討をおこなった。いずれも粗略な叙述に終始し、緻密な検討ができていない。研究史、他地域との並行関係については全くふれることができなかった。機会をあらため、本節で提起した問題を含め検討することにしたい。

第3節　スタンプ文について

1　研究小史

本節では、弥生土器の器面を飾る文様のうち、型押による文様いわゆるスタンプ文について検討する。

スタンプ文は、1920年(大正9年)、上田三平氏が福井県坂井町河和田遺跡の例[71]を紹介してのち注目を集めるところとなり、1920年代から30年代にかけて、鳥居龍蔵[72]、直良信夫[73]、小林行雄[74]、倉光清六[75]の各氏が資料の紹介と検討をおこなった。それらの多くは、器面を飾る文様の比較的乏しい弥生土器にあって、スタンプ文が「型押」という特殊な方法によって施文されること、さらにその文様が銅鐸を中心とした青銅器を飾る文様と類似することに力点をおくものであった。爾来、スタンプ文研究は、戦前・戦後を通じて青銅器文様との関連性を中心に進められ、1969年(昭和44年)、葬送儀礼に深く係るものとして、スタンプ文に「祭紋」という概念を付与した今里幾次氏の論考[76]によって、ひとつの帰結を得た感がある。

これにたいして1970年代以降は、スタンプ文諸形式の出現・存続期間や分布が注目を集めるようになった。まず1973年(昭和48年)、渦文系スタンプをA～Eの5類に大別整理した名越勉・甲斐忠彦両氏は、渦文スタンプD類(S字あるいはZ字状渦文)と「特殊壺」の系譜に連なる土器の分布の重なりに着目し、両者が相当数分布する吉備・山陰・北陸の諸地域の交流について、古墳発生前後の祭祀(土器)の類似生という観点から、一定の見通しをたてた[77]・[78]。1981年(昭和56年)には、谷内尾晋司氏が名越・甲斐分類のD類スタンプ文の細別をおこない、北陸における時期差と地域差について概観した[79]。このなかで谷内尾氏は、D類のなかからその出自が北陸に求められるものを抽出するとともに、濃密に分布する北陸のスタンプ施文土器を、古墳出現前夜の「北陸型特殊土器」と呼称し得るものであるとした。同年、桑原隆博氏も名越・甲斐分類のC類スタンプ文(同心円文を斜線で連結して連続渦文に擬したもの、およびそれに類似するもの)について検討を加え[80]、C類の終焉が弥生時代後期のなかにあること、限られた器種(供献用土器)にのみ施文されることを明らかにし、C類スタンプ文が「農耕社会形成期に於ける集団祭祀に伴うものであり、そのため統一化される古墳祭祀＝首長権継承儀礼には継承されなかったものと考える[80]。」という興味深い見解を示した。また最近では、1985年(昭和60年)、萬谷幸美氏が名越・甲斐分類のA～D類を集成し、D類類似のS字状浮文について検討をおこなっている[81]。

以上、スタンプ文研究は、現在スタンプ文諸形式の消長とその分布論において、古墳の発生と古墳時代の開始に深く係る、弥生時代後期の諸地域の動向究明の一翼を担いつつある。以下本節では、これら研究の現状をふまえ、名越・甲斐分類に従ってA～E類およびその他のスタンプ文諸形式の特質を概観する。さらにD類スタンプ文の細別を試みたのち、北陸と他の諸地域との交流、北陸内部での地域差、スタンプ文のもつ意義等について触れることとする。

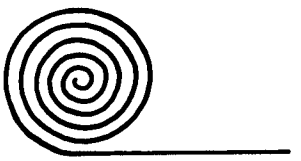
2　スタンプ文諸形式の特質(第41・42図、第6表)

A類

渦文。渦の外周がまっすぐのびるもの。7遺跡8例が確認できる。他の渦文系スタンプはすべて陰刻文であるが、A類のみ陽刻(文様が浮彫りになる)文である。渦の直径は2cm前後、なかには3cmをこえるものもあり、大型を一般的とする。器面に密に施文され[82]、組合せによって蕨手文、連続渦文[83](前者の場合は複数の原体が必要)などを構成する。壺(・甕)の胴部に施文される。

施文土器は、ほとんどが第IV様式期に比定されるもので、A類スタンプ文の出現・盛行期は同期と考える。出土地は、山城を除く畿内、但馬、加賀であり、現状では畿内を中心に分布しているようにみえる[84]。

このほか、型押による陽刻文の例として、流水文・動物文(鹿?)があげられる。前者は池上遺跡例(4)にA類とともに同一器面に施文されており、後者は大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡出土の壺(中期後半)に施文されている。また後者の遺跡からは、四頭渦文(?)を彫り込んだ四脚付台形木製品[85]が出土している。


A類スタンプ文

B類スタンプ文

C類スタンプ文

D類スタンプ文

E類スタンプ文

陰刻渦文

LR

L
鋸歯文

第41図　スタンプ文諸形式模式図

B類

連続渦文。11遺跡11例[86]が確認できる。一単位は通常一方から巻き込んだ沈線が中心部で反転し巻き戻すもので、両端を連結させながら施文し連続渦文とする。渦の中心が連結する第II種のみで、同部が連結しない第I種の例は、これまでのところない。S(2・6～11)とZ(1・3～5)があり、また両端が1本沈線のもの(2～5)と2本沈線のもの(1・6～11)がある。渦の直径は1～1.5cmを測る。壺の口縁・胴部に施文される例が多いが、法仏遺跡例(9)は器台(受部)、魚躬遺跡例(11)は高杯(脚端部)に施文されている。

施文土器は、弥生時代後期後半に比定されるものがほとんどである。出現期については若干の留保を要するとしても、主要盛行期は同期と考える。出土地は、美作、播磨、摂津、丹波、(丹後)、加賀、越中であり、北陸を除けば畿内以西に分布している。なお、北陸のB類スタンプ文施文土器は、後述するD類ほどではないにせよ一定量の出土をみており、またいくつかの細別形式も認められる。形式・分布などの点でD類との類似性があり、その動態については別の機会に具体的に検討したいと考えている。

このほか、ヘラ描きによって連続渦文を施した例として、岡山県落合町下市瀬遺跡[87]、岡山市百間川当麻遺跡[88]、金沢市七ッ塚

墳墓群[89]出土土器があげられる。

C類

同心円文を斜線で連結して連続渦文に擬したもの。20遺跡23例が確認できる[90]。すべて型押によるもの、大きさの異なる竹管文を組み合せ同心円文に擬したもの、円形浮文上に竹管文を施したもの、竹管文のみによるものがあり、また、敷地町後方遺跡例(21)は櫛状工具による刻み(目)によって同心円文を連結している。壺・台付鉢の口縁・胴・脚部などに施文される例が多いが、高杯・器台類にも施文される。

施文土器は、弥生時代中期後半とされるもの(第6表1・6・8・9・20など)が最も古く、後期後半の例まで確認できる。北陸の3例は下限例に属すると考える。出土地は、備後、美作、備前、丹後、播磨、摂津、河内、大和、加賀、越中であり、吉備と畿内の例が多い。C類スタンプ文の出自は、6重の同心円文(2)など、精巧なつくりで最古例も多い吉備とされている[91]。確かに吉備は発生地の一つと考えるが、円形浮文・竹管文系のC類スタンプ文の分布が摂津(12・14～16など)・大和(20など)の畿内に偏ること、しかもそのなかには第IV様式期の例(20)もあることなどから、C類のなかに複数の系譜があり、畿内～吉備(特に畿内)において両者の分布が重複しているとみることも可能と考える。

D類

S字(Z字)状渦文。46遺跡82例[92]が確認できる。細別形式等については次項で扱うこととする。壺・高杯・器台に施文されるが、北陸の諸例は高杯・器台類が圧倒的に多い。

施文土器は、ほとんどが弥生時代後期後半に比定されるものであり、出現期についての留保・主要盛行期は、B類スタンプ文のそれと同様と考える。出土地は、伯耆、美作、備前、摂津、丹後、越前、加賀、能登、越中、越後であり、B類と類似した分布を示している。

ところで、前述の萬谷論文[93]は、D類スタンプ文に類似するS字(Z字)状浮文(e類)の検討をおこない、11遺跡14例を集成している。ここでは、すでに知られている石川県松任市竹松遺跡出土の結合器台[94](装飾器台、弥生時代後期後半)の他に、金沢市南新保D遺跡出土例[95](壺?)、福井県三方郡鳥浜出土の壺[96]を追加しておく。

E類

同心円文。ここでは全国的な分布を検討することができなかたため、北陸(主に石川県)の例を紹介する。県内(加賀・能登)では、現在11遺跡22例が確認できる[97]。越前では福井市林遺跡・曽万布遺跡、越後では糸魚川市一の宮遺跡で確認されている。高堂遺跡(6・8・11)、中沼C遺跡(19・20)例の4重が最多重例で、他に3重・2重のものがある。壺、高杯・器台類に施文される例が多いが、高堂遺跡には蓋(12)に施文したものもある。B類、D類、鋸歯文スタンプなどと同時に施文される例も少なくない。施文土器は、弥生時代後期後半に比定されるものがほとんどである。

陰刻渦文

同心円文に類似する単体の渦文スタンプ。渦の外周がのびずかつ陰刻文であることから、A類スタンプ文とは区別できる。4遺跡4例が確認できる。4例は弥生時代後期(後半)に比定される壺

第6表　スタンプ文施文土器出土地名一覧表

A類　器種欄空欄は、器種不明（以下同様）。

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	仲田	兵庫県朝来郡山東町	但馬		98
2	奈カリ与	〃　三田市	摂津	(甕)	99
3	田能	〃　尼崎市	〃		100
4	池上	大阪府　和泉市	和泉	壺	101
5	亀井	〃　八尾市	河内	〃	102
6	唐古	奈良県磯城郡田原本町	大和	〃	103
7	〃	〃	〃		〃
8	戸水B	石川県　金沢市	加賀	壺	104

B類　（壺）：他の器種の可能性もある（以下同様）。

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	法事坊	岡山県久米郡久米町	美作	壺	42c
2	西田原	兵庫県神崎郡福崎町	播磨	〃	105
3	篠原	〃　神戸市	摂津		73・74
4	石本	京都府　福知山市	丹波		106
5	青野	〃　綾部市	〃	(壺)	107
6	敷地町後方	石川県　加賀市	加賀	壺	50
7	永町（ガマノマガリ）	〃	〃	〃	108
8	佐々木（アサバタケ）	〃　小松市	〃	〃	420
9	法仏	〃　松任市	〃	器台	109
10	ちょうちょう塚	富山市　富山市	越中	(壺)	110
11	魚躬	〃　滑川市	〃	高杯	111

C類　鉢：台付鉢。（脚）：高杯・器台類（以下同様）。

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	戸宇大仙山	広島県比婆郡東城町	備後	鉢	112
2	的場	〃　深安郡神辺町	〃	器台	80
3	下市瀬	岡山県真庭郡落合町	美作	〃	113
4	槇の前	〃	〃		114
5	天神原	〃　津山市	〃	器台	115
6	雄町	〃　岡山市	備前	鉢	116
7	〃	〃	〃	壺	〃
8	門前池	〃　赤磐郡山陽町	〃	〃	117
9	〃	〃	〃	高杯	〃
10	長越	兵庫県　姫路市	播磨		118
11	荒神山	〃　神戸市	摂津	壺	119
12	会下山	〃　芦屋市	〃	〃	120
13	田能	〃　尼崎市	〃	〃	100
14	加茂	〃　川西市	〃	〃	121
15	上津島	大阪府　豊中市	〃	〃	122
16	〃	〃	〃	〃	〃
17	巨摩廃寺	〃　東大阪市	河内	〃	80
18	亀井	〃　八尾市	〃	〃	102
19	上ノ山	奈良県　橿原市	大和	(壺)	81
20	唐古	〃　磯城郡田原本町	〃	壺	103
21	敷地町後方	石川県　加賀市	加賀	(脚)	50
22	漆町	〃　小松市	〃	壺	123
23	辻	富山県中新川郡立山町	越中	〃	124

D類　No30～71は、第7表参照。

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	中峯	鳥取県　倉吉市	伯耆	壺	77
2	下市瀬	岡山県真庭郡落合町	美作		87
3	〃	〃	〃		〃
4	三明寺	〃　御津郡建部町	備前		113
5	篠原	兵庫県　神戸市	摂津	壺	74
6	谷内	京都府中　郡大宮町	丹後	器台	125
7	王山	福井県　鯖江市	越前		126
8	林	〃　福井市	〃		127
9	菖蒲谷B	〃	〃	(脚)	128
10	〃	〃	〃	〃	〃
11	荒木	〃	〃	〃	129
12	〃	〃	〃	〃	〃
13	曽万布	〃	〃	壺	130
14	〃	〃	〃	(脚)	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃
16	〃	〃	〃	(壺)	〃
17	〃	〃	〃	(脚)	〃
18	糞置	〃	〃	器台	〃
19	〃	〃	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃	(脚)	〃
21	河和田	〃　坂井郡坂井町	〃	〃	71
22	〃	〃	〃		〃
23	〃	〃	〃		131
24	〃	〃	〃		〃
25	〃	〃	〃		〃
26	〃	〃	〃		〃
27	〃	〃	〃		〃
28	〃	〃	〃	(脚)	130
29	(大関小)	〃	〃	高杯	〃
72	囲山	富山県射水郡　小杉町	越中	壺	132
73	江上A	〃　中新川郡上市町	〃	器台	133
74	〃	〃	〃	(脚)	〃
75	〃	〃	〃	〃	〃
76	〃	〃	〃	〃	〃
77	〃	〃	〃	〃	〃
78	魚躬	〃　滑川市	〃	〃	111
79	佐伯	〃　魚津市	〃	〃	134
80	狐崎	新潟県　三条市	越後	高杯	135
81	館	〃	〃		136
82	大沢	〃　西蒲原郡　巻町	〃		137

E類　註No欄　B－8：B類No8と同一個体（以下同様）。

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	林	福井県　福井市	越前	壺	127
2	曽万市	〃	〃	(脚)	130
3	永町（ガマノマガリ）	石川県　加賀市	加賀		108
4	漆町	〃　小松市	〃		138
5	佐々木（アサバタケ）	〃	〃	壺	B-8
6	高堂	〃	〃	高杯	139

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
7	高堂	石川県 小松市	加賀	高杯	139
8	〃	〃	〃	器台	〃
9	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃		〃
11	〃	〃	〃	(鉢)	〃
12	〃	〃	〃	蓋	〃
13	〃	〃	〃		〃
14	法仏	〃 松任市	〃	器台	B-9
15	〃	〃	〃	(脚)	109
16	〃	〃	〃	〃	〃
17	無量寺BⅣ	〃 金沢市	〃		140
18	近岡	〃	〃	(脚)	141
19	中沼C	〃 河北郡高松町	〃	壺	37
20	〃	〃	〃	〃	〃
21	高田	〃 羽咋郡富来町	能登	(脚)	142
22	奥原	〃 七尾市	〃	高杯	56
23	〃	〃	〃	〃	〃
24	矢田	〃	〃	〃	143
25	一の宮	新潟県 糸魚川市	越後		144

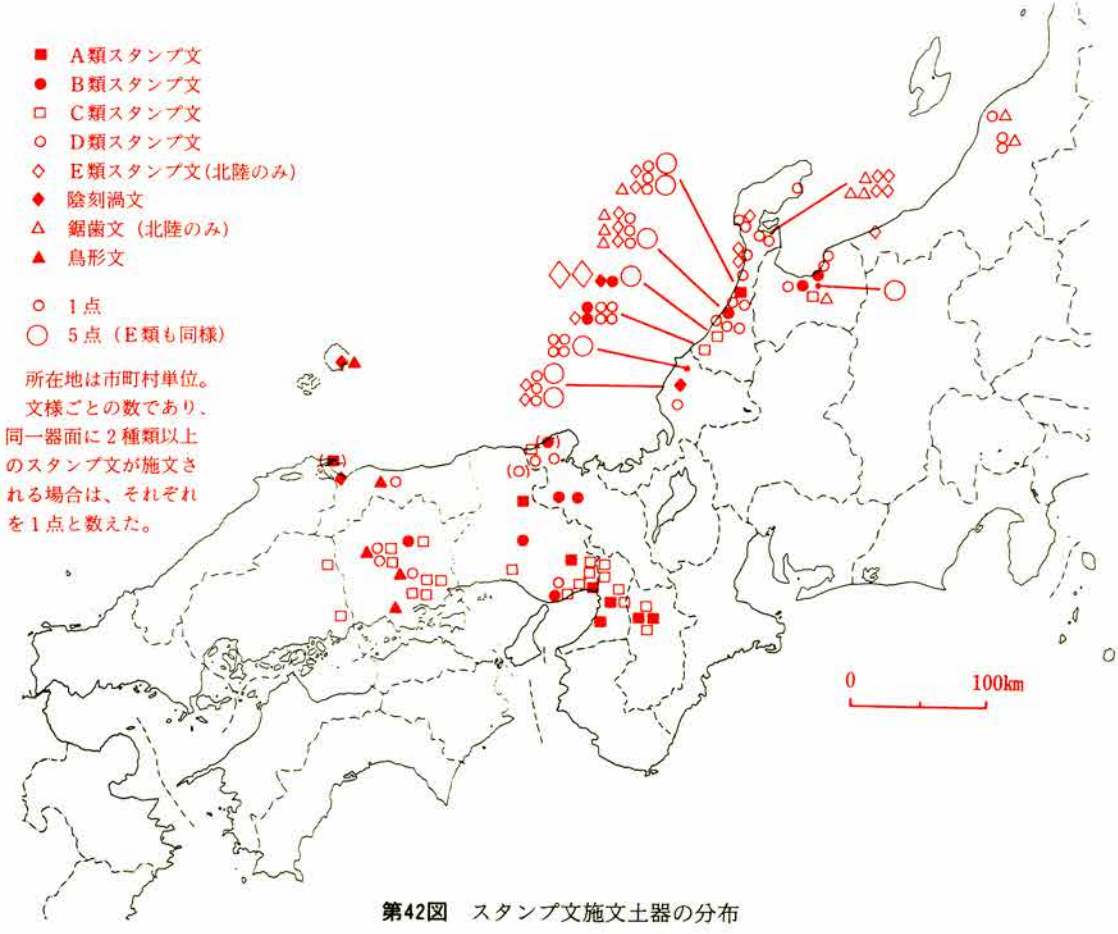
陰刻渦文

（第6表つづき）

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	大城	島根県隠岐郡西郷町	隠岐	壺	145
2	青木	鳥取県 米子市	伯耆	〃	146
3	林	福井県 福井市	越前	〃	E-1
4	佐々木アサバタケ	石川県 小松市	加賀	〃	B-8

鋸歯文

No	遺跡名	所在地	旧国	器種	註No
1	法仏	石川県松任市 松任市	加賀	器台	109
2	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	E-15
4	七ツ塚墳墓群	〃 金沢市	〃	高杯	46 a
5	奥原	〃 七尾市	能登	〃	E-22
6	矢田	〃	〃	〃	E-24
7	〃	〃	〃	〃	143
8	〃	〃	〃	〃	〃
9	辻	富山県中新川郡立山町	越中	〃	124
10	狐崎	新潟県三条市 三条市	越後	〃	D-80
11	大沢	〃 西蒲原郡 巻町	〃		D-82



第42図 スタンプ文施文土器の分布

(青木遺跡例は青木編年III期新の標式土器のひとつである。)で、出現・盛行期もA類とは異なる。鳥形文・波形文(1)、E類(3・4)、B類(4)などと同時に胴部に施文される。出土地は隠岐、伯耆、越前、加賀である。類例が少ないため詳細は不明だが、一定の存続期間と分布域をもつ独立した形式と考えたい。

鋸歯文

鋸歯文スタンプ。E類同様北陸の例を紹介する。加賀・能登では現在4遺跡8例[147]が確認できる。越中では立山町辻遺跡、越後では三条市狐崎遺跡、巻町大沢遺跡で確認例がある。銅鐸文様[148]でいうL(5)、R(4)、LR(1～3)のほかに、横方向(6・7)、縦方向(8)に沈線をもつものがある。D類、E類と同時に高杯・器台類に施文される例が多い。施文土器は弥生時代後期後半に属する。

このほか、ヘラ描きによって鋸歯文を施した例として、県内では松任市法仏遺跡[149](加賀)、羽咋市吉崎・次場遺跡[150](能登)、越中では上市町江上A遺跡[151]出土壺が知られている。

鳥形文

鳥形文スタンプ。島根県西郷町大城[152](隠岐)、鳥取県倉吉市中峯[153](伯耆)、岡山県落合町下市瀬[154](美作)、同建部町三明寺[155](備前)、同倉敷市上東[156](備中)の各遺跡で出土例がある。壺・器台などに施文される。北陸では典型的な鳥形文は確認できていないが、上東遺跡例に類似するW字(あるいはS・Z字)形陰刻文をもつものは存在する[157]。鳥形文の範疇で捉えられるものかどうかは、今後の検討課題としておきたい。

以上、スタンプ文諸形式について概観してきたが、このほかにも各種のスタンプ文およびそれに類するものがある。それらについては、次項および小結で石川県内の例を中心に若干触れることとし、ここで一応のまとめをおこないたい。

まず、第IV様式期にほぼ存続期間を同期に限定できるものとして、A類スタンプ文を中心とした陽刻文系のスタンプ文が(現状では)畿内およびその周辺に出現する。これと同時に、C類スタンプ文が吉備(・畿内)に出現し第V様式期まで存続する。これにたいして、B類・D類スタンプ文は、A類・C類より遅れ第V様式期後半に(出現・)盛行する。

今後の資料の増加によって、分布や存続期間等について変更の必要が生じる可能性を十分認めたうえで、スタンプ文諸形式の特質を概略以上のように捉え、次項ではA類を除くほぼすべてのスタンプ文が出現・盛行する北陸の第V様式期後半の動向を、石川県内の資料を中心に、主体的な形式であるD類スタンプ文の細別をとおして検討したい。

3　D類スタンプ文の細別とその分布(第43・44図、第7表)

D類スタンプ文は、石川県内で現在33遺跡42例が確認できる[158]。このうち細別の対象としたのは31遺跡36例である[159]。主たる細別の要素を渦の中心部の形態に求め、Ⅰ～Ⅳに形式分類し、それぞれについてさらにA(単純なもの)、B(複雑なもの)、C(変形・矮小化しているもの)を認めた。他の要素としては、S字状およびZ字状の別、長さによってL(17㎜以上)、M(13～16㎜)、S(12㎜以下)の別[160]を認めた。

また、ⅡB・ⅢA・ⅢBは、中央連結部の沈線の数を根拠に、ⅡB_1(3本)・ⅡB_2(4本)、ⅢA_1(2本)・ⅢA_2(3本)、ⅢB_1(3本)・ⅢB_2(4本以上)に細分し、ⅢCはL(・M)のみのものをⅢC_1、M(・S)のみのものをⅢC_2とした。ⅢC・ⅣCの小文字のa・b・cは、現状で確認される多様性に対応しており、資料の増加によっては、それ以上になる可能性をもつものである[161]。

Ⅰ　沈線が単独で渦の中心へ巻きこむもの。4遺跡4例が確認できる。A1例(S(字状、以下同様)、L(長さを表わす、以下同様))、B2例(S、M)、C1例(S、M)がある。いずれもS字状、AがL、B・CがMサイズである。施文土器は高杯・器台、すべて加賀の例である。

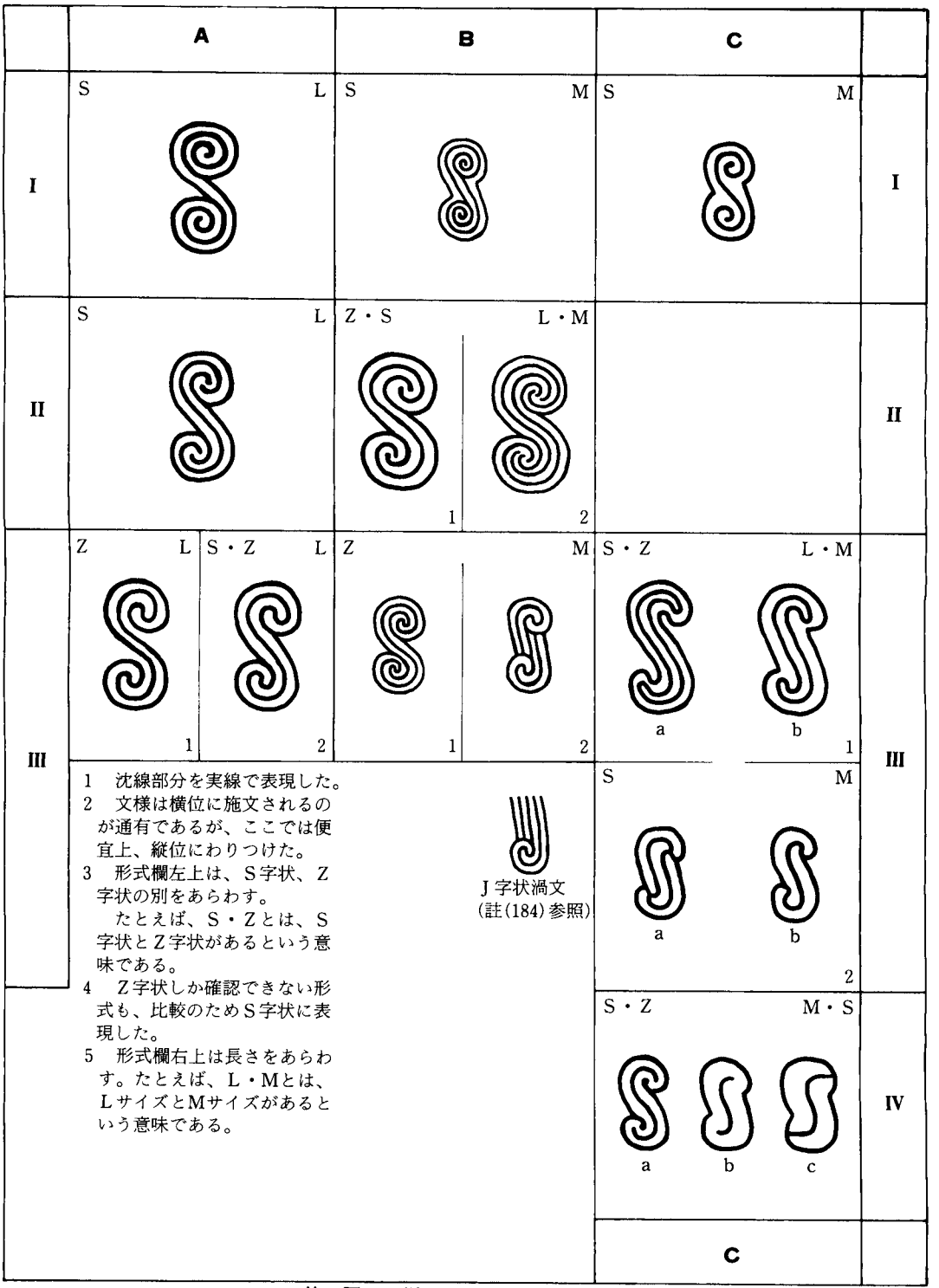
Ⅱ　複数の沈線が渦の中心へ巻きこむが、中心部で沈線が連結しないもの[162]。7遺跡8例が確認できる。A3例(S、L)、$B_1$2例(Z・S、L・M)、$B_2$3例(Z・S、L・M)がある。AとB_1の差異は、AがS字状を呈するのにたいして、B_1は長さにたいして幅がやや広く、両側の渦が接近し8の字状を呈するところにある。AはSのみ、BはS・Zがある。AはL、BはL・Mサイズである。施文土器は1例が脚台付壺(51)、他の7例は高杯・器台。すべて加賀の例である。

Ⅲ　巻きこんだ沈線が渦の中心部で反転し、巻きもどすもの[163]。15遺跡19例が確認できる。$A_1$2例(Z、L)、$A_2$6例(Z・S、L)、$B_1$1例(Z、M)、$B_2$1例(Z、M)、C_{1a}1例(S、L)、C_{1b}5例(Z・S、LおよびZ・S、M)、C_{2a}1例(S、M)、C_{2b}2例(S、M)がある。A_2とB_1の差異はⅡの場合と同様で、さらにA_2にたいしてB_1は半回転巻きが強いところにある。C_1とC_2の差異は、上述の法量のほかに、C_1が部分的にでもS字状の意匠をもつのにたいして、C_2は乙字状を呈するところにある。A_1・BはZのみ、C_2はSのみ、他はS・Zがある。AはLのみ、B・C_2はMのみ、C_1はL・Mサイズである。施文土器は6例が壺、12例が高杯・器台である。加賀(11遺跡15例)・能登(4遺跡4例)で確認できる。

Ⅳ　1条の沈線によってS(Z)字・乙字状の文様を表現するが、両側は渦状を呈さないもの。5遺跡5例が確認できる。すべてCで、S・Zがあり、それぞれM・Sがあるが、Lサイズはない。施文土器はすべて高杯・器台、加賀(4遺跡4例)・能登(1例)で確認できる。

以上、Ⅰ～Ⅳ形式について略述したが、次に各形式・各要素の分布について検討する。その場合、加賀・能登という地域区分にとらわれず、できるだけ地域を細分し、分布の状況に応じて再構成する方法をとりたい。すなわち、南加賀を①江沼平地付近(30～33)と②梯川周辺～手取川扇状地(手取川以南、34～41)に、北加賀を③手取川扇状地(手取川以北、42～52)と④沖積平野(53～60)に細分する。61～64は丘陵上に位置するが資料が少ないため④沖積平野に含めて考える。65は加賀

の資料ではあるが、周辺に資料が分布せずまた能登に近いため、同様に資料の資ない⑤能登(66〜71)と一括してあつかう。



第43図　D類スタンプ文形式分類図

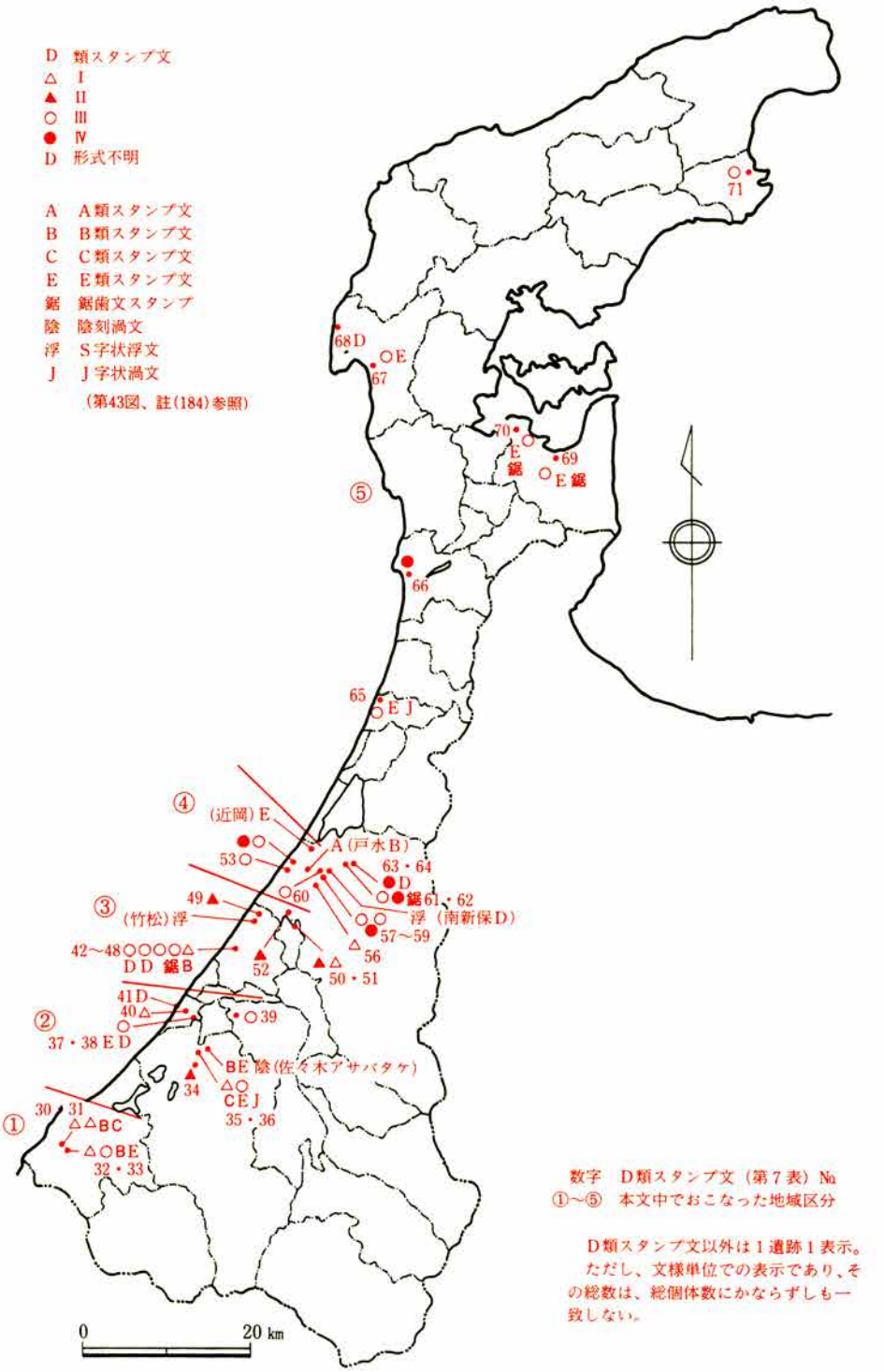
まず、Ⅰ～Ⅳ形式の分布は、①Ⅱ３(例)・Ⅲ１(例)、②Ⅰ１、Ⅱ２、Ⅲ３、③Ⅰ３、Ⅱ２、Ⅲ４、④Ⅱ１、Ⅲ６、Ⅳ４、⑤Ⅲ５、Ⅳ１となる。資料が少ないため量的な比率は問題にし得ないが、現状ではⅢが各地域に共通して分布し、Ⅰ・Ⅱは①～③(④にⅡが１例あるが)、Ⅳは④・⑤の地域に分布している。ちなみに、越前ではⅠ(第６表D類20、以下同様)、Ⅱ(21他)、Ⅲ(13他)、越中ではⅢ(76他)、Ⅳ(79)、越後ではⅢ(80)が確認できる。私はこのことを、Ⅲが共通して北陸に分布する形式で、Ⅰ・Ⅱが主として北陸西部に、Ⅳが主として北陸東部に分布する形式と理解したい。その場合、D類スタンプ文が北陸に波及した時点ですでにⅠ～Ⅳの形式差が存在したのか、共通形式としてのⅢが波及したのち、北陸内部でⅠ・Ⅱ、Ⅳが派生したのかが問題となる。北陸以外の例を詳細に検討していないため明言はできないが、少なくともⅣは、現在北陸以外では確認できないことから、谷内尾氏が指摘する[164]ように、北陸(東部)でⅢから派生したものと考えたい。

次に、S字状・Z字状の分布をみてみると、①S３、Z１、②S６、Z１、③S７、Z４、④S５、Z７、⑤S３、Z３となる。①・②にZ字状が少ないようにもみえるが、資料数の少ない現段階では、地域差を反映しているか否かの判断はできない。また法量(長さ)の分布は、①L３、M１、②L３、M３、③L５、M５、S１、④L５、M４、S３、⑤L２、M４となる。量的な比率を問題にし得ない現状では、同様に地域差としては捉えきれない。むしろ法量は、同一形式での小形式差に対応する可能性がある[165]。

施文土器(器種)は、①高杯(・器台)、②高杯・器台(・甕？)、③・④壺・高杯・器台、⑤壺・高杯(・器台)である。前節で述べたように、そのほとんどすべてが細頸壺・棒状有段脚高杯・大型器台等の「法仏式」における出現・派生形式である。①・②では壺、①・⑤では器台の確実な例がないか少ないが、このことは、①・②の壺にB類スタンプ文が施文されている(第６表B類６～８)こと、①・⑤では、装飾性に富む大型器台が確認されないか少ないことと関連があり、加飾される器種・形式および施文されるスタンプ文形式の地域差として捉え得ると考えている。

D類スタンプ文とともに同一器面に施される文様は、(擬)凹線文が最も多いが、このうち器面に密に施される例は、装飾性に富む大型器台が主として分布する③・④に多い。また鋸歯文スタンプは、④・⑤・越後(第６表D類80・82)に認められる。鋸歯文スタンプ自体の北陸での南限は、越前を含め③(第６表鋸歯文１～３、以下同様)までである。他のスタンプ文等では、陰刻渦文・斜線文帯[166]が越前(陰刻渦文３)・①(B類６)・②(B類８、D類35)、③(D類51)(北陸西部？)、B類スタンプ文は①(６・７)・②(８)・③(９)・越中(10・11)、C類スタンプ文は①(21)・②(22)・越中(23)に分布している。

以上、スタンプ文諸形式、D類細別形式、施文器種・形式等を中心に北陸での分布を検討してきた。それらは、汎北陸的な要素(D類Ⅲ形式等)をもちながらも、概ね東部的な要素(D類Ⅳ形式等)と西部的な要素(D類Ⅰ・Ⅱ形式等)に二分し得る。両者は地理的に明瞭な一線を画して分布するというよりも、北加賀(③・④)で双方の要素が重複しているものと考えたい。例外的な要素については、それがその地域での多様性でない限りは、搬入施文土器・原体の有無を含めて、北陸内(外)部での地域間交流の問題として検討される必要があろう。



第44図　石川県のスタンプ文等施文土器の分布

第7表　石川県出土D類スタンプ文施文土器一覧表

（他県出土例（№1～29、72～82）は第6表参照）

№	遺跡名	所在地	形式	器種	施文部位	出土遺構	文様構成	註№
30	敷地町後方	(加賀) 加賀市	SⅡA L	高杯	杯部外面	5区南半最下層	V刻	50
31	〃	〃	ZⅡB$_2$ L	(脚)	脚部外面	〃	凹	〃
32	永町ガマノマガリ	〃	SⅡA L	〃	〃	包含層	刻	108
33	〃	〃	SⅢC$_{2b}$M	〃	〃	〃	凹	〃
34	吉竹（第2次）	小松市	SⅠA L	器台	受部外面	8区たちわり	凹	本書
35	漆町	〃	SⅡA L	〃	〃		凹斜	138
36	〃	〃	ZⅢC$_{1b}$M	(高杯)	杯部外面		W	〃
37	高堂	〃	S――M	高杯	脚部外面		凹E	E-7
38	〃	〃	SⅢA$_2$ L	(器台)	受部外面		凹刻	139
39	高座	能美郡辰口町	SⅢA$_2$ ―	――	――	東調査区	――	54
40	中庄	〃 根上町	SⅡB$_2$ M	器台	受部外面	包含層	凹V	167
41	加賀舞子	〃	――	(甕)	胴部外面	配石遺構		168
42	法仏	松任市	ZⅡB$_1$ L	(脚)	脚部外面		凹	36
43	〃	〃	ZⅢA$_1$ L	壺	肩部外面			169
44	〃	〃	SⅢA$_2$ L	(壺)	口縁部外面		三角列点	36
45	〃	〃	SⅢA$_2$ L	(脚)	脚部外面			〃
46	〃	〃	SⅢC$_{1b}$M	〃	〃		凹	〃
47	〃	〃	Z――M	〃	〃		凹	109
48	〃	〃	S――S	(高杯)	〃		――	〃
49	旭小学校	〃	SⅠC M	(脚)	〃		凹	170
50	押野タチナカ	石川郡野々市町	SⅠB M	高杯	〃		凹刻	42b
51	〃	〃	ZⅡB$_2$ L	台付壺	胴部外面		凹C斜	〃
52	八日市ヤスマル	金沢市	SⅠB M	(器台)	――		凹	171
53	金石東	〃	ZⅢA$_1$ L	細頸壺	口縁部外面		凹	36
54	無量寺B（第1次）	〃	SⅢC$_{2b}$M	器台	受・脚部外面	溝状遺構	凹透刻	52
55	〃（第2次）	〃	SⅣC$_b$ M	(脚)	脚部外面	C区落込	凹	172
56	二口六丁（第4次）	〃	SⅡB$_1$ M	〃	〃	大溝B	凹	173
57	西念・南新保55年	〃	ZⅢA$_2$ L	器台	受部外面	B-1区T-1(溝)		32
58	〃	〃	ZⅢC$_{1b}$L	(壺)	肩部外面	B-2区T-11(溝)		〃
59	〃 56年	〃	SⅣC$_c$ S	(脚)	脚部外面	G-1区包含層	凹	〃
60	南新保三枚田	〃	SⅢC$_{1b}$L	壺	胴部外面	包含層		174
61	七ツ塚墳墓群	〃	ZⅢA$_2$ L	高杯	口端・脚外面	第1号墓	鋸V透	鋸-4
62	〃	〃	ZⅣC$_b$ S	器台	受部外面	〃	凹V透	46a
63	塚崎	〃	ZⅣC$_b$ M	高杯	口縁端部	E5号土壙	W	46b
64	〃	〃	Z――S	(脚)	脚部外面	E4号土壙	W	〃
65	中沼C	河北郡高松町	ZⅢB$_2$ M	細頸壺	口縁部外面		凹EJ	E-19
66	寺家	(能登) 羽咋市	ZⅣCa M	高杯	脚部外面			175
67	高田	羽咋郡富来町	SⅢC$_{2a}$M	(脚)	〃		凹E	36
68	鹿頭アサホシバ	〃	――	――	――		――	175
69	矢田	七尾市	ZⅢB$_1$ M	高杯	口端・脚外面	4号溝下層	鋸	鋸-7
70	奥原	〃	SⅢC$_{1b}$L	(脚)	脚部外面	包含層	凹刻	56
71	上出	珠洲郡内浦町	SⅢC$_{1a}$L	〃	〃		刻	36

形式欄左　S：S字状、Z：Z字状。
　　右　L：17㎜以上、M：13～16㎜
　　S：12㎜以下。長さをいう。
器種欄　(脚)：高杯・器台類。
　　(壺)：他の器種の可能性もある。
出土遺構欄　空欄：表採等・整理中のもの。
――線　不明。

文様構成欄
V：横位のV字状刺突列。
刻：斜行の刻み目・列点。
凹：(擬)凹線・沈線
斜：傾きを異にする斜線文帯。
（註(166)第45図1）
W：W字状刺突列。
E：同心円文スタンプ。
C：C字状刺突列。
透：円形以外の透穴。
鋸：鋸歯文スタンプ。
J：J字状渦文。
（第43図、註(184)参照）

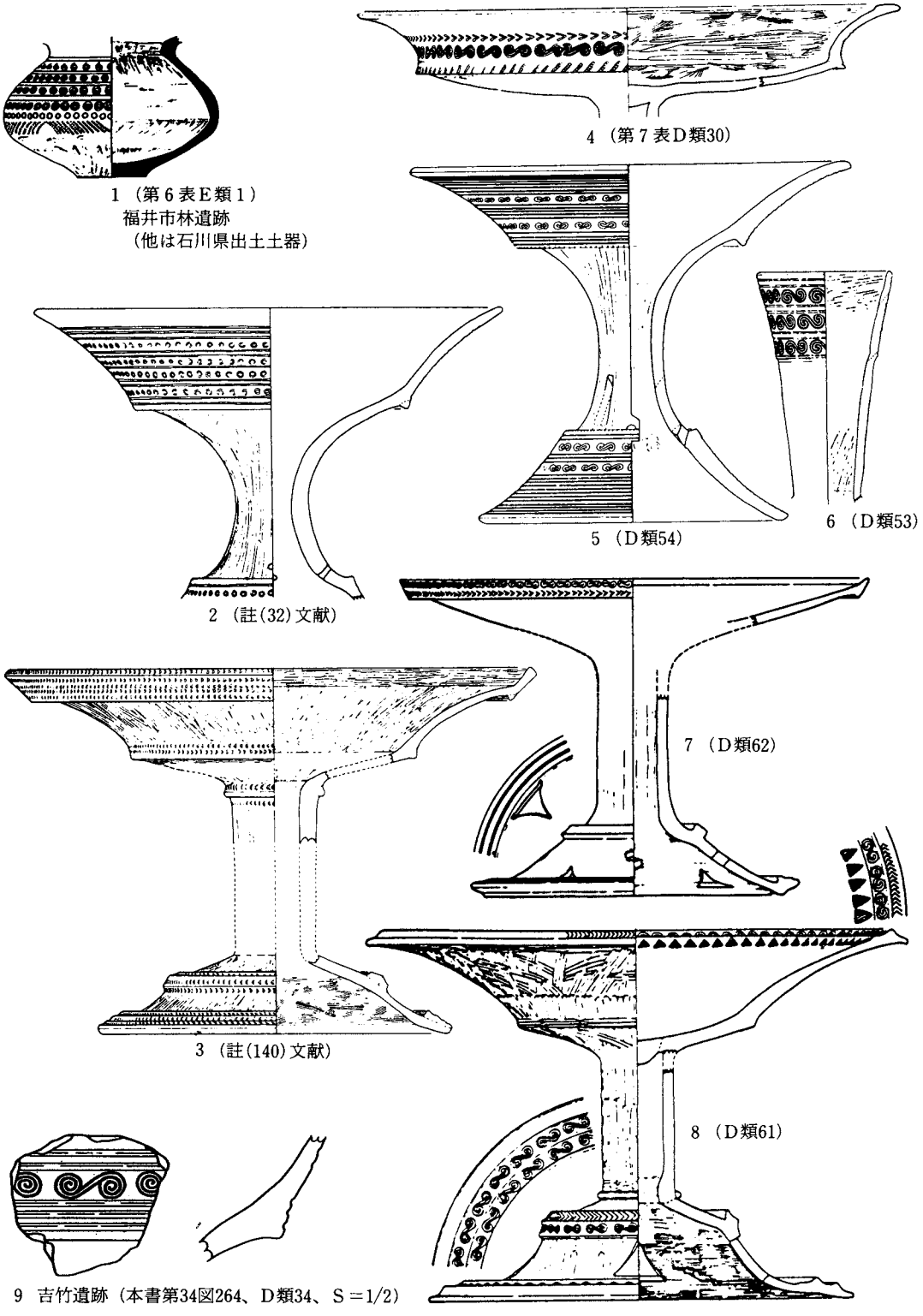
4　小　　結（第45図）

弥生土器の器面を飾る型押による文様、いわゆるスタンプ文は、吉備・畿内およびその周辺で第IV様式期に出現する。北陸でも同期の例（1例）が確認できる。かりにそれを北陸への第一次波及期とすれば、第二次波及期は繰り返し述べてきたように第V様式期後半、加賀では「法仏式[176]」の段階である。前者の例はおくとしても、後者の場合、現状ではその前段階（加賀では「猫橋式」）の確実な例がないこと、施文土器の主体が外来系土器（細頸壺など）、およびそれに呼応して在地系土器から新たに派生した器種・形式（大型器台など）であることなどから、その出現は他地域からの影響によるものであろう。具体的には吉備・山陰（・畿内）などがあげられるが、いずれの場合も丹後を経由した可能性が高いと考えている。

青銅器文様に類似するスタンプ文は、今里幾次氏が指摘する[177]ように、弥生時代の「祭紋」であり、施文土器の基本性格は祭祀（用）土器である。それは墳墓からも出土するが、集落からの出土例も決して少なくない。「法仏式」（並行）の集落の調査では、必ずといってよいほどスタンプ施文土器および類似的な性格をもつ土器[178]が出土する。私はスタンプ文を弥生時代の集落祭祀に係るものと捉え、墳墓出土例もそれと質的には異ならない（特定個人に供献されたものではないという意味で）ものと考える[179]。「法仏式」におけるこうした集落祭祀の昂揚は、その波及のあり方からみても、ひとり北陸（少なくとも加賀）だけのことではないであろう。

スタンプ文は、「法仏式」（並行）に（出現・）盛行するが、土器形式の多くが継承される（前節参照）「月影式」（並行）での確実な例はなく、同期には基本的に消滅している。同時に、祭祀土器にみる限り、擬凹線文等の各種文様も衰退の途をたどる。「法仏式」と「月影式」は、光と影とでもいうべき対照性を示すが、そのなかで、スタンプ文の基本性格を最も明瞭に継承したものが結合器台（装飾器台）であると考える[180]。結合器台の祭祀的な性格についてはすでに指摘されている[181]とおりであり、「月影式」の集落の調査ではほとんど例外なく認められる[182]。また古相の結合器台は、S字状浮文[183]、鋸歯文スタンプ類似のヘラ描き沈線・大型およびJ字状透穴[184]をもち、それらにスタンプ施文土器との類似性・関連性をみることができる。

結合器台は、前節で述べたように、擬凹線文有段口縁系甕とともに根強く残存するものの、続く「白江式」のなかで消滅する。「白江式」は、外来系土器が出現・定着・盛行する段階であり、祭祀土器・文様という点からは新たな波及期といえるが、それはもはや弥生時代のそれではない。私は、他地域においては、弥生時代祭祀の系譜が古墳時代祭祀の系譜（首長権継承儀礼に昇華・収斂していくものとして）に継承される地域（・要素）があるとしても、北陸（少なくとも加賀）はそれには含まれないと考えたい。「法仏式」のスタンプ文の系譜は、結合器台として「月影式」に継承され、さらに「白江式」で古墳時代の祭祀土器群と時期的に共伴するが、両者の間に直接的な系譜関係があるとはいえないからである。そのような意味においてこそ、スタンプ施文土器およびその系譜に連なる土器は、「北陸型特殊土器」[185]と呼称し得るものなのだと考える。



第45図 石川県出土スタンプ文等施文土器（S＝1/4）

第4節　おわりに

本章では、吉竹遺跡の遺物整理の過程で感じた疑問・問題点・課題などのうち、いくつかの問題について自分なりの検討をおこなった。私にとっては、発掘調査・遺物整理に係わってきたひとつのくぎりとして、また今後への覚書という意味でも必要な作業であったが、それが県内外の弥生土器・土師器研究のなかでどれほどの意味をもつものかについては、全く自身がない。諸先学の御批判・御叱正をいただければ幸いである。

本章執筆にあたっては、埋蔵文化財センター職員の指導・助言を得、社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会の職員の方々にもたいへんお世話になった。加えて以下の方々には、資料・文献の検索・確認等に便宜をはかっていただき、また有益な御教示もいただいた。私の力量不足のため、それらを十分生かすことができなかったことについては、別の機会に検討することをここに明記し御容赦願いたい。末尾ながら、記して深謝の意を表する。

山口　充、中司照世、吉田　淳、川端敦子、南　久和、出越茂和、楠　正勝、増山　仁、谷内尾晋司、宮本哲郎、戸澗幹夫、折戸靖幸、土肥富士夫、木立雅朗、久々忠義、坂井秀弥。(順不同、敬称略。)

註

(1)　1986年(昭和61年) 9月13・14日、「月影式」土器をめぐるシンポジウムが金沢で開かれ、その成果は下記の文献に収められている。

『シンポジウム「月影式」土器について』　報告編・資料編　石川考古学研究会　1986年　金沢。

(2)　a　田嶋明人　「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』　I　石川県立埋蔵文化財センター　1986年　金沢。

b　出越茂和　「北加賀における月影式土器の終焉」『金沢市近岡ナカシマ遺跡』　金沢市教育委員会　1986年　金沢。

(3)　a　谷内尾晋司　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』(『石川考古学研究会会誌』　第26号)　石川考古学研究会　1983年　金沢。

b　谷内尾晋司　「北加賀出土の布留系土器について――北安江遺跡出土の布留系甕の分析から――」『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

c　谷内尾晋司　「石川県の東海系土器」『欠山式土器とその前後』(第3回東海埋蔵文化財研究会)　愛知考古学談話会　1986年　名古屋。

(4)　註(3)a～c文献。　(5)　註(2)a文献。　(6)　註(2)b文献　(7)　註(3)a～c文献。

(8)　在地系土器に対比されるもの。土器の胎土および胎土中に含まれる砂礫構成、技法的特徴、形態的特徴等の諸要素、および(在地系)土器形式の認定とその型式変化の理解のしかた等によって、外来系土器に含まれる範囲は、概念的にも実際的にも異なる。たとえば、

a　在地以外の胎土をもち、技法的にも形態的にも他地域のものと考えられる搬入土器。この場合、その土器の製作地は発生地以外であることもあり得る。また、搬入経路も直接と間接とがあり得る。もちろん、発生地の認定自体にも検討の余地があるものもある。

b　在地の胎土をもつが、技法的形態的には他地域のものと考えられる土器。この場合、その土器の製

作者が他地域の人であることもあり得る。また、技法的形態的特徴が酷似する忠実な模倣品とその概略が類似するいわゆる模倣品があり得る。

c　在地の胎土をもち、一応は在地系土器形式の型式変化のなかで捉えられるが、その変化が純在地的ではなく、他地域の土器の影響を受けたと考えられるもの。

d　在地の胎土をもち、在地系土器形式の型式変化のなかで捉えられる土器。

という概念的な区分が実際的にも可能である場合、私はa・bを外来系土器、c・dを在地系土器と呼称したい。このうち、aを搬入土器、cを外来系土器の影響を受けた在地系土器と呼称する。現状では明確な区別が難しいものも少なくないが、私自身の検討の指針としていきたい。

また、現段階では、他地域という場合、山陰・吉備・畿内・近江・東海といった遠隔地でしかも大きな範囲を対象とする場合が多い。それらの諸地域の細別とは別に、北陸内部の諸地域間の交流や、同一土器圏内での小地域間交流も、今後は具体的に検討の対象となるであろう。その場合、「外来」と「在地」という概念は、次元と変えて再び問題となる。

(9)　吉田　淳　『御経塚ツカダ遺跡(御経塚B遺跡)発掘調査報告書』　I　石川県野々市町教育委員会　1984年　石川県野々市町。

布留系甕・小型器台が出土している81-1号住居跡(漆・7群土器並行)は、月影II式の81-2号住居跡等と大きく重複しており、81-1号住居跡出土の在地系土器は、ほとんど81-2号住居跡等からの混入品であろう。また、81-1T出土の在地系土器(月影II式)と布留系土器(漆・8群土器並行)は、それぞれ北地区と南地区に別れて出土しており、両者の距離は直線にして20m弱(溝に沿えば30m強)である。とうてい一括出土とは考えられない。したがって、御経塚ツカダ遺跡の「月影II式」の段階に、外来系土器は伴わないと考える。

(10)　出越茂和・楠　正勝　『金沢市近岡ナカシマ遺跡』　金沢市教育委員会　1986年　金沢。2号溝上層。他。

(11)　註(10)文献。2号溝上層。他。

(12)　出越茂和　『金沢市松寺遺跡』　金沢市教育委員会　1985年　金沢。B2号土壙。他。

(13)　註(10)文献。2号溝上層。他。

(14)　宮本哲郎・筆者・他　『金沢市南新保D遺跡』　金沢市教育委員会 1981年 金沢。C区P-54(土抗)。他。

(15)　註(12)文献。A1号溝。他。

(16)　註(14)文献。D区 T-104溝状遺構。他。

小型高杯自体は、「月影式」の前段階に出現し(次項参照)、「月影式」に継承される(註(9)文献　80-3号住。他)。それは程度の差こそあれ杯部が外反する。これにたいして、「白江式」に出現する小型高杯は杯部が内湾する。「白江式」での共伴はともかく、基本的には別形式と考える。

(17)　註(14)文献。P-11-1(土坑)。他。

(18)　田嶋明人・越坂一也・山本直人・新城えり子・田中孝典・横山そのみ　『漆町遺跡』　I　石川県立埋蔵文化財センター　1986年　金沢。「白江・ネンブツドウ」7号溝下層。他。

(19)　註(18)文献。「白江・ネンブツドウ」7号溝下層、「金属・サンバンワリ」298号土坑。他。

(20)　現在、「白江式」で布留系甕の共伴が指摘される例は、溝・沼状遺構・包含層資料のみであり、土坑などの資料で確実なものはない。溝資料でも良好な一括資料はあり得るし、土坑出土品に組成の偏りがある可能性を認めるとしても、いわばそれは一般的な可能性である。それをもって、現在溝資料でしか確認できないことを積極的に評価できるとは、私には思えない。

(21)　金沢市二口六丁遺跡第1次調査(下記文献)では、小溝Aで擬凹線文有段口縁系甕と布留系甕の共伴が指摘されている。しかし、両者は地点を異にしており(10m前後離れている)、しかも布留系甕は小片である。少なくとも、良好な一括資料とは考えない。

南　久和・古池　博・森川洋子・筆者　『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

(22)　a　南　久和・楠　正勝・他　『金沢市畝田・寺中遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。第1号

方形周溝墓。

b　註(12)文献　A区土器溜り。

c　註(18)文献　「白江・ネンブツドウ」7号溝上層。他。

なお、布留系甕による斉一化の時期や、斉一化にいたる過程の理解についても、谷内尾編年(註(3)a～c文献)と漆町編年(註(2)a文献)とは大きなくい違いをみせている。「白江式」の設定に密接に関連しかつより大きな問題であるが、本節では全くふれることができなかった。今後の課題としたい。

(23)　筆者　「月影式土器の成立」註(1)文献(『報告編』)。　(24)　註(3)a～c文献。

(25)　橋本澄夫　「弥生文化の発展の地域性―北陸―」『日本の考古学』　III　河出書房　1966年　東京。

谷内尾氏は、橋本氏が設定した「猫橋I・II式」(上記文献)のうち、「猫橋II式」に「法仏式」が対応するとしている(註(3)a文献)。

(26)　「猫橋式」の標式資料とされたものは、組成的にも出土状況の点からも決して良好な資料とはいえないが、本文で述べている「月影式」の前段階としての組成をもたず、さらに古相を呈する土器群(橋本氏の設定(註(25)文献)によれば「猫橋I式」にあたる)を、ここでは「猫橋式」と呼称する。具体的な検討はできていないが、それは「月影式」を含めた第V様式期を二分する際の前半期の加賀の土器様式と考えている。

(27)　註(8)でいうa・bにあたる。細頸壺がその代表である。その出現は、在地系土器を飛躍させる(本文でいう派生形式の出現)ようにみえる点で、在地系土器を変質・解体・消滅させる前項で検討した「白江式」におけるそれとは異質なものと考える。

(28)　「猫橋式」においても類似器種・形式は存在するが、「月影式」の前段階における類似性は、それとは質的にも量的にも異なると考える。ただし、そうした類似器種・形式のなかにも地域差は存在しており(本項・第3節参照)、また甕にみられる地域性は、下記文献等ですでに指摘されているとおりである。

a　谷内尾晋司　「鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置(T18調査区出土土器を中心に)」『鹿首モリガフチ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。

b　北野博司　「宝達山山麓地域における「月影式」併行期の土器群」註(1)文献(『報告編』)。

(29)　本文でまとめたように、谷内尾氏は「月影I式」に主として四つ(①～④)の概念を与えているが、そのうち、私は③を「月影I式」の主要概念と考えている。②については、土器組成や土器圏が流動性に富むために、現状ではそのようみえるという可能性を留保しておきたい。④については、遠隔地の外来系土器にとりあえず限定して理解する。「月影式」における「強固な在地性」とは、独自な土器組成をもつという意味ではあっても、隣接地域の土器を含まない(「閉鎖性」)こと、あるいは土器形式(の一部)を共有しない(「排他性」)ことを意味するとは考えていない。(①については註(65)参照。)

(30)　能登が「月影式」の前段階の土器圏に含まれるとは考えていないが、加賀の該期の良好な資料が少ないため、その理解を助ける意味で、広義の「北陸型」にふさわしい類似器種・形式に限り援用する。

(31)　谷内尾氏が「法仏I・II式」の標式とした「法仏A群・B群土器」(註(3)a文献)は、すでに谷内尾氏による資料操作をへたもの(それ自体は否としない)であり、出土状態、遺構の切り合い関係、資料の共伴関係、抽出されなかった資料の実態などが全く不明である。事実上それらを検証する方法がないため、ここではその組成としての検討を放棄する。(将来、該期の土器の形式組列と型式変化が明瞭に把握された時点で、個々の土器についての検討は可能である。)

(32)　宮本哲郎・楠　正勝・筆者・他　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。B-1区　T-1(溝)。他。(註(40)文献による。)

(33)　出越茂和・他　「金沢市額谷ドウシンダ遺跡」『金沢市額谷ドウシンダ遺跡　金沢市無量寺B遺跡・II』金沢市教育委員会　1984年　金沢。円形周溝状遺構。他。

(34)　註(9)文献。80-3号住居跡。他。

(35)　西野秀和・他　『津幡町谷内石山遺跡』　津幡町教育委員会　1980年　石川県津幡町。第1号住居址。他。

(36)　金沢市金石東遺跡出土資料。昭和55年石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。下記文献所収。

谷内尾晋司　「内浦町の集落遺跡と古墳」『内浦町史』　内浦町役場　1981年　石川県内浦町。

(37)　昭和60・61年高松町教育委員会調査。調査担当者の折戸靖幸氏の御教示による。実見。同遺跡からは、「月影式」の前段階の墳墓が検出されるとともに、多量の供献土器等が出土している。

(38)　谷内尾晋司・垣内光次郎・越坂一也・山本直人・筆者・他　『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。C16溝上層。他。

(39)　「月影式」の前段階にあっては、細頸壺と大型器台がそのまま結合したような、より祖型に近い形態のものが存在する可能性はある。

(40)　宮本哲郎「台付装飾壺の系譜――北加賀の資料を中心とした基礎的考察――」『石川考古学研究会会誌』第29号　石川考古学研究会　1986年　金沢。

(41)　戸澗幹夫・芝田　悟・三浦純夫・山本直人・筆者　『近岡遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1986年　金沢。大溝。他。

(42)　a　小松市佐々木アサバタケ遺跡出土資料。昭和59年石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。

b　野々市町押野タチナカ遺跡出土資料。昭和55～59年野々市町教育委員会調査。整理中。調査担当者の吉田　淳氏の御教示による。実見。他。

ともに、岡山県久米町法事坊遺跡出土壺(下記文献所収)に酷似する。

c　『世界陶磁全集　1　日本原始』　小学館　1979年　東京。

(43)　谷内尾晋司・中島俊一・田中孝典・筆者・他　『鹿首モリガフチ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。T18調査区(無文有段口縁壺、孔は一対、赤彩品。)。他。

(44)　このほか、加賀での確実な例はないが、二重口縁壺類似の中型有段口縁壺(下記a・b)、「月影式」に主体的な形式として認められる(下記b)大型有段口縁壺(下記c)が能登で確認できる。ともに出現(・派生)形式と考える。

a　註(1)文献(『資料編』)。羽咋市寺家遺跡(石川県立埋蔵文化財センター調査)SK-12出土資料。細頸壺・有孔鉢等を伴う。

b　註(9)文献。81-2号住居跡。他。

c　註(23)文献。鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡(昭和60年(～)石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。)第2号土坑出土資料。二重口縁壺類似の中型有段口縁壺・細頸壺・有孔鉢等を伴う。

(45)　金沢市西念・南新保遺跡出土資料(下記文献所収)。昭和59年金沢市教育委員会調査。整理中。調査担当者の楠　正勝氏の御教示による。他。

宮本哲郎　「装飾器台等の展開―これまでの検討から―」註(1)文献(『報告編』)。

(46)　a　谷内尾晋司　「金沢市七ツ塚墳墓群」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』　I　石川県教育委員会　1976年　金沢。　第1号墓。他。

b　吉岡康暢・小島芳孝・他　「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』　II　石川県教育委員会　1976年　金沢。第21号竪穴。他。

「猫橋式」からの系譜をもつ棒状無段脚高杯(下記c)との関連も軽視できないため、装飾性の弱いもの(上記b)については若干の留保を伴うが、有段部に突帯を貼付する等装飾性の強いもの(上記a)は確実に出現形式と考える。

c　註(32)文献。F区T-1。他。棒状無段脚高杯は「月影式」には継承されない。

(47)　a　註(9)文献。80-3号住居跡出土小型高杯。他。

b　棒状有段脚高杯については、良好な資料に乏しいが、本書第32図235などを考えている。

(48)　註(46)b。高松町中沼C遺跡でも確認される(註(37))。

(49)　註(9)文献。他。

(50)　北野博司　「5区南半最下層出土遺物」『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会　1982年　加賀。

(51)　註(32)。他。

(52)　宮本哲郎・他　『金沢市無量寺B遺跡』　金沢市教育委員会　1982年　金沢。溝状遺構。他。

(53)　註(37)。

(54)　中島俊一　『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会　1978年　金沢。東調査区。他。

(55)　註 (52)。他。

(56)　西野秀和・他　『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。

(57)　註(33)。　(58)　註(52)。　(59)　註(41)。　(60)　註(33)。

(61)　戸原和人　「丹後古殿遺跡の調査」『第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』　財団法人 大阪文化財センター　1983年　大阪。

(62)　四柳嘉章　「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成』　本編Ⅰ　東京堂出版　1971年　東京。

(63)　註(9)。82-3号住居跡。他。

(64)　かつて、谷内尾氏のいう「法仏Ⅱ式」のなかに、「月影式」の主たる土器形式が組成として出現する段階があるとした（註(23)文献）根拠はここにある。しかし現在、本文でも述べているように、それは「月影式」の前段階そのものと考えている。かつての見解を撤回し修正する。

(65)　「月影式」の前段階と「月影式」との間に(大きな)画期を求めようとする谷内尾氏のこうした編年観は他にもみられる。すなわち、金沢市七ツ塚墳墓群(註(46) a 文献)第1号墓の再生時期と高地性集落の主要出現期を、ともに「月影Ⅰ式」としている点である(註(3)a～c 文献)。

土壙墓(12基)群・特殊竪穴状遺構の占地する台状墓上に、スタンプ施文土器(第45図7・8)等を破砕・撒布することにはじまる第1号墓の再生時期は、当該土器を型式学的にみる限り、決して「月影式」の前段階を下らない。このことは、谷内尾氏自身の認めるところである(註(36)文献)。塚崎遺跡(註(46) b 文献)等の周辺遺跡との関連(ここでは具体的な検討はできないが)を重視したとしても、それをあえて「月影Ⅰ式」まで下げる根拠や必要はないと考える。その再生が七ツ塚墳墓群における画期であるならば、それもまた「月影式」の前段階のうちにあるとすべきであろう。

また、県内の高地性集落については、調査例が少なく明言はできないものの、存続期間をほぼ確認できる宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡例(下記文献)は、「月影式」の前段階～「月影Ⅰ式」(並行)である。現状では、「月影Ⅰ式」に出現する高地性集落は確認できない。

米沢義光　『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1980年　金沢。

(66)　1と2・3が単純同一形式であるとの確証はない。2・3と確実に同一形式でより古相を示す資料がないわけでないが、それらは逆に大型器台(B)の出現以前のものであることが保障されていない。したがってここでは、「猫橋式」であることが確実な1を掲げたが、それにはあまりこだわらない。問題は1と2・3が同一形式であることではなく、2・3が「猫橋式」からの系譜をもつことにあるからである。

(67)　註(46) b 文献。　(68)　註(37)。

(69)　派生の要因は外来系土器（細頸壺）の出現にあるとしても、なぜ法量の異なる形式をいきなり派生させることによってそれに呼応したのかについては、今後なお検討の必要がある。

(70)　将来、該期の土器の実態が明瞭になれば、たとえば②と③の要素的結合や、①のなかに純粋に①だけの型式変化では捉えきれないもの(②・③の影響を受け、註(8)でいう c のような変化を示すもの)などが認められる可能性もあり、問題はより複雑になると考えている。

(71)　上田三平　『若狭及び越前に於ける古代遺跡　福井県史跡勝地調査報告』　第一冊　福井県　1920年。

(72)　鳥居龍蔵　「銅鐸使用者と吾人祖先先駆者との接触」『有史以前の日本』　磯部甲陽堂　1925年　東京。

(73)　直良信夫　「二、三弥生式土器の紋様について」『考古学雑誌』　第19巻第4号　1929年。

(74)　小林行雄　「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』　第1巻第4号　1929年。

(75)　倉光清六　「伯耆弥生式土器の一二の文様」『考古学』　第3巻第3号　1932年。

(76)　今里幾次　「播磨弥生式土器の動態(二)」『考古学研究』　第16巻第1号　1969年。

(77)　名越　勉・甲斐忠彦　「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』　第57巻第4号　1972年。

(78)　他に、石野博信・村上紘揚・松下勝の三氏が、下記文献でスタンプ文・貼り付け施文の検討をおこなっているが、今回は内容の確認ができていない。

「播磨・吉福遺跡」『兵庫埋蔵文化財調査集報』　第2集　1974年　神戸。

(79)　註(36)文献。

(80)　桑原隆博　「広島県内出土のスタンプ施文法による連続渦文を有する土器について」『芸備』　第11集　芸備友の会　1981年。

(81)　萬谷幸美　「美園遺跡出土のS字状浮文土器について」『美園』　大阪府教育委員会　財団法人 大阪文化財センター　1985年　大阪。

(82)　陽刻・大型であることから、器面調整としての要素をあわせもつような印象を受ける。

(83)　文様の名称については、原則として下記文献にしたがう。

佐原　真・町田　章　「和歌山市有本出土銅鐸」『和歌山県文化財学術調査報告書』　第三冊　和歌山県教育委員会　1968年　和歌山。

(84)　出雲美保関出土土器例(註(72)文献)もA類の可能性があると考えている。また、伯耆大谷出土土器例(註(75)文献)は、陽刻渦文であるが、渦の外周がのびない点では後述の陰刻渦文にも類似する。

(85)　『巨摩・瓜生堂』　大阪府教育委員会　財団法人 大阪文化財センター　1981年　大阪。

(86)　京都府網野町林遺跡出土土器例(下記文献)もB類の可能性がある。

『林遺跡発掘調査報告書』　京都府網野町教育委員会　1977年　京都府網野町。

(87)　「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』　1　岡山県教育委員会　1973年　岡山。

(88)　『百間川当麻遺跡　2』　岡山県教育委員会　1982年　岡山。

(89)　註(46) a 文献。

(90)　第6表作成後、京都府久美浜町橋爪遺跡(下記文献)からも出土していることを知った。

「橋爪遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報　第2分冊』　京都府教育委員会　1981年　京都。

なお、福井市曽万布遺跡から、口縁部にC類類似のヘラ描き文様を施した土器(鉢？)が出土している。中司照世氏の御教示による。実見。

(91)　註(81)文献。他。

(92)　第6表作成後、京都府久美浜町橋爪遺跡(註(90)文献)からも出土していることを知った。他に、福井県福井市浜島、同坂井町東でもそれぞれ1点出土している。(中司照世氏の御教示による。)また、註(168)文献等に、福井県越前町厨1号洞穴からスタンプ施文土器が出土したとの記述があるが、実測図等の確認はできていない。

また、兵庫県豊岡市立石墳墓群出土土器例(下記文献)もD類の可能性がある。

『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』　兵庫県教育委員会　1986年　神戸。

(93)　註(81)文献。　(94)　註(62)文献。　(95)　註(14)文献。

(96)　上田三平　『越前及若狭地方の史跡』　三秀舎　1933年　東京。

このほか、福井県坂井町新庄からも1点出土している。中司照世氏の御教示による。

(97)　このほか、羽咋市吉崎・次場遺跡(石川県立埋蔵文化財センター調査)でも数点出土している。福島正実氏の御教示による。一部実見。

(98)　櫃本誠一　『日本の古代遺跡　2　兵庫県北部』　保育社　1982年　大阪。

(99)　『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』　II　兵庫県教育委員会　1983年　神戸。

(100)　『田能遺跡発掘調査報告書』　尼崎市教育委員会　1982年　尼崎。

(101)　『池上遺跡　第二分冊　土器編』　財団法人　大阪文化財センター　1979年　大阪。

(102)　『亀井・城山』　財団法人　大阪文化財センター　1980年　大阪。

(103)　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎　『大和唐古弥生式遺跡の研究』　1943年　京都。

(104)　昭和56年石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。小嶋芳孝氏の御教示による。実見。

(105)　a　鎌谷木三次　「播磨国辻川発見合蓋土器」『兵庫史学』　第3号　1955年。

b　増田重信　「連続渦文を施文せる弥生式土器片」『古代学研究』　第12号　1955年。

c　註(76)文献。

(106)　田代　弘　「石本遺跡出土の渦巻文のある弥生土器について」『京都府埋蔵文化財情報』　第21号　財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター　1986年　京都。
(107)　田代　弘　「青野遺跡出土の渦巻文のある土器」『京都府埋蔵文化財情報』　第20号　財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター　1986年　京都。
(108)　昭和58年石川県立埋蔵文化財センター調査。越坂一也氏の御教示による。実見。
(109)　昭和49～51年石川県教育委員会調査。谷内尾晋司氏の御教示による。各種資料の提供をうけた。
(110)　藤田富士夫・駒見和夫　「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』　第7号　富山考古学会　1981年。
(111)　『富山県滑川市　魚躬遺跡発掘調査報告書』　滑川市教育委員会　1973年　滑川。
(112)　「戸字大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　(2)　広島県教育委員会　1979年　広島。
(113)　藤井　駿　「(表紙絵)」『吉備考古』　第85号　1952年。
(114)　蒼浪子　「表紙絵渦文につきて」『吉備考古』　第91号　1956年。
(115)　「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　7　岡山県教育委員会　1975年　岡山。
(116)　「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』　岡山県教育委員会　1972年　岡山。
(117)　「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　9　岡山県教育委員会　1975年　岡山。
(118)　『播磨・長越遺跡』　兵庫県教育委員会　1978年　神戸。
(119)　『荒神山遺跡調査概報』　兵庫県教育委員会　1970年　神戸。
(120)　『会下山遺跡』　芦屋市教育委員会　1964年　芦屋。
(121)　『摂津加茂』　関西大学　1968年　吹田。
(122)　藤沢一夫　「上津島遺跡出土の連渦文弥生式土器」『豊中市史』　豊中市役所　1960年。
(123)　註（18）文献。
(124)　富山県立山町教育委員会調査。下記資料掲載。第6表鋸歯文9については実見。昭和61年度報告書刊行。
森　秀典　「立山町辻遺跡・浦田遺跡の発掘調査及び出土遺物について」　第73回富山大学考古学談話会資料　1987年。
(125)　『京都府埋蔵文化財情報』　第21号　財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター　1986年　京都。
(126)　『福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群』　福井県教育委員会　1966年　福井。
(127)　『福井県における弥生式土器集成』　福井考古学研究会　1970年　福井。
(128)　魚谷鎮弘・古川　登　「福井市菖浦谷B遺跡採集の土器について」『福井考古学会会誌』　第2号　福井考古学会　1984年　福井。
(129)　「荒木遺跡」『福井県史』　資料編13　考古―図版編―　福井県　1986年　福井。
(130)　中司照世氏の御教示による。各種資料の提供を受け、D類13～17については実見させていただいた。
(131)　『河和田遺跡発掘調査概報』　坂井町教育委員会　1983年　福井県坂井町。
(132)　「小杉町囲山遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告』　II　富山県教育委員会　1972年　富山。
(133)　久々忠義「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』　上市町教育委員会　1982年　富山県上市町。
(134)　『富山県魚津市　佐伯遺跡発掘調査概要』　富山県教育委員会　1979年　富山。
(135)　「狐崎遺跡」『三条市史』　資料編　第1巻　三条市役所　1981年　三条。
(136)　「館遺跡」『三条市史』　資料編　第1巻　三条市役所　1981年　三条。
(137)　『大沢遺跡・II』　新潟大学考古学研究室　1982年　新潟。
(138)　石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。田嶋明人氏の御教示による。実見。
(139)　石川県立埋蔵文化財センター調査。整理中。戸澗幹夫氏の御教示による。第6表E類12を除き実見。
(140)　出越茂和・他　『金沢市無量寺B遺跡III・IV』　金沢市教育委員会　1986年　金沢。
(141)　宮本哲郎　「金沢市近岡遺跡発掘調査」『金沢市大友・近岡遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

(142) 註 (36) 文献。

(143) 土肥富士夫・他 『矢田遺跡』 石川県七尾市教育委員会 1986年 七尾。

(144) 『糸魚川市史』 資料集1—考古編— 糸魚川市役所 1986年 糸魚川。
形式については、坂井秀弥氏より御教示を受けた。

(145) 『島根県考古資料集成 1』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1978年。

(146) 『青木遺跡発掘調査報告』 III 鳥取県教育委員会 1978年 米子。

(147) 註(97)。 (148) 註(83)文献。 (149) 註(36)文献。

(150) 石川県立埋蔵文化財センター調査。福島正実氏の御教示による。実見。

(151) 註(133)文献。 (152)註(145)文献。第6表陰刻渦文1と同一個体。

(153) 註(87)文献。 (154) 註(77)文献。

(155) 御船恭平 「岡山県三明寺の押型文弥生式土器について」『古代学研究』 第6号 1952年。

(156) 藤田憲司 「倉敷市上東遺跡のスタンプ文のある器台」『倉敷考古館研究集報』 第8号 倉敷考古館 1973年 倉敷。
上記文献では、岡山県大道𠮷遺跡例(下記文献)に言及しているが、実測図等を確認できていない。
神原英明 「美作久米南町別所発見の銅剣」『古代吉備』 第6集 1969年。

(157) 註(32)文献。G-1区T-2(溝)。他。

(158) 他に石川県内では、加賀市敷地天神山、小松市千代、金沢市押野西、同西念・南新保、羽咋市吉崎・次場の各遺跡からスタンプ施文土器が出土している。それぞれ平田天秋、湯尻修平、南 久和、楠 正勝、福島正実の各氏の御教示による。正式報告を待って検討したい。

(159) 細別にあたっては、実測図・拓本・模式図・写真・実物を綜合して判断したため、それが比較的可能な石川県内の資料を対象とした。36例は、そのうちⅠ～Ⅳに分類し得た資料の数である。

(160) それぞれ、20、14、10㎜前後を標準とするが、実物を計測できなかったもの、型ズレがあるものなどがあり、厳密な区分とはいえない。また他の要素に幅・沈線の太さなどがあるが、今回は具体的な検討はできなかった。

(161) 谷内尾氏の分類(註(36)文献)では、氏のA-aが本書ⅢA$_1$、A-bがⅢC$_{1b}$、A-cがⅢA$_2$、B-aがⅢC$_{1a}$、B-bがⅣCbにそれぞれ対応する。本項での検討は、谷内尾氏の論考と御教示に負うところが大きい。

(162) 銅鐸文様(註(83)文献)でいう連続渦文第Ⅰ種に類似する。

(163) 銅鐸文様(註(83)文献)でいう連続渦文第Ⅱ種に類似する。

(164) 註(36)文献。

(165) A～Cがそのまま新古関係のもとにある「型式」として成立するとは考えていない。現状では、Aは形式分類の基準以上の意味をもたない。ただし、複雑な文様であるBについては、Mサイズを通有とするとは考えにくく、それぞれLサイズの存在を想定し得ると考える。その場合、同一形式(たとえばⅡB$_1$等)内では、L→Mという新古関係が一般論としては成立するであろう。逆にⅢC$_2$・ⅣはM・Sサイズであるからこそ文様として成立するのであり、矮小化されたそれらの文様に、Lサイズの存在を想定するのは難しい。。Ⅲ(ⅢC$_2$については、ⅢA・B・C$_1$)から派生する形式と考える根拠のひとつである。
いずれにせよ、形式・法量・施文のあり方(鋸歯文が横位に施されたり、D類が縦位に施されたり(第7表69)、施文規範を逸脱しているものがある)などから、一定程度の差異は指摘し得るが、原体が伝世しないという保障がないなどの問題もあり、施文土器の細かな時間的な位置付けに際して、スタンプ文の果す役割はそれほど大きくないと考える。

(166) 「傾きを異にする斜線文」(註(42)c文献)帯をいう。第45図1参照。

(167) 垣田修児・他 『根上町中庄遺跡』 石川県根上町教育委員会 1984年 石川県根上町。

(168) 上野与一 「中部 北陸地方」『新版 考古学講座 5 原史文化・下』 雄山閣出版 1979年 東京。

(169) 昭和49～51年石川県教育委員会調査。実見。

(170) 高堀勝喜・吉岡康暢 「松任町周辺の遺跡と調査」『加賀三浦遺跡の研究』 石川県教育委員会 松任町

（現松任市）教育委員会　1967年。

(171)　宮本哲郎　「八日市ヤスマル遺跡分布調査の概要」『昭和54年度　金沢市埋蔵文化財調査年報』　金沢市教育委員会　1980年　金沢。

(172)　出越茂和・他　「金沢市無量寺B遺跡・II」『金沢市額谷ドーシンダ遺跡　金沢市無量寺B遺跡・II』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

(173)　増山　仁・他　『金沢市二口六丁遺跡II――第4次調査報告――』　金沢市教育委員会　1986年　金沢。

(174)　楠　正勝・宮本哲郎　『金沢市南新保三枚田遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

(175)　表採資料。谷内尾晋司氏の御教示による。D類66については資料の提供を受けた。

(176)　第V様式期後半＝「法仏式」という位置付けについては前節で若干述べた。「法仏式」・「月影式」は、漆町編年(註(2)a文献)でいう段階(1～5)のようなレベルでは一連のものと考えるが、「猫橋式」と「月影I式」の様相が不明瞭で、他地域との並行関係も同様にはっきりしないことなどから、第V様式期後半に「法仏式」→「月影式」が充当するかどうかは明言できない。「法仏式」の上限が畿内での唐古・鍵遺跡第45号竪穴下層出土土器群(註(103)文献)出現の画期に対応し、「白江式」を「庄内式」並行、「月影式」をそれ以前とした見解(註(23)文献)は、その後具体的な検討がほとんどできていない。良好な搬入土器資料等が少ないことのほか、何をもって「庄内式」(並行)とするのかという問題がある。後者については、畿内でも種々議論されている(下記文献等)ところであり、その進展に注目するとともに、北陸における個々の土器様式の内容の一層の明瞭化、搬入土器資料等の検討をとおして、今後時代(様式)区分や並行関係の問題も具体的な課題としていきたい。

a　米田敏幸　「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』第1集　考古学を学ぶ会　1985年。

b　寺沢　薫　「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書　第49冊)　橿原考古学研究所　1986年。

c　米田敏幸　「《書評》　橿原考古学研究所編　『矢部遺跡』」『古代学研究』　第112号　1986年。

d　嶋村友子　「河内における庄内式の甕形土器」『古代』　第82号　早稲田大学考古学会　1986年。

(177)　註(76)文献。

(178)　スタンプ施文土器と同一形式で、狭義のスタンプ文以外の文様(竹管文、C字(三日月)状刺突列等)で加飾される土器(第45図2・3、他)も少なくない。さらに、北加賀北部(高松町中沼C遺跡(註(37))他)～能登(七尾市矢田遺跡(註(143)文献)・志賀町鹿首モリガフチ遺跡(註(43)文献)。他。)にかけては、赤彩文様施文土器が多く確認されている。

(179)　概ね桑原隆博氏の見解(註(80)文献)に類似するものと考えている。

(180)　北陸東部(能登・越中・越後)では、台付装飾壺がこれに対応する可能性がある。両者の分布は重複する(註(45)文献)が、それにたいする見解は、註(29)で(一般論ではあるが)述べた。

(181)　註(45)文献。他。

(182)　宮本哲郎・筆者　「装飾性を帯びた器台形土器(いわゆる装飾器台)について」註(14)文献。

(183)　松任市竹松遺跡出土例。註(62)文献。

(184)　金沢市近岡遺跡大溝出土例。註(41)文献。第28図205。

体部に穿たれた大型透穴は、逆三角形と横位三日月形(上に凸)よりなり、交互に6組12個配置されている。三角形の大型透穴をもつスタンプ施文土器は、金沢市七ツ塚墳墓群(註(46)a文献)より出土している。(第7表D類61・62。61は第6表鋸歯文スタンプ4と同一個体。第45図7・8。)

J字状透穴は、註(41)文献では「ワラビ形」透穴と仮称したもので、口縁部に12個穿たれている。高松町中沼C遺跡では、同形のスタンプ文(第43図参照、J字状渦文と仮称する。)がD類・E類スタンプ文とともに細頸壺(D類65・E類19、同一個体)に施文されている。(註(37)。実物はしの字状で、横位に施文されている。)J字状透穴は、D類スタンプ文とS字状浮文との関係と同様、J字状渦文の形骸化したものと考えたい。

J字状渦文は、小松市漆町遺跡(第6表E類4と同一個体)、金沢市押野西遺跡(南　久和氏の御教示によ

る。実見。)でも出土しており、それぞれ施文器種・形式、スタンプ文自体の形態、施文のあり方、文様構成等が異なる。独立した形式なのか、B類・D類スタンプ文等から派生したものなのかといった問題もあるが、いずれも整理中の資料であり、正式報告を待って検討したい。

(185) 註(36)文献。

追　記

本章執筆後、鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡(昭和60年(〜)石川県立埋蔵文化財センター調査)からも、D類スタンプ文・J字状渦文施文土器(各1点)が出土しているのを確認した。前者は長さ30㎜を越えており、第3節での分類でいうLサイズよりもさらに長く、LLサイズとでもすべきものである。

また、羽咋市吉崎・次場遺跡でも、過去に鋸歯文スタンプ(E類スタンプ文を伴う)施文土器が出土している(下記文献)のを知った。

橋本澄夫　「次場遺跡」『羽咋市史』　原始・古代編　羽咋市役所　1973年　羽咋。

図　　版

（図版中の遺物番号は本文挿図および遺物番号に一致する）

図版第１　遺跡とその周辺（1947年撮影）

図版第２　第１次調査

清　掃　作　業　状　況（東より）

実　測　作　業　状　況

土　器　出　土　状　況

発　掘　作　業　状　況

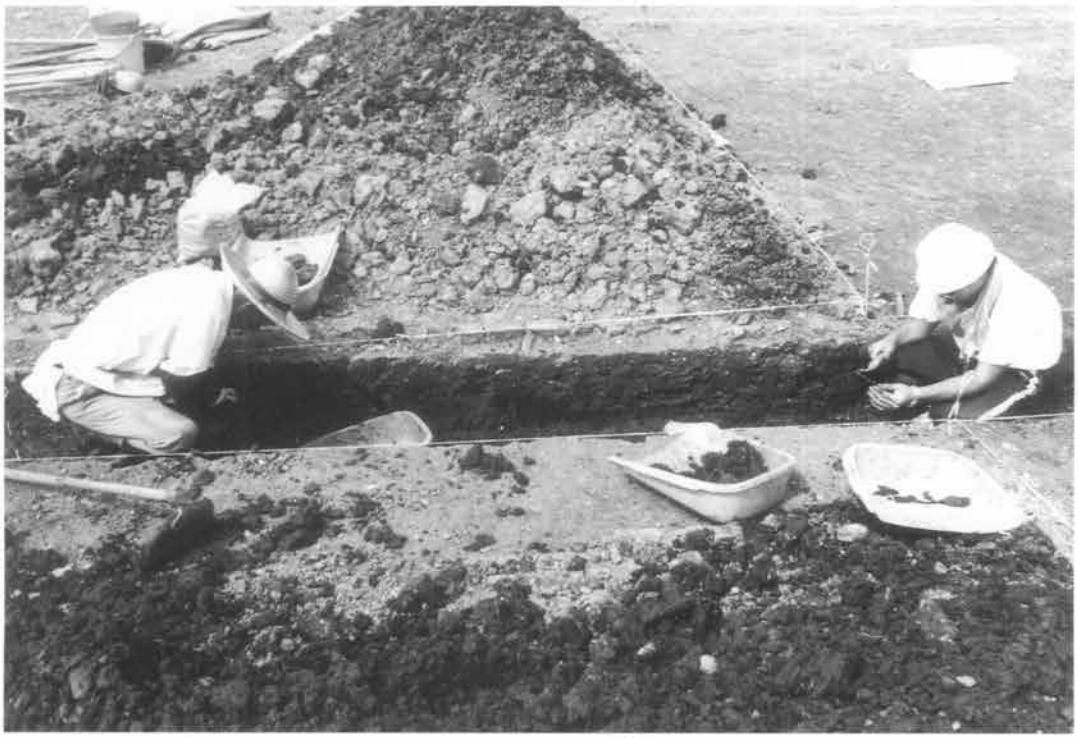
完掘状況（西より）

トレンチ調査（南より）

図版第 4　第 2 次調査

溝状遺構土器出土状況（南より）

発 掘 作 業 状 況

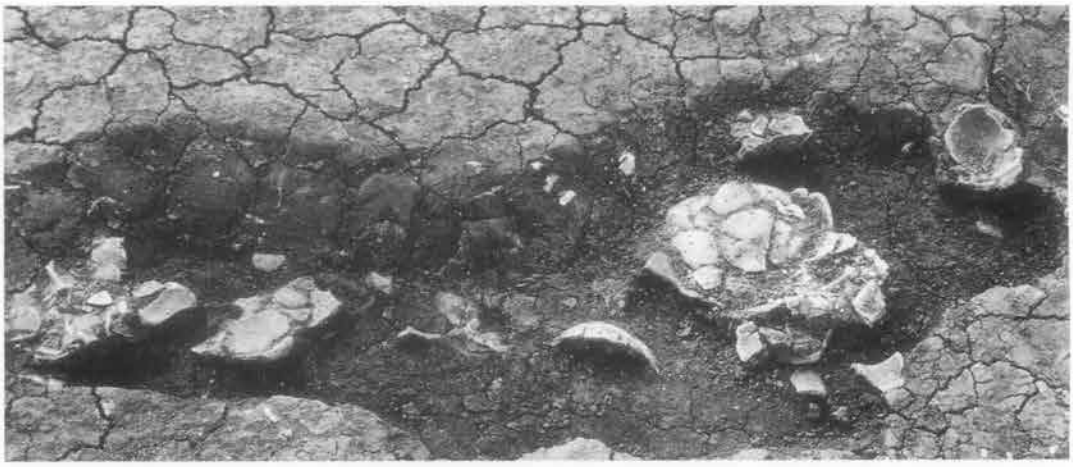


８区たちわり調査状況

調査区平面図作成作業状況

図版第６　第２次調査

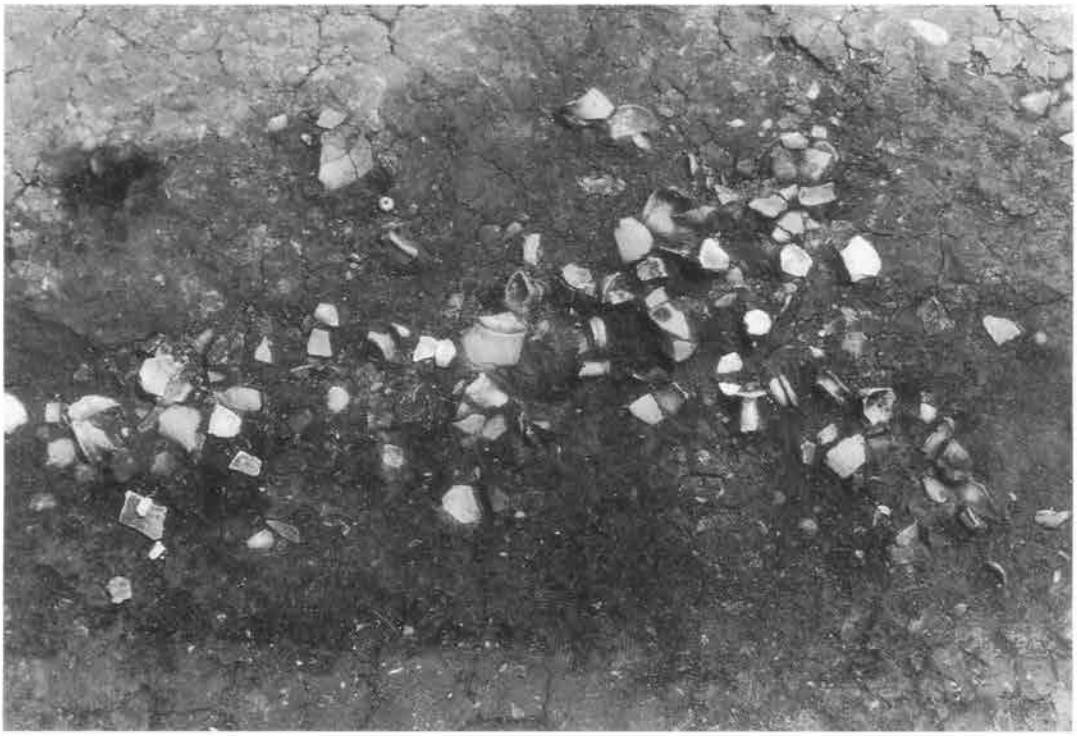
土器出土状況（２区土器群６、東より）



土器出土状況（４区土器群８、東より）

土器出土状況（６区土器群13、西より）

土器出土状況（６区土器群14、西より）



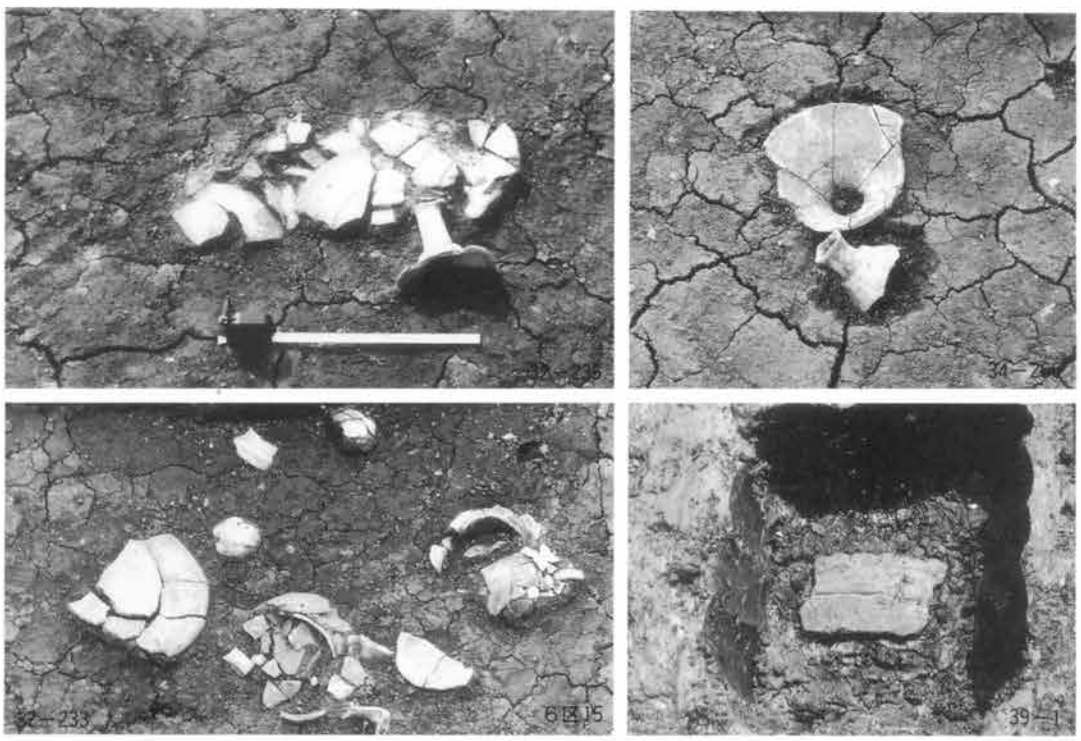
土器出土状況（７区土器群18、西より）

図版第８　第２次調査

土器出土状況（９区土器群23、西より）

土器出土状況（10区土器群25、西より）

土器（35－268、38－325他）出土状況（7区土器群16、西より）



土　器　出　土　状　況

図版第10　出土土器

15－21

25－125

20－82

26－135

28－156

35－274

第２次調査出土弥生土器・土師器

24－116

27－142

28－153

25－126

29－164

第２次調査出土弥生土器・土師器

図版第12　出土土器

第２次調査出土弥生土器・土師器

36－301

38－325

38－322

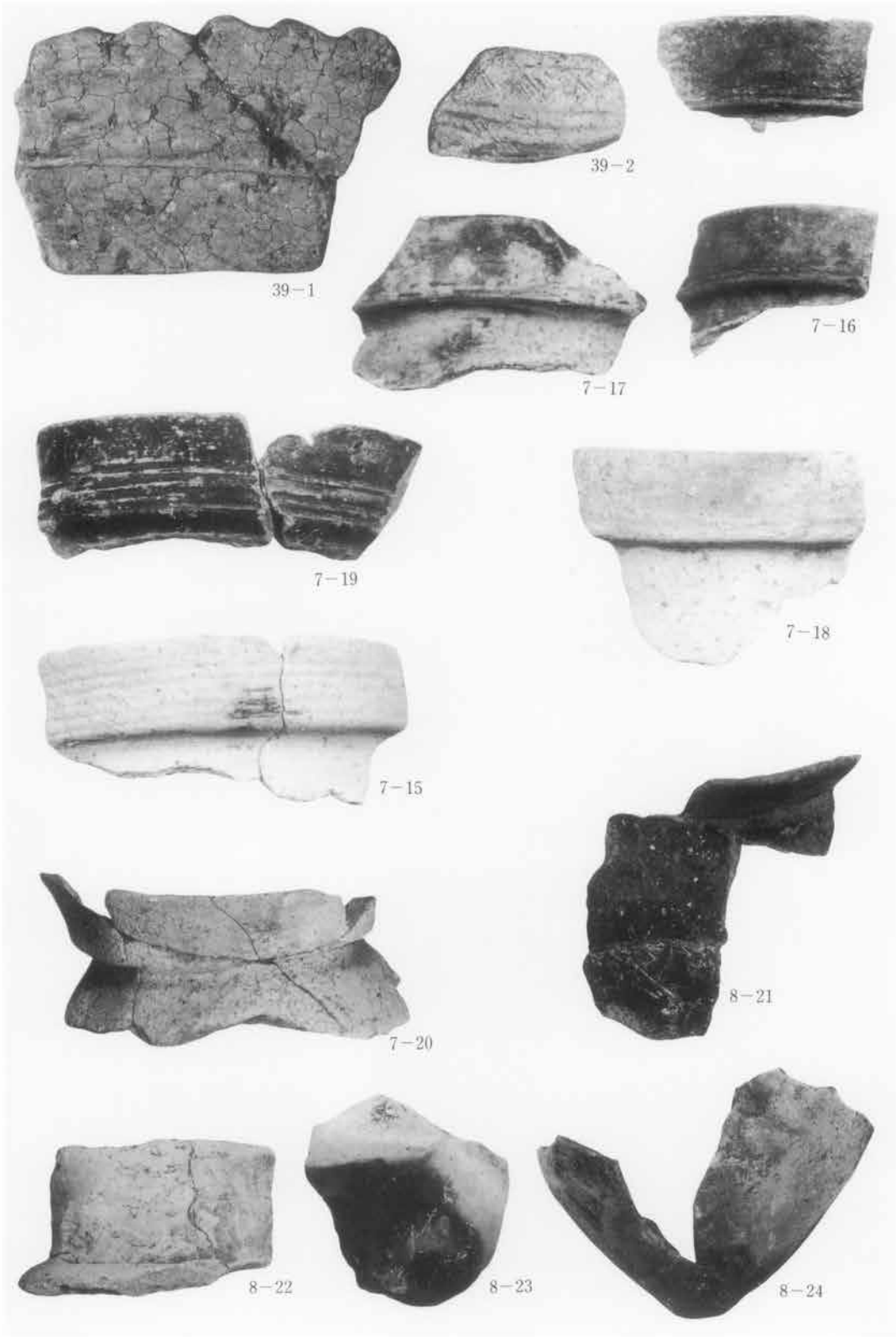
29－171

34－264（部分　1/1）

38－334

第２次調査出土弥生土器・土師器

図版第14　出土土器（第1次弥生土器・土師器、第2次縄文土器・弥生土器）



39－12

39－13

7－9

39－11

7－11

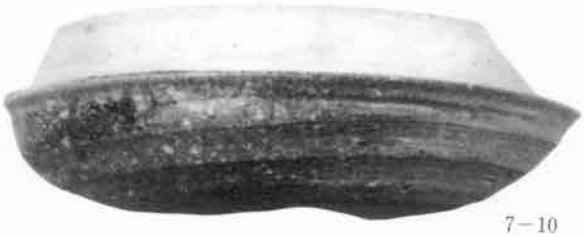
39－17

7－8

39－14

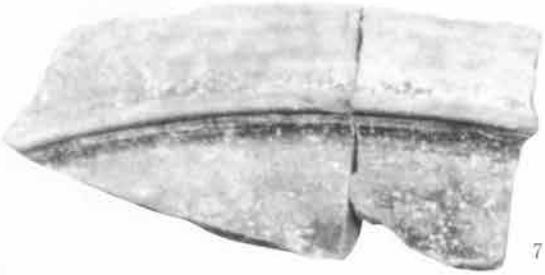
39－18

39－16


7－10

39－15

39－9


7－14

39－8

図版第16　出土土器（須恵器）・古銭

39－10　39－4　39－3

7－13　39－6　8－32

39－21　7－12

39－19　39－22

39－20　39－5　39－7

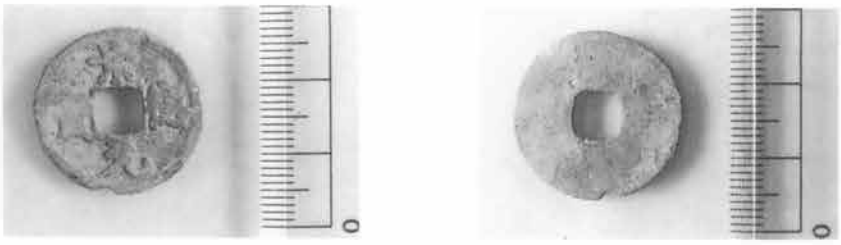


表　39－27（景德元宝）　裏

吉　竹　遺　跡

昭和62年3月25日　印刷
昭和62年3月30日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話(0762)43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社

© 石川県立埋蔵文化財センター　1987
本文用紙：書籍用紙イエローＡＰ　72kg
表　　紙：シルク　210kg
写真図版：ダイヤコート　135kg